
紅い石~The Red Stone Story's~

紅ノ芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い石~The Red Stone Story~

【Nコード】

N8349P

【作者名】

紅ノ芽

【あらすじ】

ある者は、幼い頃突然失踪した兄を見つけるために。
ある者は、一族の末裔として『ある物』を探し出すために。
またある者は、己が中に秘められた力を滅するために。
彼らの目的は最終的に交わってしまうことになる・・・。

1話（前書き）

オンラインゲームのREDSTONEというものを題にして書いてます。

ゲームとは異なりますので注意してください。

若干のグロテスクな表現が入る恐れがありますので、それも注意願います。

1話

大福みたいな月が西に傾いている。

月の下、ここら一帯はほんわか明るくみえる程度、上からの光が左のほうの海を照らす。

目の前には道、両横は木で道に沿って茂っている。

月光がこの木のカーテンからちらちらと見え隠れする。

大福はまだ一口も食べられていない。

欠けることなく空にある。

右には死者を祀る納骨堂。

こんな時間にこの道を通るのは誰一人としていない。

大きな大きなスギの木が納骨堂の目の前にある、まるで神様。

そして今、そこを通り過ぎようとしている。

目の先には長い髪の人、こちらだけを見つめて突っ立っている。

その人は道の真ん中、スギの木の陰をじいっと動かない、こっちは道を全力で走っている。

恐怖と欲望からか、男は走りながら腰の左右についているホルダーから短剣を取り出した。

なんにもためらわずに。

手の力を少し緩めその人に突っ込んで行っった。

相手の目の前で急停止、体を捻って肩から腕全体の力を抜き鞭のよう使う。

そして、その鞭の先には鋭い短剣、一気に腕を振り切った。

だが、当たることなく空を切る。

後ろにすうっとかわしたその人は、大きなスギの陰の中でまた止ま

った。

柔らかな潮風が吹く、動くのは二人のマントのみ。

木々は何も無いかのように、微動もしない。

相手を睨みながら唇をかんだ。

つばを飲み込みにくい。

意を決して長髪の人に言った、「ここを通りたいんだ。すまないがそこを避けてくれないか？」

だが、避けてくれそうにない。

それとは逆に懷に手を入れ少し引き抜く、戦闘態勢に入ったようだ。こちらはすでにその態勢に入っている、より一層緊張を高めた。

それから少し間があって、長髪の人の口が動いたように見えた。なにかを呟いているのだろうかこちらには何も聞こえない。

それを理解しようとするよりも心の中には欲というものが、唯一つ渦巻いていた。

『はやく追いつかなければ・・・』

そんな考えを浮かべていると目の前が暗くなった。

やつが間合いを詰め数十センチ先に・・・。

一瞬の接触、それは硬いものと硬いものがぶつかる音を響かせた。白い月夜にぎらつとした怪しい光が2つ。

髪の高い人は懷に隠している何かで。

こちらは2本の短剣、有利不利はわからない。

後方側転を何回かして距離をとった後、肩でひとつ息をして、もう一度人の前に向かった。

走りながら腕を顔の前に構え、その状態から相手から見て右側へ、拳をストリートに出す、フェイントだ。

すぐに腕を曲げ右へエルボー、それはいとも簡単に、手で防がれて

しまう。

それも実はフェイント。

大きく胸を開いてエルボーしたので、胸は開ききっている。

そして開いた左手で腰のひねり、胸の開きを利用して腹部へ切り込んだ。

この猛攻も全て効かなかった。回避、受け、回避の順でふらふらとかわしていく。

そしてまた距離をとる、今度はほんの少しだけ。

それから攻撃する男は、守る男をまた睨んだ。

早く早くと焦る心を攻撃する男は抑えようとしたが、体が心の全てを受け入れてしまっていた。

睨んだ後ほんの少し目を瞑り、息を整える。

目を開き、躊躇なく右手の短剣を投げた。

残りの1本もしゅっと投げたと同時にやつへ向かっていったががちりと止められる。

投げた短剣は大きな音を立てて下へ落ちていた。

踏み込んで下から一発顔へやるつもりだったのに……。

おれはそう思っていた、そんな時顔がうつすら逆光でも見えてしまった……鋭い目つき。

それが少し閉じて口が動いた。動いているのに声が聞こえない。

危険を察知してやつの腕を力一杯振り払い、やつの後ろをすつと抜けていった。

驚くほど簡単に抜けることができてしまった、もうすこし手こずるかと思ったが。

全力で走りながら後ろを向く、鋭い目の人は背中でも何も語らない。ただ突っ立っているだけ。

短剣を諦め、あの場に捨てて、ずっと前だけ向いて走り続けた、馬車が見えるまで。

自らの周りしか見えない道を少しの霧と共に足を動かした。

2話

空と海からの二つの光だけが見える道のり。

あれからどれほど来ただろうか。

時間は10分程度だっただろうが距離なんて憶えていない。

息も絶え絶え。

海が綺麗に見える道の途中で、ゆっくり止まる。

真っ暗な中に感じる、頭から頬に伝わる暖かな汗。

周りの音なんて自分の荒い息でかき消されまったく聞こえない。

汗が下に落ちるのがわかった気がした。

目を開け頭を上げた。

目視できるほどで、少し先の方に橙のひかり。

淡くゆらゆらと、明暗は不安定。

でもそれがまた暖かそうで……。

……馬車だ、きっと。そう思った。

深呼吸を一回し、そしてまた走りはじめる。

ぎしぎし、がちゃがちゃ、ことこと。

色々な音が聞こえる中でふと気がついた後ろからの音。

カッカッカッ。

少しずつ近づいてくる、硬い音。

ずっと後ろを振り向いてみた……が、なにも見えない。

全てが闇。

今は林道、上からの光は遮られ左からの光は木の間からちらちらと顔を覗かせる。

あとにしよう。

そう思ったのは恐怖と不安を一旦遠ざけるためだった。
あまりにも追っかけてくる硬い音。

馬車のスピードを少しずつ落としていく。

馬車がきしむ音、だんだんとなくなっていく。

橙が静止した。

動かなくなった橙を目の前にしてみるとわかる、正体はランプだった。

左の上のほうにこじんまりとぶら下がっている。

しなくなった硬い音。

生唾を飲む音が耳の内側から聞こえる。

目の前においてあったランプを取り左側へ下りた。

闇は人を怯えさせ、安心させる。

光もまた人が安心するもの。

右腕を伸ばした、少しそこらへんまで見える程度に明るくなる。

地面になにかが落ちてる、細長いものがこちらに伸びている。

目をこらすと見えてくる5本の指。

・・・人だ。

心臓がいつもの倍速で脈打つ。

今日は誰も乗っていなかったはずだ、ならやはりさっきの音はこいつなのだろうか。

こいつは人間なのか？・・・それとも“ヴァンパイア”なのか。

確か、本によればヴァンパイアは体温がまるで無く、日光・ニンニク・十字架に弱いと。

心臓の音が相手にも聞こえそうなほど鳴っていた。

ゆっくりと手を伸ばす、彼の頬に触れたとき暖かいものを感じた、汗だ。

・・・人間だ、本物のようだ。そう思うとなんだかすつと緊張がと

けていった。

うつ伏せのその影にこう告げた「ここまで追ってくるとは恐れ入るな、どうだ動けるか？」

鼻でため息をつく、いつも通りのつもりが先程まで感じていた恐怖のせいで笑ったような声になってしまった。

「済まないが、荷台につんでくれるか。走りすぎてもう目を開ける気力さえない」

この闇の中で、見えるわけでもなしに笑ってみた、自分ではまったく笑えていないことをわかっていた。

荷台に乘せられ一瞬だけ見えた人影、それは40前後の男だった。口が動いているが、おれの耳には届いてこない。

これで2度目だ、瞬時にさっきまであったあの光景が思い出される。それは一瞬で終わりを告げ、そしてぼや々と音が聞こえた。

その中でもはつきりと聞こえた音は「よく頑張ったな。」だった。彼は月の光の陰になっていてもわかるぐらいに、満面の笑みだった。

彼が荷台と外を仕切るカーテンをして、運転席に戻っていくのがわかった。

そして、荷台に乗った男がまぶたを下ろしてまもなく、馬車が出発した。

また、静かな林道にガチャガチャと音が鳴り響く……。

3話

林道を抜けると空は藍色に色づき始めた。

まだ太陽は見えない。

馬車の向かうずっと先のほうには町の入り口が見える。

その名物は鉾山、鉄が取れるらしい。

鉾山町“ハノブ”、でもここは通り過ぎるだけ。

40前後の男は馬を先ほどより一層速く走らせた。

後ろに乗っている男は眠ったまま。

空の色もだんだんと多くなってきた、でもおれの目の前はずっと真っ黒。

どこにいるかもわからない、でもこれが一番落ち着く。

外へと通じるカーテンから一点の光が影となった人を起こす。

町を過ぎてから少しした時の出来事だった。

思わずぎゅっとなる目の周り、片目を開けてカーテンを閉じた。

眠るのに邪魔だ、そう思った。

まぶたを照らした光はまだまだ橙だった、ゆっくりと白になる。

目の前が藍色がかった時、あの髪の長い人がいた場所に戻っていた。

・・・彼はいない。

わけのわからない力が四方八方から自身にかかる。

苦しくて息もできない。

数秒全身圧迫されたその直後、ふっとなんにもなかったように吹く風。

操り人形の糸が切れた時の様にどっと、その場に倒れこんでしまった。

まさにおれは人形だ、身体の手が動かない。

そのまま意識が遠のいて行く・・・。

飛び起きた。

全身がつつりと汗をかいている。

そこはもう砂漠だった、運転手のは雨のように流れてる。

手の甲で汗を拭いて話しかけた。

「おっさん」

「ああ、起きんたんかいあんた」

「ああ」

これだけのやり取りが気持ちを暖かにさせる。

だから安心もできる。

「今、ここはどの辺なんだ？」

おっさんは答える「ここは、古都“ブルンネンシュティグ”から多少西に来た所だ」

「・・・西の・・・街道か？」

「そうだな、確かそう呼ばれてたはずだ」

「ありがとう」

おっさんにお礼をし、思った。

望みどおりこの馬車は西へ西へと進んでいたようだ。

この西の街道はおれが小さい頃通った記憶がある。

ぼやっとしか思い出せないが確かなことだ。

馬車の後ろのカーテンから見える景色は一面クリーム色でサウナの様。

いや鉄板だ。

目がくらむし、頭も痛くなる。

カーテンを閉めると目の前が全然見えなくなった。

サングラスをかけたように。

この積荷スペースに乗っているのはおれ、そして横に積まれた多量の荷物たち。

なんだかよくわからない。

ゆっくり辺りを見回した。

じっくり見ているうち少し前のことを思い出した。

おれは、港街“ブリッジヘッド”でギルドに入っている。

ギルドは何か目的を持った組織のことで、おれのギルドはシーフギルド。

シーフは盗みもするし殺しもする、職業として考える人はほとんどいない。

シーフ何でも屋といったところだ。

6歳のときからここに所属している。

今は17だが一応ギルド長直々に任命された幹部として、なかなかの地位を獲得している。

そのギルドの倉庫のことを思い浮かべていた。

そんな時運転席から声がした。

「おいおい、いじくるなよ。おれとあんた、いっしょにあの世行きだぜ・・・」

笑って言われたが、おれの精神があっちへ飛びそうになった。

おっさんの冗談に驚いた訳じゃなくて、急に話しかけられたことに動揺した。

心臓も一瞬、止まった。

またおっさんが言う。

「そういえばあんた、“リンケン”には降りないのかい？」

「ああ。“アリアン”で頼む」

「そうかい、それじゃまだまだ着かんぞ。あと2日は欲しいところだな」

「・・・長いな。なぜそんなにかかる？」

「おれも商人だからよ、“リンケン”にも売るモンがあるのよ。悪いね」

「・・・仕方ないな」

「お、話のわかる兄ちゃんだ。よし、そこらに入っているキャンデイーをやろう」

「ふざけるな、いらん！」

「・・・そうかい」

なぜかおっさんは悲しそうだ。

“アリアン”と“リンケン”は砂漠にある町。

小さいリンケンに比べアリアンはデカイ。

栄えた理由は単純だ、オアシスがあったから。

・・・だったはずだ。

そう本に書いてあったと思った。確かあれは図書館に行った時だった。

題名は・・・“天から降りてきた紅い石”だったような気がする。

よく憶えていない。

4話

頭の中で回想している時間は短かった。
でも実際は数十分かかっている。

その間に砂漠村“リンケン”に到着した。
まったく人影はない。

というよりは砂が宙を大量に舞っていて向こうがよく見えない。
そんな中、馬車がすぐさま向かった場所は旅館だった。

旅行者が来るとは思えない町の旅館。
よっぽどの赤字だろう。

旅館の前に馬車を止め運転手は顔を隠し急ぎ足で入っていった。
おれは、すぐ帰ってくるだろうと思いついて後ろで寝転がっていた。
そのうちに眠りについちゃいたい、記憶がない。

ぱっと起き上がり右を見た。
運転席は空っぽだ。

まだ帰ってきてない。
身体はもうすぐ夜が来ることを感じた。

中々帰ってこない運転手にいらだち始めた。

「ちっ」舌打ちの音もむなしい。

人差し指を小刻みに動かし床を叩いた。

急に男は外へ出た、そして少し強い風が吹く中入り口に向かった。

入り口は意外ときっちりしていて細かい色使いが施されているドア。
どうやら特注のようらしい。

横の小窓から中を見ることはできない。

仕方なく特注のドアをくぐった。

いらっしやいませ。

見た目は古いはずなのに中はかなりきっちり造られている。
左奥でなにか大きなものが寝転がっている。

近づくとはつきりと大きなものが何かわかった。

運転手のおっさんだ。

どうもおかしいと思った。

おっさんはぐったり椅子にいる。

座ってはいない、何個も一列におきその上に寝転がっていた。

「はあ」

ため息のあとにはすこし笑みがあつた。

おれは言う。

「おっさん、起きろよ。まだ行かないのか」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうすんだ？」

「・・・・・・・・泊まる・・・・・・・・」

「泊まる？おれもか！？おいおい、おれは金持っていないぞ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・いや、おれは泊まらないよ。積荷を借りてもいいか？」

「・・・・・・・・おう・・・・・・・・」

通りがかった旅館の人に頼んで毛布をかけてもらった。

おれは借りた。

そして礼をしてドアへ向かった。

後ろを振り向くとおっさんの寝顔が笑みを浮かべていた。

ドアを開け、寒々しい外へためらいもなく出て行った。

5話

目を帽子で隠しながら馬車の後ろへもどる。
前は見えない、下だけ見える。

そして荷物スペースに上ったときにふと思った。
馬をどうにかしないと。

下ろした重い腰を上げ後ろからおり、運転席のほうへ向かった。
馬は下を向いたまま白い煙を吐いている。

手綱を引いて風が当たらない場所へ移動しようとしたが動かない。
強引に引っ張っても効果なし。

仕方なく適当に呼んでみた。

「おい！」まったく反応はない。

たぶん、風の吹き荒れる音でまったく聞こえないのだろう。
自分にも少ししか聞こえないのに馬に聞こえるのか？

もう一度、この砂嵐の中、出せるだけの声を出して呼んだ。
呼んですぐのどが痛くなって咳が出た。

仕方なく近づいて首をポンとたたき「おい、馬鹿やろう！」と言っ
てみた。

そうするとなんとなく聞こえたのだろうこっちを見た。

ふところからパンを出し馬に見せびらかせた。
すると2匹ともこちらへ近づいてくる。

手綱を持って風避けできる旅館の横に移動した。

馬は物欲しそうにおれを見てきた。

持っている全てのパンを馬にくれてやった。
無言でパクパク口に頬張っている。

そんな姿を少し見てすぐに積荷スペースへ戻った。

帽子を脱ぎ、毛布を頭から被った。

風が入ってこないようにしたあと座ったまま眠った。

突然朝はやってきた。

眠って一瞬の出来事だった、もう当たりは白くて暑い。毛布なんてもう蹴飛ばしていて隅に追いやられていた。汗もひどい。

運転席にはまだ誰もいない。

外に出てみると昨日の砂嵐が嘘だったかのように穏やかだ。目の前の光景は全てが変わっていた。

そこには運転手の姿もあった。

彼はそこらの露店商人や宝石屋を行ったり来たりしている。ごくろうなことだ。

有名でもないあのおっさんでもきちんと仕事をこなしている。さすがは商人の端くれといったところか。

ふくよかで腕はがっちりした運転手からは、流れる汗。

どんどんと取引を成立させているように見える、中々の腕の持ち主らしい。

客は皆笑顔だ。

たまに馬車へ戻ってきて、俺の旅仲間の荷物たちを軽々運び出す。小一時間ほどだったろうか、全ての商談が終わり、運転手が席に着いた。

そしておっさんは運転席、おれが後ろで荷物のように座っているいつもの形が出来上がった。

その少しあと、運転手のおっさんからちよつとした注文があった。

「おい、そこら辺におれのタオルがなかったか？」

「いや、見当たらない」と探さずに言ってみた。

「ちゃんと探したのか？」と。

全とお見通しってヤツか、・・・面倒だな。

「わかった。ちよつと待ってろ」

そういえば、以前おれが寝転んでいたときに薄汚れたエメラルドグリーンタオルがあったような気がした。

その時おれは隅へ投げたはず。

カビの生えそうな汚い四隅を探し始めてすぐ、気持ち悪い色のも
が奥にあるのが見えてしまった。

一瞬カビだと思ったが、タオルだった。

「あつたぞ、おっさん。でもな、少し汚い。それでもいいのか？」

「別にかまわん。早く汗が拭きたくてしょうがないんだ」

気持ち悪いタオルを親指、人差し指でつまんでひょいと前へ投げた。
運転手はなにも確認せずバツと顔を飛び込ませた。

苦笑い顔のまま顔が動かなくなった。

運転手は気持ちよさそうだった。

汗を拭き終わりすっきりした運転手。

タオルを後ろに投げ、軽快に鞭をきかせ馬車を走らせた。

投げられたタオルは宙を舞いおれの目の前へ。

反射的に上半身だけでそれをかわした。

体が動いてもまだ顔は引きつっている。

6話

当初の予定ではアリアンまで3時間ほどかかるはずであったが、2時間で済んだ。

おっさんも40前後だし、まあ見当を間違えるのは仕方ないとして置いて。

このオアシス都市“アリアン”はやけに、にぎやかだ。街の入り口にある門の周りには露天が沢山並んでいる。

馬車の後ろから茶色のカーテンを風になびかせそれを見た。

ゆっくり遠ざかっていく家並み。

人々は楽しげに話しをしたり、買い物をしたり。

所々に甲冑を着た傭兵を見かける。

おっさんに聞いてみるに、ここには“傭兵ギルド”と呼ばれるものがあるらしい。

かなり大きなギルドだそうだ。

おっさんは昔のことしか知らないから現状がわからない。

街やギルド、その他市場価格も基準は昔。

情報としては残念な結果である。

そんなことを思いながら後ろの風景を見ていた。

気づけば町並みは目の前で止まったままになっていた。

いきなり横からおっさんが現れた。

「おし、ついたぞ。どれぐらいここにいるんだ？」と。

なのでこう言った。

「ありがとう。あんたはいつこの街をでる？」

「あ、おれか？おれはそうだな、4日後だな。馬も俺も休みたいしな」

笑顔でそう言った運転手はリンケンの時と同じようにまた荷物を運び始めた。

邪魔になっではいけないと思いつぐに外へでた。

上から暑さと光が強烈に降り注ぐ。

町の人はなんでもないうように歩いている。

なんだか自分が情けなくなってきた。

と、そこへまたおっさんが戻ってきた。

そのタイミングで「あんたが帰るときに、おれもまた連れてってくれ」といった。

両手で荷物を抱えながら「わかった。それじゃ4日後入り口の門の前でな!」と返した。

ここにくるまで長かったがやっと目的を実行に移せる。

黒いテンガロンハットを深めに被り、ひざ近くまであるブーツをきっちり履いた。

黒いマントをした男がコツコツを音を立てて馬車から離れていく。

腰のホルダーが歩きたび少しゆれる。

中身は短剣。

髪の毛の長い人との戦いでなくしてしまった。

まずは、それを探してみることにした、“彼”を探す前に・・・。

1話

オアシス都市“アリアン”は、名前の通りオアシスで栄えた都市。フランドル大陸の中部に位置するこら辺一帯、全て砂漠。そこにオアシスがあればいやでも発展していくのは仕方がないことだ。

馬車から少しばかり離れた所、中心に銅像が建つてある広場へ出た。見る限りゆうに500人程はいる。

それでも向こうが見えないほどぎゅうぎゅうとはしていない。

広場を正面にしているとまったく気づかないが、後ろには大きなオアシスがある。

この都市の6割はこれで占められていそうだ。

広場には露天が沢山並んでいる。

広場だけでは狭すぎるのか、馬車で通ってきた道にも溢れんばかり露天が並んでいた。

オアシスを右に見た方向から、広場の露天を見て回ることにした。

中身は武器・防具、中にはペットまで売っているところもあった。みんなこの暑さでも平然と物を売っている。

繁盛しているところもあれば、全く売れてないところもある。

そんな全く売れてない露天におれは釘付けになった。

目立たず地味でそこに露天があることさえわからないような所にポツンとある。

木陰でそこだけは涼しい。

釘付けの理由・・・それはここだけシーフ専用の武器が置いてあったことだった。

無くした短剣も売っている。

ふと思ったことが一つ、他の露天には店主がいるのにここだけは、

見当たらない。

辺りを見わたしてみたが、これといってそれらしい人物の影はない。すっと商品に目を通してる内に、目の前の存在に気づいた。

木の根を枕代わりに帽子で顔を被って寝ている女がいた。

どうみても俺と同じ格好をしたシーフにしか見えない・・・。

男は彼女に悪戯を試みた、熟練のシーフであればなんでもないことである。

手短にあった小石を手に取り彼女の足元狙って投げてみた。

なんなく当り、石は草の上。

それから数秒たった後、彼女はゆっくりすっと起き上がり眠気眼でこちらをちらり。

そのあと帽子を頭に被り、両手両膝を使って四つんばいになり、こっちへ来た。

1・2・3・4・5のリズムで目の前に座った。

「やあ、おはよう。今日はいい天気だね」優しく微笑。

「・・・確かにいい天気だが・・・」

「でしょ？ 気温もぽかぽかだしつい眠くなっちゃって」恥じらいの笑み。

「・・・いや、ポカポカ陽気じゃないな。今日は暑すぎる」

「あ、あなた旅の人？ ここじゃこれぐらいはポカポカ陽気なんだよ」あざ笑うような笑み。

「・・・そうか。そんな話はどうでもいい。この短剣をくれないか」

「よしきた。2000Goldだよ」顔いっぱい満面の笑み。

「・・・少し高くないか？ 1000Goldじゃだめか」

「お客さん、贅沢言わない言わない。さあ買った買った」口元のみ笑み。

「・・・1800Gold」

「もう一声！」と人差し指を立ててウイंक。

「1900Gold・・・」

「よし売った！ もってけこのやろー」今度は親指を立ててにっこり

と。

そんなグダグダな中、入り口の門の方で活気とはまた違う騒がしさがあった。

2人とも目が合い、決断同じく露天を離れ、全力で騒がしいほうへ向かった。

2話

木陰を抜ければそこは灼熱。

でも汗なんて気にしていられない。

いつもより体力を消耗する時間が早い、暑さのせい。

そんなことも女シーフにはまるで無害、彼女にしてみれば今日の日差しは小春日和のようなもの。

数秒で広場あたりを抜け出し、そこを背にして全力で走った。

それからまた数秒、見えてきた門には沢山の人だかりと少数の傭兵ギルド員。

人ごみ掻き分け奥へと進む。

見えてきたのは水分を含んだ土の色、土色の塊には針のついた大きな尻尾。

大きなサソリがそこにいた。

このサイズは初めて見る。

目が情報を取り込む、脳で考えるより早く手に震えが来た。反射的なものだ。

恐怖からなのか喜びからなのかよくわからない。

左から声がした。

「お客さん、あんなのみたことあるかい？」

「あるわけがない。手が震えてる・・・」

「あれ、意外と臆病なんだね」

「どっちかわからないんだよ。喜びか恐れか・・・」

「え、これは喜べないでしょ」と苦笑。

「・・・にしても、あいつ大人しいな」

「そうだね、同じようなやつに比べるとかなり大人しい・・・」

危害を加えなさそうだと思い、少し緊張が解けたその時、どこかの子どもが石ころを投げた。

「どっかいけ！化け物め！」

石はサソリに当り、サソリは素早く方向転換して子どものほうにやってきた。

だが子どもは恐怖をあまり知らない。

茶色の8分音符の横を通って男女のシートの目の前5m先に出てきた。

そこでもまた小石をやつに向かつて投げる。

とうとうやつも怒り出した。

手前2本のハサミを動かし尻尾を子どもに向けて威嚇。

その子どもは、音符の迫力で腰を抜かした。

ここで男女のシートが動き出した、この状況はさすがにやばい。

「あの子、お願いね」

と言って女、腰の左右のホルダーから持ち手の短い斧、トマホークと呼ばれるものを取り出した。

その時、男はサソリに向かつて走りだした、とほぼ同時に先ほど買った短剣を左手に一本だけ持つ。

女のほうはすぐさま懷に隠してあった鎖をトマホークの持ち手の下につけた。

作戦無し、一発勝負の幕開け。

3話

男が先行した。

体勢を低くしたまま2、3歩助走したのちにサソリに向かってスライディング。

それとほぼ同時に左手の短剣を地面に突き刺す。

短剣を中心にして円を描く。

範囲内に子ども、そして二つのハサミ、一つの針。

針が子どもに下ろされる寸前で男シーフが子どもを体で受け止める。男の足がサソリの正面から右へ移る。

左手を離れた、だが自分の腕まではきちんと守れずやつの針が手首をかすった。

地面にめり込む針、傍観者の足元に転がっている黒いものからは無傷の男の子。

そして黒いものそのものは動かない。

抜けぬ針に怒りを感じているのか、茶色の8分音符はプルプルと震えている。

そんな時、茶色の塊の上には銀色の斧。

一瞬で塊の周りは緑色の液体で染められた。

相変わらずやつはプルプルとしている。

黒いのは若干のみ動けるが動いてるようには到底見えない。

周りからの声はきくと聞こえていない。

男シーフの今は、痛みと痺れの2重奏。

手指さえまともに動かせない。

女はまだ茶色を睨んでいた。

やつに刺したトマホーク、その鎖を引っ張り手元に戻し、構えていた。

男の方は傍観者が周りを囲み、中がきちんと見えないぐらいになっていた。

男の横には白衣を着た女。

この大勢の中の誰かが医者を呼んだらしい。

すぐに毒消しが男に投与された。

苦痛を浮かべていた表情からスッと力が抜け、手の震えも治まった。女の方は・・・、茶色がまだ動いていた。

ゆっくりと起き上がるサソリ、女はすぐさま両手のトマホークを投げける。

鎖がジャラジャラと音を立てながら伸びていく。

サソリを少し通り過ぎたその時、女は鎖を引っ張り一本背負い。

茶色の後ろにあった斧はやつの体へ一直線に食い込んだ。

またしてもあたりに広がる緑の液体。

斧は食い込むだけではなくそのまま女のほうへ戻っていく、サソリの体を縦に切りながら。

サソリに体を戻した女はトマホークを難なく取り、また構える。

もうさすがにサソリも動けないと思われたが違った。

ほんとにゆっくりとだが足をふらつかせ起き上がってくる。

女シーフは眉間にしわを寄せる。

「気持ち悪いぐらいしぶといなあ、次こそはその硬い殻、破って逝かせてあげる・・・」

ひとり言のように言った。

4話

周りの観衆はものすごい厚さで彼女らを囲っている。入り口の門から見るとなんだかお祭りのような感じ。

このオアシス都市にちょうど戻ってきた少女はそう思った。

少女がそれを見ている時、観衆の黒いドーナツの中では巨大サソリと男女のシーフがやり合っているその最中だった。

「はぁ・・・」ため息一つ。

うんっと顔を上げ覚悟を決めた。

黒いドーナツの中身をかき分けながら入って行く。

揉みくちやにされながらようやく真ん中が少し見えるところまで来た。

すると目に映った光景は緑色の何かが茶色の塊から吹き出しているところだった。

目を皿にし、驚き恐れたが、それでも尚良く見ようとして無意識に観衆の前に出た。

緑色の何かは液体で、茶色の塊は大きなサソリだった。

少女はまたしても驚いた。

彼女が以前この都市の隣の砂漠で見つけた赤ちゃん巨大サソリ。

その子を気に入り、その子の尻尾にかけたペンダント、それらしきものを目の前のやつはぶら下げていた。

そのペンダントが今目の前に・・・、緑色に染まっている紐と穴の開いたガラスの欠片。

間違いなくそれだった。

だが、その時ゆっくりと立ち上がったサソリに向かって斧を投げようとしている女が一人。

いつの間にか、目からあふれ出てた涙。

少女はそれを流しながら、泣くために縮まったのどを無理やり開けて叫んだ。

「やめて!!」

時が止まったようだった。

女は投げける寸前で止まり、観衆のざわめきもなくなった。

暑さと少女の泣き声だけが取り残された。

静寂はすぐに解かれさっきの叫びで男シーフも目覚めた。

少女は涙をぬぐい、すたすたと歩き出しサソリの横に。

荒ぶるサソリの体を細い腕で抱え込みまた涙した。

その顔を見たらもう戦えない、女も他多数もそう思ったはずだ。

女はトマホークを腰に納め、少女に近づこうとした。

しかし、サソリが威嚇をする、こちらへ近づくなと。

ふんつと女シーフ、ため息をついて男シーフの元へ向かう。

サソリから緑色の液体は止めどなくしとしと垂れている。

女は男の顔をみて眉を下げて笑った。

「だいじょぶそうだね。いやぁ良かった良かった」安堵の表情で苦笑い。

「良くない、まだ痺れてる・・・」

「あそ。ま、私嫌われてるようだから帰るわ。あなたの具合が良くなったら店にでも来て。んじゃ」

そう言って手を軽く振り背を見せた。

男はその時何を言ってるんだかわからなかった。

少女の存在にまだ気づいていないのは男だけ。

その彼女はサソリの傷口に両手を重ね目を閉じた。

そうすると、手から青い光が出てきてみるみる傷口がふさがっていく。

「おおっ」っと観衆からもれる。

そして傷は全てなくなった。

それから傍観者は次第に無くなり小数の人間だけがその空間に残った。

少女はサソリを連れてこの都市の入り口へ向かった。

男は女医に付き添われ病院へ。

多少の観衆は彼女の方へついて行った。

そのあとちよつとしてからついて行ったやつらだろう、悲鳴が聞こえた。

男が病院のベッドについた頃、少女は砂漠の真ん中あたりにいた。

そしてサソリにお別れのキス。

また都市に戻る、そのために帰路へついた。

5話

あれからどれぐらい経っただろう。

真っ黒な世界で安らぎを感じていた時、コンコンと何かを叩く音。色のある世界へ戻るとそこには少女が立っていた。

紅のマントにこげ茶の皮の服上下、ワンピースのお腹の辺りの部分だけを、ぐるっと切り取った感じ。

そしてブーツ、片方ずつに2つのリングが付いたもの。

腕にもリング、ブロンズっぽい髪の毛。

そんな格好の幼い女がそこにいた。

そうしてこう切り出した。

「・・・大丈夫ですか？」

男は答える。

「ああ。たいしたことはないらしい。毒ももうほとんどない」

「そうですか、それは良かったです」

「・・・それほどよくはない。痺れが抜けないからな」皮肉っぽく

言う。

「そうですか・・・」床を見ながら答える少女。

「とりあえず、それは置いといて。あんたは誰だ？」と男は問う。

「私はこの都市に住んでいる“ケイラー”です」

少女は笑みを作り答える、男はそうかなんて思いながら、数回頷いた。

「名乗ってもらったことだし、おれからも言わしてもらおう。礼儀だからな」

「・・・おれは、港街ブリッジヘッドシーフギルド『ラシュバル』所属副ギルド長“ファティマ”だ」

「長いお名前ですね」ニコツと優しく笑った。

男は、「いや、名前はファティマのところだけだ。残りはおれの所属しているギルドの名前な」

「そうなんですか」口元に笑み。

「ああ。・・・少しばかり面倒くさいんだがな」男も笑う。

その後にできた多少の沈黙の後、ファティマから少女に尋ねた。

「ケイラーとかいったな。顔も名前も知らないおれに何のようなんだ？」

ファティマはきっちりベッドの上に座り込み、彼女を見つめた。

「用というのは・・・その・・・あのサソリのことです」、こう返す。

「あいつか。あいつがどうかしたのか？」

すると少女は、「あの・・・怪我させてしまって、すみませんでした」

少女は小さな頭を下げて男に謝った。

「・・・？お前が謝ることはない。あそこにきて暴れたのはあいつなんだから」、またできる少しの沈黙。

「実は・・・、あの子、私の家族なんです」

「家族？あの馬鹿でかいサソリとか！？」

「はい、つい数ヶ月前のことなんですが・・・。この都市の隣の砂漠であの子を見かけたんです」

こう続けた。

「親とはぐれたらしく一匹でぼつんとしてたんです。なので私、近寄ってみたんです」

「そしたらすごくかわいくて。・・・なのでもっていた鶏肉をちぎってあげたんです」

「そうしたら、着いて来ちゃって・・・。なので家に誰にも見つからないように、連れて返ったんです」

その時、ファティマから質問が即座に飛んだ。

「こういうのもあれだが、拾ってきたものがアレだからな。・・・親が良く許したな」

少女は悲しい顔をしてこちらを向き話す、「私、親いないんです、一人暮らししてて」

「・・・そうだったのか。悪かったな」と申し訳なさそうに返した。
「いえいえ、お気になさらずに。私には親の記憶が無いんです。施設で育ったものですから」

「なので、気にしないでください」

「・・・そうか。済まなかったな」男は少女に向かって謝罪の言葉をいう。

「はい。・・・それで、あの子を連れてきて世話をしました。でも一度脱走してしましまして、町中が大騒ぎになったことがあるんです」

「化けサソリが出た！って。その騒ぎは、最初に見つけた人の見間違いつてことですねに収まりました」

「それから、あの子を見つけ、騒ぎがもう一度起きないように、連れ戻しました」

「次の日、きちんと逃げないように用意して、市場にいったんです。すると、昨日のサソリの話で持ちきりでした」

「きっとこの町の人は、あの子を見ると怯えてしまうのでしょうか。そう思ってその日から隠すように育てました」

「でも、それでも私が留守のときに、町の人に見つかってしまったんです・・・」

ケイラーは少し涙を溜めて続けた。

「町の人はやっぱり、ほぼ全員が飼うことに反対。結局砂漠に戻すことになったんです」

「・・・なので砂漠へ返すときに私の持っていたペンダントを尻尾にかけてたんです」

「なくさないでねって。・・・忘れないでねって」
そういうと、少女の目からは少量の涙。

男は言った。

「・・・あまり辛いのなら話さなくてもいいぞ」

少女は首をフンフンと横に振ってまた話し始めた。

「意を決してあの子を砂漠に置いてきて、自分の家に戻ってきたら

町の一部の人々から石や泥を投げつけられました」

「“なんであんな化け物をこの町に入れたんだ!”とか、“お前はいかれている!”とか。もみくちゃに言われました」

「・・・その日はずっと家で泣きました。外に出たらまたやられま
すから・・・」

男は真顔でその話を真に受け止める。

彼女は目に溜めた水を落ちる前に、手でぬぐい言う。

「それでも・・・、それでもあの子が一人で強く生きてると思うと、
自分も負けてられないと思い頑張っただけなんです」

そして、決意を固めた顔でこういう。

「私はあの子をたった一人の家族だと思っています。だからあの子
がしたあやまちには、全て親代わりの私の責任でもあると思っています
んです」

「なのであなたには怪我をさせてしまったお詫びとして謝りにきま
しました」

改まり、一歩ベッドから離れ、ピシッとした態度をとり頭を下げた。

「ごめんなさい」

少女は両手にグッと握りこぶしを作る、その力みを取る為に、男は
その頭を撫でてやる。

そして「気にするな」と呟いた。

緊張の糸が解けたようにフッと肩の力を抜いた、少女。

そして満面の笑みをおれに向け、ここを去っていった。

頭の後ろには窓、両手をこのベッドから伸ばせば壁につきそうなほ
ど。

天井もそんなに高くない。

こんな白い狭い空間で男と少女は初めて出会った。

6話

男といってもまだ17歳の青年、少女といっても13歳。まるで兄弟のよう。

彼女が男の病室を後にしてから数時間。

真昼に起きた出来事が少し古くなる日の入り時。

男は恩人の女医を呼ぶことにした。

ベッドの横には銀色のベルが置いてある。

それを鳴らせば誰か来てくれる、それを使った。

高音で澄んだ金属音をだすベル。

その音で一人の看護師がやってきた。

部屋に入るとすぐさまランプに火をつけて、それからこちらへ。

横に来て言う。

「どうされました？」

「先生を呼んでほしいんだが」

「わかりました、少々お待ちください」

ニコツと笑って部屋を後にした。

男は看護師が部屋を出てすぐ着替えを始めた。

男が着替え終わり、それから2〜3分程度のこと。

コンコンとドアをノックする音。

その後にあの女医が顔をだした。

歩きながらこう話す。

「なにかよう？ 急ぎなら要点だけ言っただけでいい」

男は布団をきれいにしながら言った。

「ああ、もうでるよ。世話になった」

「あらそう。あんな無茶はもうしないことね。やるなら病院の前でやりなさい」

優しく微笑んだ。

「今度、そんな機会があったら、そうさせてもらう」女医に背を向

けて語る。

布団がきれいになると男は、「おれの持っていたものを返してもらいたいんだが」と言う。

やれやれという顔で部屋を出て行く女医。

物というのは彼の武器などのこと。

この部屋には護身用の腰の短剣一つもなかったのだ。

その上、帽子や皮のグローブ、ブーツもなかった。

そうなればおれをここに連れてきたやつ、もしくはここを仕切ってるやつに聞くのが手っ取り早い。

誰にだってわかること。

それからすぐ女医が戻ってきた。

かごを両手で持ち、ちよつと重そうにそれを運んできた。

女医はしゃがんで男の前にそれを置いた。

ザツと鳴るかご、男は白衣から少し覗く女医の胸に気がいつてしまっていた。

女医は立つと、少しにやけた顔で言った。

「あんたも意外と年頃ね」

少し焦る男、目を泳がせてみる。

女医の企みだった、男を落とす技。

まんまと罠に引っかけかかる副シーフギルド長の男。

少し情けなく思ったのか顔が少し赤くなる。

顔の笑みはそのまま、女医が「まあ、いいわ。それじゃこれが全部だから確認してみて」と。

そういうと男はほんのり赤くなってる顔を床に向け熱心に確認した。そして冷静になってきたところで全てがきちんとあることを確認し顔をあげた。

かごから物を取り自分に着けていく。

最後に黒い帽子と茶色のグローブ、これまた茶色のブーツを履き言

った。

「それじゃ、失礼する」

女医は「またおいで」ときた。

コツコツと音を立てて病室を出て、廊下を歩き玄関を抜けた。外はまだ活気に溢れていた。

空は紺色でもう昼間のような賑わいではなかったが。

ふと思い出された言葉。

「あそ。ま、私嫌われてるようだから帰るわ。あなたの具合が良くなったら店にでも来て。んじゃ」

あの女シーフの言葉だ。

足が趣くままに歩いていった。

病院は露天商の広場を背中にすると右。

右斜め上のところに位置する。

なので病院から広場を見わたせる、歩いて行っても30秒ぐらいだろう。

自分なりの速さで歩く、目立たないあの店はまだ開いていた。

ほんの少しだけ歩く速度が速くなった気がした。

なにをそんなにうれしそうにしているんだ、おれ。

そう自らに言い聞かせるファティマ。

そして20数歩、店の前に到着した。

またしても女はいない。

あたりをすつと見わたすが、見当たらない。

また前を向いたとき不意に後ろから肩を叩かれた。

「やあ。きてくれたんだ」と女はうれしそうに言う。

「さつき、あんたの言葉を思い出してな。寄ってみたんだ」横を通り過ぎる女に言う。

にやつとして「憶えてくれたんだね。よかったあ」と女。ファティマはそれを無視するかのようにこういった。

「なんか用事があるんじゃないのか？」

まあねなんていいながら露天の商品を片付け始めた。
続けて喋る。

「用事って言うのかな、聞きたいことがあっただけ」

「そうなのか、それじゃ話してくれ。答えられるものと答えられないものがあるが、それはあんたの質問内容次第だ」

長ったらしく男は言う。

7話

「そういえばあなた、旅人だったよね？だから今日とか泊まるところあるのかなあって思ってた」

まとめた荷物を持ち上げながら話す。

「いや・・・今日はここで野宿でも思ったのだが。宿は高いかな」

男がそういうと笑顔で振り返り、こう言った。

「あたしの家においでよ。歓迎してあげるよお」

今日知り合ったばかりの女が、見ず知らずの男を、何の迷い無く自分の家に泊めようとしていることに驚いた。

そこでおれは彼女の“あれ”を未だに知らされていないことに気づいた。

“あれ”を失礼とわかりつつ、聞いてみた。

「あんた名前は？」

女は言った。

「あたしはレイ。28歳よ」

正直男はかなり驚いた。

勝手な想像で、彼女は20代前半だと思っていた。

なのに、実態はいらっしゃいませ三十路様のお姉さん。

つまり、大人だ。

なにも気兼ねする必要はない。

人からの好意は、謹んで受けるに限る。

相手は女性、同じ年とかなら流石に・・・、でもおれと10も離れた大人。

なんてことないさ・・・。

そんな事を思ったのは2，3秒。

すると女が話を続けた。

「そういや、明日には帰るの？それとも何泊かするの？」

その問いかけに男は難なく答える。

「今日を含めてあと4日、ここにいることになると思うが・・・」
また笑顔を作り女は言う。

「んじゃ、帰る日まで家にいてもいいよお。別に気にしなくていいから」

そんな事を言われると気にしてしまう。

そういうと女は歩き出した。

まだこちらは答えていないのに、なんて強引な。

なにも言っていないのでとりあえず着いて行くことにした。

広場の右下端から左へ横断。

左端には色々と家が並んでいた。

そこをススツと歩いていく。

そして、いきなり立ち止まり振り返る。

レイが口を開いた。

「ここが、あたしの家。はい、とうちゃあく。」うれしそうに話す。
でも男はうれしくなさそう。

「おれの答えを聞いてないんじゃないか？なのに連れてきたのか？」

男は少し強い口調ちよつと大きな声で言う、女は慌てだした。

そして口に人差し指を当てイィっと口を横に広げる。

「しい」、口から息が漏れる音だった。

ドアを開け中に荷物を置いて男を手招き。

女は何か口を動かしている。

ファティマが中々こないなので、痺れを切らしストスト歩くレイ。

彼の腕を掴み、強引に引っ張り中へあがらせた。

なんだよと腕についた小さい手を引き剥がす。

ため息をつく女。

そして言う。

「ここは、少しでも大きな声を出すと『うるさい！』って言うてくるおばちゃんがいるのよ」

「そんなのに目を付けられたらここで生活できないじゃない」

その声は少し強く、怒っているようだった。

それから彼女は、荷物を床からいつも置いてるのであろう場所に置く。

台所に移動し、振り返って男に聞いた。

「ご飯は食べてきたの？」と。

まるで親子。

運悪く、はたから見れば夫婦って所だろう。

声のトーンは下がりいつも通りだった。

さっきのは怒ったわけでは無いらしい。

女の質問に男が答える。

「いや、まだ何も食っていない」

うれしそうに笑う彼女が、振り返り背を向けた。

懐かしく、暖かくなるような台所の女性の背中。

彼は優しくほんの少しだけ微笑んだ。

何年ぶりぐらいだろう、こういう背中を見るのは・・・。

ファティマは台所に立つ母親のことを思い出そうとした。

でも、思い出せない。

出てくるのはギルド長の奥さん。

気品のある人、黒の長髪をこちらに向けて台所に立っていた。

それがものすごく鮮明で、他に出てくるものが無い。

仕方なくあきらめることにした。

8話

そんな時レイから指示があった。

「あのさあ、テーブルの下の蔵に食料が入ってるんだけど、取ってもらってもいいかな」

「・・・ああ、もちろんだ。それじゃ何をとればいい？」彼は尋ねる。

「何があるかによるわね」と言いながら皿を洗っている女。

具体的な物のイメージが無いままテーブルをどけ、丁度真下にあった扉に手をかけた。

上向きにあがる木の板。

目の前に映ったのは階段だった。

しぶしぶと階段を下りていくファティマ。

10歩程度で下にたどり着いた。

暗くてよく見えないが何か生っぽい臭いと、異常な寒さが感じられる。

携帯用ランプを取り出し火をつける。

ふうっと明るくなるその場所。

見ると一面氷に覆われていて、目の前には少量の生肉が無造作に置かれていた。

床も氷が張ってある。

適当に肉の塊を手に取り上へ戻った。

扉部分から頭だけを出しこういった。

「こんなもんでいいのか？肉しかなかったんだが・・・、しかもそろそろ尽きるぞ」

手に持っている肉を掲げ彼女に見せる。

そうすると「あ、いいね。今日はパンとそれにしよう！」そう言っ
て一人で頷く。

「んじゃ、それ頂戴」こちらへ来てしやがみこんだ。

両手で持った皿を差し出し「はい」という。

彼も「はい」といって右手の肉を皿に乗つけてやった。

そして体全体を出し扉を閉める。

彼女は台所へ戻り、またさっきの体勢になる。

椅子に座ると台所の音だけが家にこだましているのに気がついた。

不意に彼女が話しかける。

「きみさ、何でこんなところに来たの？」

「・・・なんでとは？」

ファティマがそう返すところ答えた。

「だってここは一般のやつが好き好んでくる場所じゃないでしょ」

こわばった顔をして「そうなのか？」と疑問を投げる。

もちろんと言うかのように頷き言う。

「ここは商売人の宝庫であり、科学者の発掘地なんだから」

初耳だった。商売人は見て分かるが科学者など一人も見なかったから。

鳩が豆鉄砲食らったような顔をしているとこっちを見てニコツとしよういった。

「んで、なんでこんなところに来たの？」

彼女はそれが気になってしょうがないらしい。

男は答えた。

「・・・男を捜しにな。兄なんだ。2つ違いの・・・」

ようやく準備ができたのか、一段落したのか。

彼女は男の前の自分の席に着いた。

男は続ける。

「兄は意外と名をはせた人だったと聞いている。おれと遊んでくれていた時はただの兄だったから」

左肘をつき、手のひらに頬をくっつけてこっちを見ているレイは言った。

「へーそうなんだ。何で名前が有名になった人なの？」

ファティマは答える。

「武道さ。一応おれの地元では格闘大会4年連続優勝をしていたんだ」

「へーすごいんだね」と、目を丸くして言う。

少し笑って言った。

「ああ、でも兄は4年連続優勝をした次の日、まるで別人のようになっちゃった・・・」

眉をひそめて言うファティマ。

レイは口を挟むようにこう言った。

「・・・その話の続きはご飯食べてからにしようよ。腹が減ってるんでしょ？」

ニツと笑いながら大きな皿をテーブルの真ん中に置いた。

中身はさっき地下から取ってきた肉。

それが沢山盛られていて、その上には見慣れない野菜があった。

「この野菜は？」とファティマが聞くとレイは答えた。

「葱っていうものだよ。細長くて緑色で、土から生えてる葉っぱかな。」

そう言いながらも二枚、今度は小さい皿を各自の目の前に置いた。そこに食べやすく切ったパンを置いた。

特に何かあるわけでもなく、ガツガツと食べ物を口に運んだ。

すぐに食事は終わった。

またそれぞれの場所についた2人。

そしてファティマが口を開く。

「さっきの続き・・・聞くか？」

そういうと彼女は後ろ向きで頷いた。

それを見てまた話し始めた。

「別人になった兄は毎日家を空け、たまに帰ってきては食料を多少持って行く。そんな人になってしまった」

「そしてある日、兄は手紙を残して出て行ってしまった」
暗くなる男とは対照的に明るい口調の女は言う。

「なんて書いてあったの？その手紙に」

ファティマは答える。

「出て行く。って書いてあった。たったそれだけ。母はそのせいで倒れてしまった」

そういった後男は顔を上げて少し強めに言った。

「だから兄を見つけて、きちんと理由を聞くためにここに来た」

そういうとレイは「色々大変だね」と言い、苦笑いした。

その後、レイとファティマは他愛の無い話をした。

そして長かった一日はすぐ過ぎて行ったのだった。

9 話

窓から朝日が差し込む。

差し込んだ光が男の顔に直撃。

瞬間、目をぎゅっとさせる男。

それは全く弱まることなく、男を照らし続けた。

一度、寝返りをうち再び夢の世界へ。

すると寝返りをうったのにもかかわらず光は男を追ってくる。

また顔に力が入る。

もう我慢の限界だ。

すうっと目を開けた。

目を開けるとそこにはもちろん天井があった。

だがなんなのか一点だけ黒い。

白の中の黒は少しでも目立つ。

寝起きでまだわからないが、たぶん十円玉ぐらいの黒の点。

そんなの気にしてもしょうがない、男はそう思い鉄の体をゆつ

り布団から離れた。

頭はそれに続くように離れていく。

不意に首に力が入らずカクンとなってしまう頭。

下を向いていた。

ぬっと顔を上げ前を見た。

前にはテーブルが見える、それと・・・それに載っているなにかも。

すっと立ち上がり惹かれるがままにそちらへ足を運んだ。

いい匂いと食欲をそそる目の前のもの。

朝ごはんだった、久しぶりの朝食らしい朝食。

でも、彼女がいなかった。

テーブルの右端にメモが置かれている。

気づいて手に取り読もうとしたが、どうも文字が掠れてよく見えな

しかたなくメモを置き、台所で顔を洗った。

上にかけてあるタオルで無造作に拭きもう一度メモを見た。大きくて丸い文字はこう書いてあった。

『起きたらそこにあるの食べてね。あとあたしはまた露天です。気が向いたらおいでえ』と。

ついつい後頭部を掻いてしまった。

次に出たのはため息だった。

朝食も昨日の晩飯も、びっくりするほどうまい。

ふと色々残している自分に気がついた。

こんな生活しているのに客人の飯まで用意できるほど財があるわけではなさそうだ。

ここにあるものを全て食べてしまっってはなんだか申し訳ない。

そうは思ってみたもののうまいわけだ、飯が。

どうにも箸が止まらない。

止められない。

今回だけはご馳走になろうとすぐさま考えを切り返した。

そして残りのものにがつついた。

食事が済み、あれこれやっていると彼女が帰ってきた。

「あ、起きたんだね。おはよう」にっこりとスマイル。

「ああ・・・おはよう、朝飯すまないな」と照れくさそうに頬を赤くする男。

「ん、どうだった今日のは」

「ああ、うまかった。昨日とはまた別の味だな」

ニコツと笑って親指を立てるレイ。

「でしょ？ ちょっとやってみたかったんだよね」

なにをというと彼女は台所へ行く。

「これとこれと・・・あとこれ。全部混ぜてみたかったんだよね」調味料をなにやら選びながらしゃべる。

フアティマの片眉がぴくつと動いた。

実験台か・・・おれは。

そう思うとまたため息が出てきた。

今回ののはすこし笑みが入ったため息だった。

10話

そんなこんなで残りの日数が過ぎていった。

兄を探して町中を歩いたが、見つかるどころか有益な情報さえもつかめなかった。

そしてアリアンについて4日目。

朝、起きた男は眠気眼ではなかった、ほとんど先の夜は寝ていない。この数日の厚意、おれから彼女に返せるものがなかったのだ。

いくら考えても店の手伝いや家のことの手伝い、自分ひとりでできるものがなかった。

そして今日おれは、ここをたつ。

左を見ると少しはなれて壁と対面して寝ているレイの姿があった。

いつもは太陽が顔を出す前に起きるらしいのだが……。

今日は露天は休みなのかまだ寝ている。

意外と体が小さいことに気づかされる。

そんな時ふっと頭に浮かんだ考え、無意識に少し顔が上がっていく。

一つ頭を立てに振りそおっと布団からでた。

彼女を起こさないように、作業を慎重に行う。

釜に薪をいれ火を起こした。

じんわりとでも確実に炎は大きくなっていく。

そんな火の姿を見るのはこの男、生まれてこの方初めてだ。

弱火が中火になる前に下の蔵から肉を取り出し何枚かに切る。

そしてパンを半分に切って炎を待つ。

パチパチという音が聞こえてきた。

「そろそろか」ファティマは用意してあった肉を一気に投入した。

ジュウウウと激しい音を立てて、油飛び散る釜の周り。

少し経つといい匂いが部屋を充満させる。

それでもまだ起きてこないようだ、ファティマは適当にそこらにあ

った野菜を手取る。

知っているものもあった、それを使うことにする。

ざっくりと野菜を切り、器に盛り付けてサラダを完成させた。

手ごろなものなので味は保障できないが・・・。

釜の肉もいい感じになったので、塩と香辛料をかけ先ほどのパンに挟んだ。

安い手作りハンバーガーが、出来上がった。

それも皿に載せ、テーブルに並べ終えた頃、ようやく彼女が隣の部屋から起きてきた。

テーブルのものを見てびっくりしたのか、半目を開けてそれらを睨んでいる。

ようやくなにか分かり、目を全部閉じた。

「・・・おはよう」あくびをしながら言う。

「ああ、おはよう」男が返す。

「今日は何でこんなにはああ・・・かふん、・・・はやかったの？」あくびを途中でかましながら喋る。

「今日はおれがブリッジヘッドに帰る日だからな、今までの礼ぐらいしないといけないと思って」

ファティマは話す。

頭ぼさぼさの女は両目をがんばって開けていった。

「素直に受け取るわ。ありがとう」

男は口元で笑った。

朝食を食べ終わり二人で家を出た。

彼女がこの町の門まで送ると言うのだ。

言っても聞かない性格だところ最近で知ったのでファティマは諦めてそれに従った。

数分歩くと入り口の門のところにあの見慣れた馬車があった。

近づいていくと馬車の横で馬をブラッシングしている男を確認した。そして馬車の真ん前に着くと、馬と戯れる男に向かって言った。

「おい、おっさん。来たぞ」と。

するとその男は馬をぽんぽんとたたきこちらへやってきた。姿かたちは相変わらずだった。

「よう、来たな。時間より少し早いが出るか？」

「ああ。頼む」

「んじゃ後ろ乗っつけ。すぐ出るぞ！」と2人の男は言葉を交わした。

レイは気をつけてねとだけ言った、最高の笑顔で。

おれもそれに答えた。

後ろにまず荷物を置きそして自分が乗った。

すると運転席の方から声がする、「いいのか？」優しく低く言った。おれは肯定の返事をした。

そしてこの馬車は門番とレイに見送られながらアリアンを後にした。

11話

またここに来ようなんて思った後、少し考え事をした。

これから嫌と言うほど暑くなるだろう。

それは一度経験したことなので対策をうつ事にする。

上着を脱ぎ、前後ろにあるカーテンを閉め床に寝転がった。

そんな事をしながらでも進む馬車。

今はまだ太陽が盛んな時間。

日差しは痛いほど。

おっさんと馬はかなりバテ気味のようだ。

おれは荷台に乗っているので日差しを浴びることは無い。

それでも砂漠は上からの光を、熱を、砂の粒で乱反射させる、そのせいかここも暑い。

薄暗くなおかつ暑苦しいここは、頭が何時でも狂いだせそうだ。

上半身裸でぐったりする、しかし暑さは上を着てるときと差ほど変わらない。

そんな時、運転席のほうから声がした。

「おい。そんな所にいて蒸し暑くないか？」おっさんが問いかけてきた。

「・・・暑い。だがそっちは痛く暑いだろう？」逆に問うファティマ。だがおっさんは意外な言葉を返してきた。

「・・・実はな、少し風があつてそこよりはいいかもしれん」

「・・・まじかよ!？」

その言葉に荷台の男は目の色を変え運転席へ急いだ。

運転席への2枚のカーテンを適当にめくり外へでた。

やはり光は痛かった、でもおっさんの言葉は事実だった。

すっと体をなぞる風があった。

ほんとに微弱な風、それでも汗をかいだ体と頭に爽快感を与えてい

る。

おれはそのままそこに居座ることにした。

隣がおっさん、首にあのタオルを巻いて顔をしかめている。帽子を深くかぶり顔への日差しを防ぐ。

その薄暗い世界は心地よくて少しずつ瞼が勝手に落ちていく。真っ暗な所にいること5、6分、なんだか声が聞こえてきた。

「・・・い、・・・きろ。おい」低い男の声だった。

そしてふと我に返り声の方を見た。

暗くて見えない。

そういえばと思い出し顔の前の帽子を取った。

そうすると知ってる顔、おっさんがいた。

意識がはつきりしてない男が言う。

「・・・うあ、どうした？」

すると、おっさんが答えた。

「寝てたのか、ははは。確かに心地よかったが今はもう寒いぞ。上を着たほうがいい。それに・・・」

そういいかけて人差し指で前方を指差した。

そこにはオレンジ色の暖かい光。

アリアンの前に立ち寄ったリンケンという村だった。

周りは暗くなっており、今度は月の光が体を照らす。

痛くなく冷たい光だ。

ふくよかな男は言葉を続けた。

「だからな。服、着たほうがいいだろう？」とにやりとした。

そう言われると寒くなるのが人間。

急に寒さを感じ、後ろの荷台へ潜り服を着た。

すぐにオレンジ色は増えながら小さくなっていき、門が見えてきた。門の中は明るく月の光が薄れるほどだった。

前寄った宿の前に馬車が止まる。

「今日はここで一泊だ。ゆったり帰ろうや」と言って笑うおっさん。おれは賛成する、今日は特に寒かったから。

色々と準備をして荷台を降りる。

宿の入り口におっさんが待っていた。

おれが着き、扉を開ける。

オレンジ色の村の中、オレンジ色の宿内で一夜を明かした。

12話

次の日、朝早くから宿を出て帰路へ着いた。

行くときは寝ていたからわからなかったが、リンケンから古都“ブルネンシュティグ”まで約20時間。

結構な距離だ、時間でおれに分からせる。

そしてそのほとんどを、寝て過ごしたと言うことは、自分でも驚くほどだ。

今は古都“ブルネンシュティグ”の中、運転席から外を覗いた。えらく活気に溢れていて楽しげな感じを醸し出す。

おっさんは古都で食料を買うと、すぐに馬車をだした。

それから10時間ほど経つと今度は鉦山町“ハノブ”が見えてきた。今回も通り過ぎるだけ。

古都と比べてしまうと活気は死んでいるようにない。

そんな町を背にして馬車はひたすらに走った。

以前通った道をズンズンと南に進んでいく。

外は綺麗な緑色が後ろに流れていく。

見とれていると時間を忘れるようだ。

それも飽きたのでまた寝ることにした。

目を閉じて暗闇に浸る、外の音がはっきりと耳に流れ込んでくる。

風の音と木製の車輪の音が混ざって、なんだか心地よくなってくる。

そんな頃、馬車の外はあの納骨堂の前を通り過ぎていた。

おっさんは何にも気にせずに、馬車を操り道を走っている。

馬車がスギの木を通過して数秒後、木の陰から影がずっと現れた。

それは、馬車を見るとゆっくりと地面の中に吸い込まれていった。

母親の胎内にいるような暖かさを感じながらおれは黒いここを漂っていた。

いきなり、体が揺れ息ができなくなる。

苦しくて、どうしようもなくて。
もがけども、どうにもならない。

そんな時、すっとした一線の光が目の前に現れおれを救った。
ぱっと飛び起きる、息が荒くて手のひらに汗を握っていた。

「・・・夢。そうか・・・」

出た言葉は安心一杯のものだった。

気がつけば、馬の蹄の音が止んでいた。

そして後ろからおっさんが現れてこう言った。

「おし！アウグスタのブリッジヘッド方面出口門に着いたぞ。お疲れさん！」

急だったもんだから一瞬フアティマの時が止まった。

そのあと「・・・わかった」と返事をしてゆっくり荷台を降りた。

ここでおっさんと別れる、彼の家がここだからだ。

おれは彼に深く一礼をして門を出て行った。

幅のない“ブンド川”を渡り昼間の平原を歩く。

道沿いにひたすらに。

右には海が広がっている。

それを眺めつつブリッジヘッドまで足を運んだ。

辺りが薄暗くなってきたころ遠くに明かりが一点、見えた。

歩きながら考えるのは2つ。

兄のこととおっさんのこと。

兄は結局見つけられなかった、どこにいたと言う情報さえ掴めずに。

このことを母に話すのは辛い。

見つけられなかったのだから。

ぐっと力の入る口元と手。

顔は下を向いている。

話題を変えよう、そう思いおっさんのことを考えてみた。

色々、世話になった等を瞬時に思い巡らせる。

それでもやっぱり気にかけてしまう兄のこと。

首を横に振って無念を断ち切る。

そして、ふと顔を上げると結構近くになっている光たち。

ファティマは走った、故郷の暖かい光の下へ。

門をくぐるとき、刻は草木も眠る丑三つ時だった。

1話

町の中はいつも通り明るかった。

でも、少しだけ雰囲気が変わっている、そんな気がした。

人気はある、魚市場の活気も変わらず、それじゃ何が違う？

とりあえず歩き出してみた。

自分が思っていることはまるで嘘のように何とも無い。

それからあちこち眠気を背負いながら歩き回った。

そしてなんでもなかったんだという結論に達したので、おめおめと実家に帰った。

少しばかり震える手で扉の取っ手に手をかける。

実家までは入り口から数分なのだが、色々うろうろしたせいで遅くなってしまった。

中はもちろん消灯されていて静かだ。

取っ手をゆっくり引っ張る。

ガツという音で不意に驚かされる。

鍵がかかっている。

当たり前のこと。

でもファティマは鍵を持っていない。

ただ単に忘れたのだ。

しゅんと肩を落として自分のギルドへ足を向けた。

ギルドは実家から2、3分、倉庫の中に作ったので町の入り口からでも一際目立つ。

それはまだ明かりを外に漏らし、たたずんでいた。

正面入口に回りドアの横のフォンを鳴らした。

2回連続で押す。

数秒後、誰かがドアの向こう側に近づいてくるのがわかった。そしてドアが開く。

「はい、どうされましたか？ってあんたか」というのはここの下端だ。

おれより年は2歳上だ、立場ではおれが上だ。

おれは言う。

「ああ。今帰った。少し折り入って話があるんだがいいか」

「ん？ああ、別に構わない。でも今リーダーはいないぞ」と返す。

「そうか・・・気にしないが」と答える。

それじゃと中へ通される。

正面からはダミーの荷物を積み隠しているが、奥にはテーブル等があり宴会も開けるほどの広さがある。

そこはこの時間とは思えないぐらい騒がしかった。

みんな酒が入っている。

人数は、ぱっと見た感じ10数人か。

おれの前の男が大きな声で言う。

「おい！お前ら、副長が戻られた。挨拶しろ！」というときとさっきとは全く別の空間かと思うぐらいしんとなる。

そして全員がおれに向かって礼をする。

おれは「・・・ただいま」というとみんなさっき状態に戻り「おかえり！」と返してきた。

これは仕方の無いことだ。

身分が上のものにはそれなりの礼儀を見せなければならない。

それはどこでも同じこと。

でもここでは上身分のやつが外へ出るときと戻ったとき、そしてギルドメンバー会議などがあるとき以外はみな平等。

礼儀は一瞬のみ。

だが、それに気持ちを込めれば、ずっと敬意を払い続けているのと同じだとリーダーは言った。

皆、それに従っているのだ。

おれは特にこの歳だし、型っ苦しいのが苦手、だからギルドのこの掟に大賛成した。

おれは適当な席へ座る、そうすると誰かが「おつかれさん」といって飲み物を持ってきてくれる。

「ありがとう」と返し飲み物を受け取る。

酒はダメだとリーダーから歯止めをかけられているので飲めない。

だからいつも決まってオレンジジュース。

お子様っぽいが好きだからしょうがない。

いつも通りグラスに口をつけ一気に飲み干した。

2話

その行為を最後に、おれは机に伏せることとなった。耳からは全く何も聞こえてこない。

そしておれは安らぎへと向かっていった。

目を開け気がつくと、おれだけ残されたギルド倉庫。

誰もいなかった。

外はもう明るく日も照っている、おれはすぐ身支度し、外へ出た。潮風が一瞬強く吹く、反応して帽子を押さえる。

懐かしい匂いだった。

それからどうしようかと考えたが一旦中へ戻ってみた。すると、さっきは気づかなかったことがあった。

おれは上着を誰かに掛けられていたらしい、自分が座っていた席に上着が落ちている。

上着を拾い上げ、テーブルに上げる。

その時、テーブルの上の小さなメモ用紙に目が行った。

ひょいと手に取り中身を読んでみる。

「お疲れさん、副長。今日はまあ、ゆっくり休むのもいいが、まず実家に戻って顔見せてやるのが先だ。かなり心配してたみたいだからな」

リーダーからの言葉だった。

徐にメモをひっくり返すと、そこにも何か書いてあった。

「p. s」明日、アウグスタからおれの旧友が来るのだが、お前にはおれと一緒に来てもらいたい」とあった。

否定をする理由が無い、もちろん出るつもりだ。

それをポケットに入れ、先ほどとは違うところから出た。

扉の鍵を閉める、そこは裏口。

ゆっくり実家の方へ足を進めた。

家の前に着くとやっぱり、ドアを開けるのを躊躇ってしまう。それでもドアを引いて中に入る。

「ただいま」という前に目に入ってくる見なれた部屋。

そこにはベッドに寝ている母と、それを世話してくれているおじさんの姿があった。

帰宅の言葉を言うと「おかえり」と優しく返してくれてた。

それから色々話をして、とうとう兄の話になった時、少し顔を曇らせてしまった。

そのせいか2人はわかったように一言、「・・・そうか、わかったよ」と言ってくれた。

おかげでこちらの曇りも少し晴れた気がした。

それでも後悔が多少、心にこびりついた。

その夜はなんだか暖かい夜になった。

次の日はリーダーに言われた約束が待っていた。

「・・・いってきます」といつも通り言って、家を出た。

今日も晴れていていい天気だった。

ギルドの方へ歩いていくと、なにやら見慣れない格好をした人たちが、正面入口に集まっているのが見えた。

おれはそれに関心で裏口に回り、中に入った。

するとそこには、ギルドメンバーたちが勢揃いして、椅子やテーブルに座っていた。

その集団が顔を向けている先にいたリーダーが、おれに言う。

「お前、もうちょい早く来い！あちらが待ちくたびれているぞ」

「あ・・・すみません」移動しながら頭を下げた。

おれが来たことにより、やっと集団が動き始めた。

全員で表にいるあの集団を出迎えにいく。

正面入口を開けてまず始めにリーダーが、続いておれともう一人の

副長が出る。

それからぞろぞろと出てくる者ども。

正面にいた怪しい集団は、みんな白いマント、鎧を装備していた。手には鉄槌、もう片方の手には盾が。

そしてその集団の団長だと思われる人が、一歩前に出てきて一言いった。

「我らはアウグスタ聖教団体“ガブリエル”である。某はその長であるライシャム・マンテスである」

そういうと持っていた鉄槌を胸の前で両手に持った。

鉄槌の先は空を向いている。

それに応えるように、こちらのリーダーがこう言った。

「おれらはブリッジヘッドシーフギルド“ラシュバル”。おれはそのリーダーのダンだ」

そう言った後、帽子を取ってお辞儀をする。

すごい緊張と張り詰めた空気がここら一帯を漂う。

そんな時、二人の長がどちらとも無く笑い始めた。

最初は小さかったがだんだん大きくなり最後には馬鹿笑い。

なぜ笑い出したのかさっぱり分からないが、そのおかげで少し緊張が解けた気がする。

3話

その少し後、笑い声が小さくなり始めた。

もしかすると、この人が友達なのだろうか・・・、楽しく笑いつて
いることだし。

そう思っていると、こちらのリーダーが先に喋りだした。

「あああ、笑った笑った。久しぶりだな шам」

「ああ、全くよ。御主もあまり変わらないな」

「まあな、前あったのが5年前だな」

と馴染みの深いもの同士の会話が進んでいる。

途中、意味深な言葉が二人の口から出てきた。

「・・・ああ、そういえばあいつを連れて来た」

「あれかあ。話は聞いてたがその後どうなんだ？」とリーダーが尋
ねる。

すると「なにも起きなかった。だが毎日の修行はきちんとこなして
いた。・・・文句を言わずにな」という。

「あの修行をか!？」ものすごい驚きがあった。

その驚きからして相当なものなのだろうと誰もが察知する。

「・・・かなりの腕だな」とリーダー。

「ああ・・・かなりだ」と団長。

その直後、リーダーからちよつとした提案がでた。

「うん・・・、ならうちの副長と一戦交えてみないか？」という。

おれは驚きを心の中で爆発させたが、顔には出さなかった。

ポーカーフェイスの練習として毎日そうしている。

するとあちら側が「はははは。面白そうではないか。その誘い、受
けよう」と言った。

すぐさまあちら側の長が右手を顔の横に持っていき、なにかを払い
落とすような素振りをした。

そうすると彼の後ろから何かが歩いてくる。

鎧の音と足音。

そして彼の横に並んだ。

彼が「こいつだ」というと呼ばれた者はすっと一礼した。

「んじゃ、こちらも・・・」というリーダーがおれを呼んだ。

やつと同じくリーダーの横に並び礼をした。

「ほお・・・なるほど」というあちら側長。

長同士が目をあわせた後頷く。

そして両方の長が言うことには「あいつらを中で休ませてやれ。酒は出すなよ」とリーダー。

「皆の者、彼らが中で休ませてくれるそうだ。お言葉に甘えさせてもらいなさい」と団長。

その声が響き終わったあと、すぐにおれとやつ、そして長同士を残して周りのやつらは中へ消えていった。

2、3秒してリーダーが言う。

「それじゃ行こうか」そう言って歩き出した。

あとの3人もついていく。

数十秒歩いた後、開けたコンクリの土地がそこにあった。

その土地で向かい合わせに並ぶ2人。

一方は聖教団、もう一方はシーフギルド。

まさに睨み合う様に数秒立ち尽くす両者。

そして長同士がその場から離れる。

これから決闘が始まる、実際の武器も使用可。

おれは腰にある短剣に手を添え、体勢を低くする。

そしてすぐ動けるよう微妙に体をリズムよく揺らす。

あいては盾を前に出し、もう片方の手にある鉄槌を後ろに引いた。

そして全く微動だにしない。

動と静、シーフがリズムを刻み聖教者が無の境地。

その時リーダーが用意と叫んだ。

一回つばを飲み込む、この緊張感が好きではない。

刹那に思った次の瞬間「はじめ！」と合図が出た。

おれはその合図とほぼ同時に地面を強く蹴った。
全速力で突っ込む、まだやつは動こうとしない。
右側のホルダーに携えた短剣を手に持ち、ぎゅっと力を入れる、左手はまだ添えたままだ。

そしてやつの数歩手前で急ブレーキ、反復横跳びの原理でがら空きな胴の方へ。

左足に力を入れ一瞬のうちに体をひねり右手を顔の横へ。

その時やつが動く。

素早い鉄槌がおれの上部にあった。

かわせなかった。

右手を大きく力強く振って鉄槌に短剣を当てる。

相当な衝撃がおれを襲ったがその時はあまり感じなかった。

なんともけたたましい金属音がそこに響く。

すぐにやつと距離をとる、なぜかおれの顔にはすこし笑みがあった。

やつとおれはまた同じ構えをして睨み合った。

4話

もう一度突撃しようと思勢を低くしたその時、相手が空いている手の平をこちらに向ける。

それから、リーダーたちに向けて「数十秒、時間をくれ」と言った。長たちが頷く、そして高らかに声をあげ「一時の休戦とする！」そう言うとおれの方を見た。

おれも頷き、彼の言葉によって決闘は一時中断された。

構えを解き一息をつく、ホルダーに短剣をしまい込み首をならす。その時目に入ってきたものは、やつの全身だった。

そしていきなり、全身を被っていた鉄の塊を脱ぎ始めた。

鎧は綺麗な灰色をしており太陽の光で余計美しく見える。

まず手の物を取り、足を取り続いて、胴を取り除く。

鎧の下は薄い服のみで、そこから体型が窺えた。

無駄のない筋肉・・・、よほど鍛えられていることが、まさに目に見えてわかる。

最後に頭部を取った。

するとそこから現れたのは、澄んだ青い目をした長髪の男だった。

長髪は後ろで結っておりポニーテールのような感じだった。

腕もごつく、自分が受けた先の衝撃を思い出させる。

全て鎧を取り終わり、やつが長たちに深く礼をする。

準備が整ったようだ。

元の位置へ戻ってくる相手に挑発がてらこう言い放った。

「いいのか？その鎧を取っても・・・安全のために付けておいた方がいいぞ、聖教者！」

「その油断が後にお前の足枷となる。泣きを見るなよ・・・」

「言うじゃねえか・・・でもなその言葉、そっくりそのままお前に返す！」

「ふん・・・中々いい度胸だな。面白い」

やつは口を平たい三日月に変えてこちらを見ている。
その両者を見て頷く長、「用意・・・」またあの緊迫感が襲ってくる。

「はじめ！」

今度は両手にしっかりと短剣を持った状態で構える。

やつはさっきと同じような構え、違うのはあちらから飛び込んできたことだ。

かなり速い、左肩を前に出して突進してくる。

ファティマの攻撃範囲内に入った途端、やつが両手で鉄槌を足元から斜め上に振る。

大振りだが素早い、なんとか間一髪でかわしすぐさま攻撃に転じようとしたが無理だった。

斜めに振った鉄槌を今度は片手で真っ直ぐ振り下ろす。
とっさに左へ転がりなんとか回避する。

威力はすさまじく、鉄槌の落下点からは煙が出ている。

すぐに立とうとしたが、やつはその隙さえも与えてくれない。

また上から鉄槌を両手で持ち、すごい勢いで振ってきた。

ファティマはまたやつに転がされる。

今度も左へ転がる、それでなんとか体勢を立て直すことができた。
やはり落下点からは煙があがっている。

胸の前に両手を交わらせる。

一つ息をつき、やつの煙に映る影めがけ突っ込んだ。
めいっばい右腕を伸ばし鞭のように使った。

だがそれは簡単に避けられてしまう。

右腕の勢いを借りて体を回し、左腕で肘うちをだす。

それもやつの盾がついている腕により防がれてしまう。

しかし、肘うちが意外と力強く腕に入ったので、ふらつとよろける

相手。

ファティマは体をもう一度回転させ、かすりもしなかった右腕をまた構えていた。

打ち出す鋭いストレート。

何とか踏ん張り、手をクロスさせ、鉄槌の持ち手を短剣の刃の部分に当てる。

やつが切り傷を負うことは無かった。

力のこもった右腕は見事に止められてしまっていた。

その時やつが口から言葉を漏らす、「意外といい腕だな。・・・楽しいぞ副ギルド長！」少し笑みがこもった声だった。

右手が受け止められた瞬間から宙ぶらりんだった左腕。

その手に力を入れ右手同様、鞭の様に腕を振り、自分の右側に振り切る。

次の瞬間赤いものが線状に飛び散った。

左の短剣はやつの足へ確実に切り込んでいた。

だが傷は浅い、やつの筋肉で深くまではいけなかったようだ。苦痛に顔をゆがめる相手。

その隙を突き、距離をとったファティマ。

両者、肩で息をしている。

やつはなぜか目をつぶり傷口に手を乗せている。

何が起るのか全く予想がつかず、手が出せない。

見てるしかなかった。

少しだけ口が動く、すると手が青白く光りすぐに治まった。

手をよけたそこには傷口は無く、ただ破れた布があった。

ファティマは目を疑う、頭が混乱に陥ってしまい、少し固まってしまったのだ。

その好機を逃さなかった相手は、鉄槌を彼からみて右から左に豪快に振った。

ゴッというものすごく鈍い音があたりに響いた。

宙に浮くファティマ、苦痛が大きいため顔が変わってしまいう程歪めている。

背中を上にして地面へ落ちるファティマ。

彼は動けなかった、はすだった。

5話

少しの静寂、聖教者は武器を下ろしファティマを睨みつける。

周りから闘気がなくなっていることに気づくと、彼は肩で一つ息をして、転がる黒い物体に声を向けた。

「・・・いい動きだった、だがもう少しだな。体を動かせるようになったら、もう一度互いの得物を交えよう」

全く動かないファティマ、向こうで仁王立ちの男がもう一言付け加えた。

「聞こえてはいないだろうが、その脳に俺の名を刻み込んでやる。

お前に勝った男“エイディル”と言う名をな・・・」

そう言葉を置き捨てるとファティマを背にして歩き出した。

しかし、長たちは仏頂面のままだ。

その時だった、何かがエイディルを横切った。

黒い何かだった。

それからいきなり目のピントがずれ始め、その場に膝間付いた。

目が回っているようだった、目を凝らしても目の前の黒いものは良く見えない。

しかし目の前のやつの動きはなんとなく分かる、随分とよろめいている様だ。

ゆっくりと目の前が暗くなっていく。

うつ伏せでコンクリートの地面に倒れた、黒い何かも同様に。

黒い世界に一人、立っていた。

自分手も見えない程だった。

それでも前に進めば何か見えるだろうという勝手な思い込みで歩みを始めた。

いくら歩いたか、どれぐらいこの黒世界にいたのか分からない。
気がつけば高天井が目映っていた。

なんとなく横を見る。

目に入ってきた情報はファティマの姿だった。

やつはまだ寝入っている。

自分のペースで体を起こすと後ろから声がかかった。

「おう、起きたか兄ちゃん。ここはどこかわかるか？」と尋ねられた。

「ああ。意識も記憶も問題ない、はつきりしている」と返す。

そうすると「そうかそうか。ま、なんかあったらお前の手元にあるベルを鳴らしてくれや」にっこりと笑って背中をポンと叩かれた。
相手と背中越しで会話を終わらせ一息つく。

目を閉じて黙想してみた。

あの時横切ったのはファティマだと思ったが、やつにそんな力は無かったはずだ。

俺の一撃であばらを折り、その接触時にあれをやつに流しこんだのだが……。

なぜ動けた……、確かにあばらが折れたぐらいなら動けるが……

……あの動きはなんだ……？

もしやあれを無効にする力を持っているのか……だとするならば厄介な相手になる。

いや、俺がしくじっただけかも知れん。

もう一度確かめてみる必要があるそうだ。

すうっと目を開けファティマを見た。

やつは丁度その時に目を開けた。

歪む視界、ゆっくり起き上がり手で目を押さえる。

2回程頭を横に振り深呼吸。

手を元の位置へ戻し目を開けた。

太陽の光で目の奥がズキズキと痛む。

それでも先ほどよりは視界がよくなった。

ファティマも横を見た、そこにあったのはエイデイルの布団。彼はいなかった。

その時、後ろから声を掛けられた。

「よう、起きたか。何か飲むか？」と言われる。

体の向きを変え声の方向に身体を向けた。

声の主はエイデイルだった。

両手にグラスを持って立っている。

またエイデイルが声を出す。

「いるのかいらないのか、はっきりしたらどうだ？」と見下すようにファティマに言う。

彼は「・・・いる」と小さくもはっきりと喋ってエイデイルの片方のグラスを取った。

口をつけ一気に飲み干す、エイデイルも同様にした。

それからファティマは起き上がりみんなの方へ行こうとした。

エイデイルはグラスを提げその場を去っていった。

だがあるメンバーに止められてしまう、まだ動いてはいけないうと。

渋々ベッドに戻るファティマ。

ベッドに座った時、忘れていた横腹の痛みがまた蘇ってきた。

歯に、手に、力が入る。

うつむいてする舌打ちは自分の周りのみこだました。

6話

その日はずっとベッドの上で過ごした。

エイデルに負わされた骨折のせいでろくに動くこともできない。寝返りもできる状態ではない、打とうとする度脇腹に激痛が走る。それが嫌になり、気晴らしにと外へ出ることにした。

外はもう紺色で月が目立つ。

その影で地味に光る一番星。

ぬるい様な潮風が鼻をかすめた。

ギルドの目と鼻の先、右斜め前に灯台がある。

ファティマはそこへ足を進めた。

数十歩ほどでたどり着く場所だが、今はほんの少し近く感じた。

小さい頃はよく遊びに来たこの場所。

すぐに記憶を思い出せたのは、変わりばえしていないせい。

懐かしい記憶を思い起こしながら、夜道を自身の感覚頼りに歩み進む。

前はいつもそこに座ってカモメに餌をやっていた、ギルドで残ったあまりのパン。

ちぎって投げての繰り返し、でもそれは友達が増えたみたいで楽しかった。

その場所、灯台の足元に座り込み、目の前にある海を見た。

空の色と海の色はほとんど一緒。

月で薄っすらとその境界線が見えるだけ。

水面に映る月は上のより、揺らいで、鮮やかで、綺麗だった。

そうしてるとだんだんと心が安らかになっていく、そう感じる事ができた。

そんな時後ろから声を掛けられた。

振り向かずとも、今のおれには正体がわかった。

「・・・どうした、エイデイル」海を見ながら静かに言うファティマ。

エイデイルは「いや、お前に用事ではない。いつもの業をやりにな。・・・」とところでお前はとうしたんだ？」と聞き返す。

「ただの気分転換だ。」そう応答した。

聞き返した男は口元を水平のまま軽く頷いた、そうかと言わんばかりに。

応答した方はすぐさま立ち上がり先程来た方へ歩み戻った。

何も言わず、そこで業の準備を始めるエイデイル。

ギルドへ戻る彼の背中から伝わる感情、いら立ち。

久方ぶりに味わった敗戦のせいだった。

その怒りは誰から見ても分かるほど、大きなものだった。

それからと言うものの、聖教団は3週間そこに居座り続けた。

ファティマは2週間で傷を完治させ、毎日身近に勝者を感じながら体を鍛え続けた。

彼はリーダーに聖教団に関して質問を試みたが、毎度話を誤魔化されていた。

数えられないほどに質問を繰り返したが、きちんとした返答は無かった。

彼も諦めかけた頃、あの団体が来てから丁度3週間後。

長たちはまた会合を始めた。

それは全く時をとることなく終了する。

すぐさま結果がおれへと話される。

おれとやつの再戦日時だった。

当の本人たちは渋ることなくその話を了承した。

今度、見守るのは長たちだけではない、ギルドのメンバーそして聖教団の団員。

多くの視線の中で二人は前回と同じ場所へ立った。勝者に驕りは無く、敗者に恐怖は無かった。

三度武器を構え両者が向き合う。

片方の長が片手を上げる。

周りの人たちからの緊張感、相手と自分との間の緊迫感。

ひしひしと体に、心に、めり込んでくる。

声が飛ぶ、「はじめ!」と。

腕を素早く下ろすと、静かなこの場所に聞こえる服の摩擦音。

右脇をきっちりと締め腕を構える。

相手はこの前同様に走ってきている、一気に気合を高ぶらせるファティマ。

彼まで数メートルのところで、エイディルは急停止し飛び上がった。両手で振り下ろす正義の鉄槌、これを受けることはしない。

すり足でその強大な一撃をかわす。

ファティマは構えていた右腕を打ち出した。

エイディルはより低く体勢をとりかわす、つもりだったがその手はダメー。

本当の攻撃はそのすぐ後、かわせない速さで目の高さからやってきた。

打ち出した右腕をすぐに戻し、右足を蹴り出したのだ。

顔面に直撃し少しばかり固まる、その間に距離をとる前敗者。

そしてまた構える右腕、彼の目の前には左目の上部より血を流すエイディル。

そのせいなのかエイディルの左瞳が真紅になっているように見えた。

7話

するとまたあの時のように目を閉じるエイディル。彼の周りだけ空気が違った。

今度は手をかざすことなく傷口が塞がっていく。

こんなに隙がある相手同じ手は2度と食わないとファティマが短剣を片方投げる。

1秒とかからなかったがそれでもやつはかわした。

目を閉じたままで。

やつの周りの空気が徐々にあたりの空気に浸透していく。

ほんの数秒立たないうちに周りはやつの世界になってしまった。

全てを操られてしまいそうな、そんな緊迫感。

身構える手に少し震えがくる。

ファティマの目先のやつがゆっくり目を開けた。

やはりさっきのは見間違いではなかった、左瞳のみ赤く染まっている。

普通なら茶色や黒といった色のはずだ。

両者が目を合わせる、痛い程の空気の流れ。

いきなりエイディルは左手を突き出しこちらへ向ける。

右手は拳を作る、構えたのは脇と胸の辺り。

一息放ち一気に走ってきた。

鉄槌はもう持っていない。

ファティマも短剣をそこに投げ捨て相手を待った。

まずはやつのストレート右手を突き出し左手を脇あたりに構える。

ファティマは右にそれを避け右手のストレートをやつの頭に打ち込んだ。

すかさず構えていた左手を使うエイディル、相手の拳をしっかりと掴

み引き寄せながら体を回転させる。

ファティマの腕を脇に挟み右手で裏拳を放った。

がら空きのファティマの頭部に当たる直前で彼の左手がそれを阻止する。

両者、がっちり組む。

数秒の間両者の息遣いしか聞こえないような静寂の中でエイデイルの足音が響いた。

その時、両者の組が解ける。

もう一度彼に向かって同じ構えを取るファティマ。

彼は両脇を締め先ほどとは違う構えだ。

徐々に間合いをすり足で詰めて行くエイデイル。

二人の攻撃可能範囲内に両者が同時に入る。

先に仕掛けたのはファティマ。

素早いローキックが彼のふくらはぎに当たる。

だが全く効いてない様だ。

その足を戻すのかと思いきや、素早く彼の胴に当てる。

2段蹴りだ、だがそれが仇となる。

エイデイルにすぐさま足首をつかまれる。

彼は体を半回転させ軽々しくファティマを投げた。

何とか受身を取り無様に地べたへ落ちないようにした。

相手はこちらを見ている、ファティマはすつと立ち上がりもう一度構える。

両手を後ろに引き、手は軽く開いている。

少し肘を上げ体勢を低く前のめりにした。

今までと全く違う構えに相手は少しばかりの驚きを目のみで示しているようだ。

1，2とリズムを取り3で駆け出す、エイデイルは凄まじいタックル。

両者が駆け出すスピードはほぼ同じ大体彼らの真ん中あたりで2人

はぶつかつた。

その時どちらかが後ろへのけ反いた。

体の小柄なファティマの方かと思われたがそれは間違い。

体格のあるエイデイルの方がよろけさせられていた。

ファティマは片足でがっちりと地面を捉え、腕を真っ直ぐ伸ばし体全体を棒の様にしているのだ。

相手がよろけた隙をつきもう一度両手を引き、今度は拳を作る。

そして2つ同時に打ち出した。

回避ができないエイデイルへもちろんのこと拳が命中する。

威力はさほど無いが、それによりエイデイルは地面へ背中を打った。その間にファティマは上へ飛び上がった。

彼はこの期を逃すまいとし自分の脇腹あたりの高さからエイデイル目がけひざを落とす。

背中を打ったせいかほんの少し動きが鈍ったエイデイルだったが上からのひざは間一髪でかわすことに成功した。

ファティマはきちんと足で着地し構えを取る。

エイデイルは立ち上がり深呼吸をした。

8話

彼らがまた向かい合い駆け出す。

そんな時エイデルの体にはちよつとした事が起こっていた。

沸騰するように熱い血液が肩甲骨の辺りに集まりだした。

走りながら目の前のピントはずれていく一方。

かろうじて姿だけは確認できる、こちらへ向かってくる者目がけて拳を繰り出す。

ずっと交わされ自分の視界から消えた。

後ろを向いた瞬間に横からの攻撃、もろに顔面へ。

よろけながらすかさずそこへ手を出す、だが一瞬で彼はいなくなり今度は後ろから肘うちを食らってしまう。

その頃ファティマもエイデルの異変に気がついていて。

相手の動きが少し鈍っている、そう思った。

エイデルの肩甲骨辺りの痛みは我慢できないほどになっていた。

そこに丁度、ファティマの攻撃が当たる。

いっぺんに針で刺されたような痛みがそこら一帯を被った。

とうとう前のめりに倒れてしまうエイデル。

悲痛にうめきをあげるエイデル。

その声はこの世のものとは思えないような潰れたもので、耳障りにバチバチ言ってた。

長たちはその光景を見てすぐさまおれの勝利と声を上げ決闘を終わらせた。

倒れている彼の仲間が彼に駆け寄り何かを言っている。

その声は耳障りなバチバチに阻まれて聞こえない、と言うよりおれの意味がどっかに行ってたようだ。

目の前に人だかりができているのはわかっている、ただ納得しなかった。

勝ち方に不満があった、それだけだ。

こちらに向かって誰かが何か言っている。

そうしてファティマが立ち尽くしている間に彼は男4人に担がれてファティマと少し離れた。

すると彼らの長が自分の周りから離れるように言う。

皆は彼から距離をとりそれを見つめた。

ファティマは自分のギルド団員に運ばれ、ギルド長の近くに置かれた。

息切れはまだ続いていた、うめきも。

聖教団の長が下の者に指示を出し1分弱で出来上がった模様のついた円。

長の合図でエイディルが真ん中へ運ばれる。

長が合唱のポーズをすると円が光り出し、それと共に円の中心から強い風が辺りに吹き付けた。

長が目を開き合唱していた手を親指、人差し指のみくつつけたまま平たく開く。

また目をつぶる長、そして何かを唱えだした。

あのとときのエイディルと重なる光景。

そこらへんからおれはきちんとした記憶を脳につけ出した。

光る円陣は美しく、エイディルは悶えてうずくまっている。

唱えが聞こえなくなると地面に描かれた円陣から光り輝く同じものが浮き出しエイディルを縛りあげた。

声も上げず彼はぐったりしたまま動かない。

次に長は両手を徐々に放していき、肩幅で手の平を向かい合わせ勢い良く合わせる。

パンツと音が鳴ると空中の魔法陣は彼の中へ入っていった。

そうすると彼の表情は和らいでいきゆっくりと地面へ下ろされた。

次第に消えていく円陣、彼の仲間がすぐさま彼を抱えおれたたちのギルド倉庫へ向かった。

一息つく聖教団の長とその他。

彼らは急いでさっきの者たちの後を追った。

気がつくに残っていたのはおれとギルド長だけだった。

おれは後ろで自分の背中を支えてくれているギルド長へ顔を向けた。そうすると彼はこちらは見ず正面を見ながらため息をもらした。

おれは顔を元に戻しぼそっと呟いた。

「あれじゃあ、きっと勝敗はなしってことになるな・・・」こちらは薄っすら顔で笑う。

しかし、表情とは裏腹に湧き上がる感情があった。

淀んだわけのわからないものだった。

ゆっくりうつむくと先ほどの呟きを聞いていたのかリーダーは声を出した。

「どちらにしろ・・・引き分けだ」と。

その言葉にほんの少し安心し、雑草をむしった。

おれはその時やつの事情を深く聞こうとはしなかった、なにせ決闘したと言え赤の他人のことだから。

9話

その後ギルド倉庫に戻ってみると彼は子どものように安らかに眠っていた。

彼らの長曰く順調に回復しているそうだ。

それにしても回復が早い、まるで彼自体が傷薬であるかのよう。

早くても明日には全快するそうだ。

おれはその言葉を聴いて素直に微笑めた。

それから外に出て無意識にまた灯台の下まできていた。

うれしいことがあったとき、悲しいことがあったとき、ここへ来る。

そして海を見て出来事を思い出してため息をつく。

それが小さいときからの癖。

夢の次に落ち着ける場所。

ため息は少し白くなっており、海原からの風が冷たいことを表していた。

考えるのはエイデルの病状、倒れた原因。

なぜ倒れたのか、改心の一撃なんてものは一発も入れてない。

まだまだ本気の組み手のようなものだったのだが……。

しかも痛がったのは背中の方だった。

グチャグチャと頭の中が変になる。

気にははいけないという抑制心と、気になってしょうがないという好奇心が入り混じる。

ついつい後頭部をかきむしる。

そのまま首に手を持っていき首をさする。

ふっと息を吐き、すっと立ち上がる。

スパッとあれこれ考えるのをやめて帰ることにした。

翌日はからっと晴れて洗濯日和だった。

ギルド倉庫へ行ってみると体調のよくなった彼が腕立て伏せをして

いた。

軽く声を掛けると意外と軽く返してきた。

そんな彼の対応に口元が上がる。

彼の横を通り過ぎると他の人たちが元気良く挨拶をしてくる。

その声は大きすぎて、少ししたじする。

そんな人たちと挨拶を受け、返し、その足でリーダーの所へ向かった。

するとアウグスタの聖教団たちは跡形も無くなくなっている。

そこにリーダーがタバコをくわえ椅子に座り手紙を読んでいた。

そつと声を掛けてみるとリーダーはゆっくりこちらへ振り向き、おれを手招きした。

少し急いで行く、リーダーの前に立ちどうしたのかとたずねた。

「いやあな、それがさ。あいつ、俺にあの坊主を預けやがったんだよ」と言う。

全く何を言ってるのか意味が分からなくて「はああ」と生返事になってしまう。

それに気がついたのかリーダーがさっきのことを少し訂正して言い直した。

「ああ。わからなかったか、すまん。あいつってのはアウグスタ聖教団の長ライシャム・マンテス」と言いながらくわえていたタバコの灰を灰皿に落とし話を続ける。

「んで、坊主ってのはお前と決闘したあいつだ」と再度手紙を見ながら言った。

さっきの文章の代名詞を詳しい方にしてもう一度繰り返し読んでみる。

つまりリーダーが言いたいののは、アウグスタ聖教団の長がリーダーにエイデルを預けたと言うことか。

一瞬で驚きと言うものが顔に表れた。

「ええ！」と馬鹿に大きい声を出し目を見開く。

リーダーは「本当だ」とでも言うように首を立てにうんうんとしている。

瞬きの回数がその時だけ過剰に多くなった。

それから気がつけば午後の2時、リーダーがメンバー全員をホールに集める。

一つ咳払いをしましてまず最初に言ったのが「良く聞けお前ら、今日から新しい仲間を紹介する」だった。

それでメンバーたちがざわつき始める。

そのざわつきの中リーダーが大声で話を強引に進める。

「彼だ。盛大に迎えてやってくれ」というとリーダーの後ろからエイディルが姿を現した。

頭を深く下げ「よろしくお願いします」と一言だけ言うその後ろへ下がっていった。

その時前のメンバーたちの一人が声を出した。

「そいつは聖教団員なんですよ？ シーフギルドなんかに入れているんですか？」と。

正論だ、神を崇める彼らが盗みだのするところに入るといいうのはおかしいからな。

ここでリーダーが言う。

「いいんだ！こいつはもうこの一員だ。見た目は僧侶だがシーフギルドの一人である」と声高らかに言うメンバー全員が「わかりました」と敬礼し場が静かになった。

そしてその集会はお開きになった。

まだ信じられないが彼がここに入りおれと一緒に行動を共にすることまで決まってしまった。

リーダーが言うに「お前は副長なんだから色々教えてやれ。」とのことだ。

要らない荷が肩にのしかかる、なんだか気が重くなりそうな毎日だ。こうしておれとエイディルは2人1組のチームになった。

10話

その日はずっとエイディルと組み手をする羽目になった。やつは思ったとおり強くていつもやっている鍛錬とは一味違ったものとなった。

夕方になるのも早かった、彼と組み手をお開きにしてギルド倉庫へ戻る。

その時、脳裏にあの気になっていることが浮かんできた。言おうか言うまいか悩んでいると彼がこう言い出した。

「どうした、うんうん唸って。腹でも壊したか？」と少しからかう様な口調。

それに「あ、いやあなんでもないが……。うん、なんでもない」と、こう返した。

エイディルはそうかというように顔を前に戻しながら一回頷いた。だんだんと近づいてくるギルド倉庫、それと比例して湧き出てくる好奇心。

歩幅さえもまちまちで左右にふらふらしている。

エイディルは2回首を横に降ってため息をついた。

ファティマの頭の中の葛藤は好奇心の勝利で幕を閉じ、ドアの取っ手に手を掛けているエイディル向かってこういった。

「おい。少し話があるんだが、いいか？」と。

すると「ああ。別に構わない」と返ってくる。

ファティマはその足であの灯台の下まできて海を見た。

呼吸を少し整え、決意を固めた。

そこに丁度ついてきたエイディルが到着した。

「なんだ？」と彼が言うとならティマは「あの時の決闘、勝敗はついてないからな」と言う。

「わかっている」エイディルが当たり前のように言うとならティマは「なぜ倒れたんだ？」と直球に聞いた。

するとエイディルは真顔になって言葉を発した。

「あれは神から授かったものだ。神にとっては小さいが人間にとっては大いなる力だ」

「意味が良く分からないが・・・。」ファティマは彼に尋ねる。

「ああ、わからなくてもいい。ただそういう力だということを知ってくればいい」そう返してきた。

「それじゃ答えになっていない。おれはなぜ倒れたんだと聞いたんだが」改めてそういう。

そうすると「焦るな。答えは今から伝えよう。力の事と背中のを」そう言ってその場に座った。

ファティマもそれに続いて座った。

夕日がそろそろ海へ沈む頃だった、オレンジ色の光が海の水面に反射して綺麗に見える。

そんな日の光を顔に浴びながら彼は語った。

「遠い昔の事だ。この世界には“天上界”“地上界”“地下界”というものがあった。ある日、地下界の一匹の悪魔が天上界に侵入し、火の神獣が守っていた赤い石“RED STONE”を盗み出したのだ」

そういうと懷から一冊の本を取り出し、適当にページを開いていた。

すると中に小さな紙が挟まっていたのだ。

それを指でつまみ上げファティマに見せた。

そこには赤黒っぽい卵が写っていた。しかも、模様が ついていて、指を刺し「これか」と聞くとただ単に頷き話を続けた。

「“RED STONE”は護衛の天使によって守られていたがその天使は悪魔によって殺されてしまった。その石には自らの力を増大させる能力があるといわれていたから、それを使おうとしたのだらう」

「それによってお怒りになられた神様は悪魔が身を隠しているであ

ろう地上界に天使を送り込んだ。それが色々な文献に載っている“追放天使”と呼ばれるものたちだ」

「そしてその血を引くのがおれだ。つまり背中の痛みはその能力が覚醒しそうになって翼が生えそうになって生じたものだ」淡々と言う。

思わず頷いてしまった、それでもそんな話しは全く信じられない。そのもやもやした気持ちは図書館にでも行けば解決するのでもう一つの疑問をぶつけてみた。

「決闘の最中、あんたの目の上が切れただろう。あの時あんたの目の黒い部分が赤くなってたのだがそれも、神からの力に関係があるのか？」

「ああそうだ。おれの天使の血は天上界でも稀な“竜族”のものなんだ。“竜族”の瞳は皆、真紅なのだそうだ」確かではない本のよきな答えだった。

これで今もっている疑問はたぶん解決した、そう思った。でも、もう一つだけ聞きたいことが頭の中に浮かんできた。

二人、ともに立ち上がり倉庫を目指して歩き始めてすぐおれはやつにこう聞いた。

「あんた、あんな発作みたいのはもう起こらないとっていていいんだな？」

「そうだな。精神を落ち着かせていれば発症することは無いだろう」「そうか、それなら問題ないな。んじゃさっさと戻って明日あんたにシーフと言うのを教えてやる」強い口調で言った。

彼はわかったと言うように2回頷き、ギルド入口のドアに手を掛けた。

中に入ってみると華やかな飾り物がされており、倉庫内はにぎわっていた。

「なんだ？」とお互いに思いそのまま奥へ行く。

するとそこには新メンバーウェルカムパーティーと書かれた垂れ幕がかかっていた。

なるほどと二人はそろって何回か頷き、その騒がしい輪の中へ入っていった。

11話

昨日の夜から朝にかけて、全くえらい目にあつた。
全員が馬鹿騒ぎ、一足先にお開きにしたおれは眠れずに本を読んで
いた。

だが、その本も頭に入らず、活字が目映るだけ。
その状態で一冊本読み上げ無理やりに目を瞑った。
寝室は2階にあり、下からずっと騒音が聞こえる。

基本はレコード、その上にグラスの高音、さらに上乘せで人々の笑
い声。

酷い不協和音がギルド倉庫一帯に響く、やっときた睡魔もすぐに逃
げ出すほどだった。

仕方ないので下へ戻り、野郎どもと一緒に朝まで過ごした。

気がつけば皆、机に突っ伏して寝ている。

そこでやっと気がつく、エイディルがいなかった。

外に出ると日は頭のほぼ真上に輝いていた。

目の前には一人で組み手の鍛錬をしているやつがいた。

ファティマは彼にした約束を即座に思い出し、彼に声を掛けた。

彼もそれを待っていたのか汗を額に浮かべながら一言返事をした。

それから太陽が海面に消える頃まで組み手を休憩なしでぶっ続けた。
夜、ギルド倉庫は昨晚のお祭り騒ぎの後始末を行っていた。

そんな時だった、誰かがギルド入口のフォンを鳴らした。

一気に静寂に包まれる倉庫内、下っ端の一人が応対することになり
入口へ向かった。

この時間に依頼と言うのは珍しい、それにこの時間での依頼の前例
が全て裏の方の仕事。

先の空気になるのも仕方の無いことのように思える。

数分の張り詰めた空気、それが消えたのは入口に行った下っ端が帰
ってきた時だった。

全員が掃除用具をそこらに置きリーダーの元へ集まった。
真ん中のテーブルで依頼の内容を話す下っ端、リーダーとその他の
顔色が思わしくない。

前例どおりの内容だったのだ。
簡単な内容はこのようになる。

今日から1週間後の日、古都“ブルンネンシュティグ”では“誕都
祭”と言うのが行われる。

古都の誕生を祝して行われる祭りらしい。

その祭りに乗じてある人物を殺してほしいというものだ。

リーダーは「ううん」と唸って後頭部を掻く。

手と髪の毛のすれる音が聞こえる、そして結論に至ったのかファテ
イマを鋭い視線で見つめた。

ファティマは頷き依頼の紙を手に取り、丸め懐に入れた。

それと同時にリーダーから言葉が放たれた、「解散！」

後片付けも終わりおれとエイデイルはリーダーに呼ばれ、先の祭り
会場に行った。

ろうそくの火だけが辺りを照らしている。

淡い橙の光がリーダーの顔を浮かび上がらせている。

なんともいえない空間に足を踏み入れリーダーの前に座った。

「わかってると思うが、失敗すれば死ぬのはお前だ」いつもは見せ
ない表情で喋る。

おれとエイデイルはそれぞれにだが、きちんと頷いた。

二人の顔を見回し表情を元に戻し、懷から何かを取り出した。

それは白いカモメの羽のネックレスだった。

それをおれたち二人に手渡し、「それはお守りだ。厄除けから合格
祈願まで全てが詰まっている」と冗談を言いながら笑った。

こちららもふっと笑顔になる、リーダーの存在感はものすごく大きか
った。

次の日、早朝にもかかわらずメンバー全員がおれたちの出発を見送りに来てくれた。
口々に「頑張って来い」とか「必ず戻って来いよ」なんて言っている。

エイディルにも言葉が掛けられた、彼はおれのパートナーとして一緒にいてくる。

メンバーからの激励が彼にはものすごくうれしかったみたいで、雰囲気は暖かく見える。

そんな時、おれたちの後ろから声がした、馬車のおっさんからだ。

「よし、いくぞお前たち。さあ、乗った乗った」と少しせかせるような言い様。

でもこれが逆にいい、このままでは中々出発できそうに無かったからだ。

おれの後にエイディルが乗り、後ろの布をたくし上げ、皆に手を振る。

ゆっくりと走り出す馬車、おれはいいスピードになるまで手を振り続けた。

そうして今度は最初っから馬車に乗って港街“ブリッジヘッド”を出た。

1話

おっさんの馬車は北へ北へ進む。

まずは、神聖都市“アウグスタ”へ向かう。

港街を出発して数十分程、体を揺らした後おれはおっさんに問いを投じた。

「なぜ今日は、ブリッジヘッドにいたんだ？」

すると、彼からは非常に簡単な答えが返ってきた。

「何でって言われてもなあ、仕事だからよ」頬が少し動いて笑ったように思えた。

道の正面を見つめるおっさん、その背中から話しかけるおれ。

きちんと顔を見て話をしてないが、なんだか表情が分かるようだった。

後ろではエイディルが、荷台の上から降り注ぐほのかな明かりで本を読んでいる。

おっさんとの話を終え荷台に戻ったおれは、元聖教団体のやつを数秒眺め一言言った。

「・・・今何読んでるんだ？」すると聖書だと返ってきた。

現在自分の所属している団体を分かってないのかと考えていた。

すると、エイディルから思わぬ言葉が出てきた。

「自分でも分かってるつもりだが、仕事の内容を考えると。どうしても落ち着けんのだ」と。

本に目を置いたままで口を動かす、その顔はかなり強ばって見えた。この荷台の中のコントラストのせいかもしれない。

その時、内心ものがすごく安心できた。

やつもおれと同じ心境で古都の向かっていると確信したから。

床板に尻をつけどっかりと座り腕を組んだ。

それから目を閉じ、ゆっくりと現実逃避に逃げていった、町に着くまで。

浮かんできた映像は白っぽい砂浜だった。

不意に後ろを振り返ってみる、何も無い。

緑の壁が自分の来た道を塞ぐ様に広く築かれている。

よたよたと後ろ向き歩きで速度を落とす、周りにも何も無い。

風は心地よい、太陽は暖かい。

誰もいないがそれがいつも通りだと分かっていたから、こればかりも怖く無かった。

そのまま波が寄せる青へ駆けて行った。

足に伝わる冷ややかな水は春の終わりを告げているらしい、そう聞かされた。

そんな時どこからか声が聞こえてきた。

声の響きは周りの景色を壊し、和やかなこの空間を崩壊させた。

体を揺さぶられる感覚を暗闇で感じる、目の前に人がいるようだ。

「・・・ろ。おい、早く起きろ！」目を開けて映ったものはエイデルだった。

先の夢のせいなのか心がゆったりしたものになっている、のろろと聞いた。

「・・・ん。もうハノブに着いたのか？」目をこすりながら口を動かす。

「違う。とにかくその眠っている頭を覚ませ！今すぐにだ！」激しい口調、険しい表情でこちらに言葉を返す。

置かれている状況が全く分からない、それでもすぐに頭を覚醒させ荷台の中を見回した。

エイデルは荷台の後ろ、運転席の反対側に戦闘態勢でひざを着いていた。

顔はまだ険しい、最初に目に映ったときより尚更かもしれない。

そして運転席には誰も居らず、おれの隣に右腕に包帯を巻いて、ぐったりしているおっさんがいた。

この二人を見てようやくだが自分が置かれている立ち居地を理解し

た。

腰のホルダーに入っている短剣を両手に握りしめ、背中の方こうのエイディルに言った。

「なんとなくこの状況が分かった気がする。とりあえず敵の数を把握したい。外を覗いてみてくれ」短剣から人差し指だけを自由にし、運転席のカーテンに掛けた。

その布切れを押すように外の様子を確認する。

「・・・やっかいだな。ここらの盗賊団だ。数はざっと・・・」と言おうとした時、目の前がきらっと光った。

まぶたを限界かと思われるぐらいまで開き、腰を固定し上半身を後ろに下げた。

頭を打つ数センチ前で腹筋に力を入れ頭を止める。

実際は上だがファティマの目の前にあったものは刺さると抜けない様細工のしてある矢だった。

額にじむ冷や汗少しの手の震え。

そこから跳ねる様に荷台の内側へ入り、エイディルに敵の数をざっと伝える。

彼からも敵の人数が何人かを聞き、そして作戦を立てた。

無謀かもしれないが、エイディルの回復能力を考えると多少の傷は大丈夫そうだ。

1、2、3の合図で外へ飛び出し、やつらを一網打尽にしようと言うものだ。

ファティマはエイディル同様、先ほどの場所に戻り少しばかりの深呼吸をした。

それから目で彼と合図してカウントダウンを始めた。

「1・・・、2・・・、3！」きちんと聞こえるかどうかの風のよな声でファティマは外に飛び出す。

エイディルはその声を聞き取り、合図とほぼ同時に外へ出た。

その頃ハノブから南に歩いてくるマントの人が居た、昼なのにもかかわらず頭からフードを被りカバンを背負い急停止したまだ見ぬ馬

車の方角へ足を進めているようだ。

2話

二人は飛び出してすぐ、目の前にいたやつを気絶させ相手全員に対して挑発した。

「どこぞの野郎共かはしらんがおれに喧嘩売るとはいかれてんな」
ファティマが中指を上にしてにやける。

「お前たちは動いているものなら何でも襲う、そういう単細胞どもなのだな。・・・神もいたずらな・・・」エイディルがため息をつきながら顔をうつむかせ首を振る。

この言葉がうまくやつらの心を逆なでしたのか、リーダーらしき人物が敵の壁の後ろから現れた。

「きさまら俺達を知らないのか？」半笑いの顔をこちらに向けてくる。

ファティマは呆れた表情をして首を振る、エイディルは無視した。周りからくすくすと笑い声のようなものが聞こえてくる。

おれたちの反応を見たやつらのリーダーはいやらしく口の端を尖らせた。

「・・・それじゃ、どうやら俺達が何かつてのを教えてやらなくちゃいけないなあ」笑い混じりの声に一瞬、空気が張り詰める。

空気が痛い中、やつは話し続けた。

「おれたちはここいら一帯をまとめているシーフギルド“ブルー・シューティングスター”だ！」周りのやつもいやらしくにやけだす。長い刹那の後ファティマの口から出てきたのはこういうものだった。

「あははははははははははは・・・くくく・・・ゲホゲホ。んうん・・・くく・・・んぐうあはははははは！」大爆笑、つぼに入ってしまった。

エイディルも鼻で静かに笑った。

「はあはあ・・・なんなんだその名前。子どもっばい、ださい、そ

して何よりお前のそのしてやった顔がもう・・・くくく」うづくまりながら全身を震わせて笑いを堪えようとする。

おれら二人だけ非常に明るくなったが、周りは地獄のようなことになっていた。

それでも尚ファティマは言葉を続ける、「なんか、大道芸団みたいな名前だ。・・・いやあすまん、ついつぼに入ってしまった」平謝りで目の前のリーダーを拝む。

その行為が敵全ての堪忍袋の緒をズタズタに切り裂いた、袋ごとと全部。

やつらのリーダーが怒りに任せてこちらに吠える、それが合図だった。

ファティマの前後、そして左からやつらが襲ってきた。

正面のやつが一番近場だったので、そいつの胸元を掴み左へ投げ捨てる。

投げた後自然と向いた体の向きはさっきの状態で言う後ろ、振りかざされた剣を寸で右へ飛ぶ。

すぐに地面につくほどの飛距離、右足のばねを使い剣を振りかざしたやつに拳を入れた。

その時後ろから2、3歩足音がして、ファティマはしゃがんだ。

先ほど頭があったところに今は槍の刃の部分がかった。

左足を真っ直ぐ伸ばし、右足を軸に回転させる。

それが相手の足に引っかけかき頭を左にしてこけそうになる。

相手にはどう見えていたのだろうか、ファティマが下回転蹴りを利用して相手の顔面に拳をめり込ませたのだから。

ゴンッと鈍い音、殴り飛ばされた相手は空を白目で眺めている。

ふうっと一息ついて、辺りを見回す。

何人いるのかと思うほどの人の量、最初に見たときよりも人数が増えているように感じた。

とりあえず、しゃがんだ時に落ちた黒のテングロンハットを拾い上

げ、少しだけ深く被る。

そして相手にニツと笑顔を見せてから、また戦闘態勢に戻った。

ファティマが敵に囲まれていた時とほぼ同時で、同じように前後、そして右から襲われそうになっていたのがエイディルだった。

まずは右から来たやつ、右手に持っている鉄槌を小さく鋭く振る。相手は持っていた武器で防御するも全く意味が無く、腕の振り切った方に飛んでいく。

その時前から剣が振り下ろされた。

もう片方の手についている盾で防ぐ、少し低いような金属音が彼らの周りに響く。

瞬間、右手の鉄槌を回転させ、鉄槌の先を親指側から小指側に握り替えた。

体の開きを元に戻す、それにより生ませる遠心力が破壊力を増加させる。

左手の下に右手を滑り込ませるようにして、相手のわき腹をえぐった。

また鉄槌を回転させ元の握り方に戻し、サツと後ろを振り向く。

敵が胸の前で両拳を構えてすぐ目の前にまで来ていた。

とっさにエイディルは右足で踏み切り体を横にして、左肩のタックルをおみまいした。

相手も中々腕の立つやつで、そのタックルを両腕でガードしたのだ。少し吹き飛ばされるが2本の足できちんと立っている、そしてもう一度構え直した。

ステップを刻み攻撃態勢に入る相手、こちらは両手で鉄槌を持ちそれを左肩に掛ける。

足を広げひざを落としぎゅっと手に力を入れた。

一対一の真剣勝負、そのような空気を一匹の雑魚が蹴散らした。

3話

エイデイルの後ろから襲い掛かる。

相手は助走して高く飛びエイデイルの上から剣を振り下ろし彼を切った・・・はずだった。

その攻撃を察知したエイデイルが体のみを後ろに右回転させ、鉄槌を掴んでいた左手を離した。

右手のみの装備となった鉄槌が勢い良く振られ、また相手のわき腹辺りにヒットした。

エイデイルの左に、2回ほど硬い地面の上を跳ねて転がるさっきの雑魚がいた。

ぐったりと地面と顔面接触している、意識は無いようだ。

もう一度先の構えをして一対一の構図が甦った。

ハノブを後にして少したった頃、遠くの方で騒がしい音がしていた。気になってしまった私はそちらの方へ急いだ。

だんだんと近づいてきた好奇心の対象場所には、多人数の盗賊団と殴り合いをしている二人の男だった。

彼ら二人の真ん中には馬車が一台止まっていた。

「あれを守っているのか・・・、たった二人で」呆れと感心が入り混じった様な頭の中。

「ふっ。悪い人ではなさそうですし、少々のお手伝いといきましょうか」鼻で笑い、ベルトについていた一本の棒を抜き取り起立する。棒は先が丸くなっていて、もう一方の先が全く鋭くなく尖っている。丸い方を上に、手に持ちぶつぶつと何かつぶやいた後、棒を持っている手を八の字に回した。

すると、彼の足元から青色の魔法陣が現れ光り、眩きと八の字回しが終了するとすうっと消えていった。

彼は深呼吸すると棒を天にバツと突き上げ大勢の方へ顔を向けこう

言った。

「ライトニングサンダー！」と言い放った後、棒先を大勢の方へ向ける。

あんなに青かった空は一瞬で黒くなり、ごおごおと唸りを上げだした。

黒の中に多少の光の筋が見え隠れした次の瞬間、轟音と共に大きなイカズチが真下へ下りた。

下にいたのは彼の目の前の大勢、馬車から左、エイディルたちの方への攻撃だった。

エイディルは無事、丸焦げになっていたのは盗賊団だけだったのだ。もちろん狙い通り、すぐさま足元に青い魔法陣を呼び出し小声でつぶやく。

魔法陣が完全に消え終わる前に、また同じことを繰り返す。

だがつぶやく言葉が少し違ったようで、出てきた魔法陣は緑色だった。

それが消えると大勢に向け走りながらまた棒を掲げ言う、「テレポーションション」と。

すると今度は自分のいた地面が緑色に光り、ファティマの近くにあった同じような光りの上へと瞬間移動した。

そこにいた全員が驚き、警戒した。

彼は口元を引き上げ棒を掲げる、口から出た言葉は「グラビティアンプリファア」だった。

言った瞬間に彼の周りの地面が一瞬で黒くなり、彼以外の全員が地面へたたき落とされた。

どんなにもがこうが何をしようが、誰一人として十分に体を動かさない。

誰か重い人が何人も自分の上に乗っている、そんな苦しさを憶える。その時、盗賊団のリーダーが叫ぶように言った。

「お・前は！・・・なに・・・ものなん・・・だあ！」言葉を発するのでさえ苦しい中、こんな言葉を言い切った。

するとフードを被った男が言う、「私は通りすがりですが、つきここの方を見ていた者でして」そう冷静に淡々と話す。

「この二人がなんだか襲われているように見えたので、少しばかり助太刀をいたそうかと思ひ攻撃をさせていただきました」浅いお辞儀をする。

「もし、見間違ひならばすぐにこれを解除いたします。それでどうなんですか？ 私の勘違いですか？」と易しそうに言うフードの男。盗賊団のリーダーは「あたりまえだ！！」と嘘を堂々とフードの男に貫かした。

「そうですか・・・勘違いですか・・・」と残念そうにつぶやくとこのわけの分からないものを素直に解いてくれた。

その瞬間、盗賊団の誰かが彼に目がけて剣を投げた。

ほんの少しの距離しかないので『当たった』と誰もが思った、だがそれは剣が真っ直ぐ飛んでいったことで否定に変わった。

剣を投げた男の後ろに彼はいて持っている棒を男に向けている。

そして一言、「なにもしなければ・・・」と言うとそっと彼に棒をくつつけた。

そうすると彼は一瞬で凍り漬けになり、人間本物の氷人形ができてしまった。

氷人形の後ろにいたフードの男が、彼の頭を棒で叩くとそこからガラスが割れる様に全体が粉々になった。

ファティマは目を疑った、だがその肌に触れるひんやりとした冷気が現実であることを伝えた。

生きたまま剣で殺すよりも残酷なものを見た気がした。

刹那に襲い掛かる吐き気、口を押さえて必死に我慢した。

フードの男が喋る、「次にこうなりたいやつは私に何か仕掛けてみてください」笑顔で口を動かした。

4話

凍りついたのは砕かれた彼だけではなかった、ここら一帯の空気がそうなっていたのだ。

盗賊団のリーダーも、下っ端たちも口を開こうとはしなかった。重く静まり返るここを一変させたのもまたフードの彼だった。

「時に嘘と言うのは我が身を助けることもあるが、我が身を滅ぼしてしまうこともある」

「それでも、一つ共通して言えるのは前者も後者も結末でそれを暴かれてしまうこと」

「その結末は残酷か、はたまた幸福か。どちらを選ぶも嘘が暴かれた後の自分次第・・・」

彼は盗賊団のリーダーに話しかけているようだ。

話しかけられているやつは何を思っているのか、全身が震え下唇をかみ締めていた。

強い力で縛られた口から赤い線がでてきた時、彼は縛っていたものを解いて言った。

「撤収だ！倒れているやつは他のやつが抱えてやれ。負傷してるやつも同じようにな」

彼はその言葉を言い終わるまでずっと目を閉じていた。

少しの間をおいてリーダーが後ろに振り返り歩き出す、すると下っ端もせっせと後をついて行った。

去っていくもの全員が先程砕かれた彼に、涙しながら十字を切っていた。

すぐにここら一帯は人気の無い元の場所となってしまうた。

3人も無言でその場を動かない。

そこでまたしてもフードの彼が流れを変えた。

「あの、二人にお話が」と少し大きな声で言う、それを聞きエイデ

イルが馬車の向こうから強面でやってきた。

ファティマはその言葉で我に返り、彼の方を向いた。

そう、口一文字のしかめっ面で。

ファティマの横にエイディルが座ると、彼はマイペースに話し始めた。

「えーと、自己紹介をしてませんでしたね。私の名前は“ダリア”
といいます」

「・・・そうか、わかった。さっきの行為、一応礼をしとく。ありがとな」

「どういたしまして、シーフさん」笑顔でお辞儀をする。

「して、フードの男・・・ダリアといったか。おれはエイディルと
言う」

「どうも、エイディルさん。よろしくお願いします」こちらにもファティマ同様に挨拶した。

「いきなりで失礼なんですが、協力をして・・・」

「いや、しない。お前のやり方が気に食わないからな」

言葉を途中で切られたダリアに向かって睨むように言い放った。

するとダリアは、「あの場はああるしか方法がなかったんですよ」といって苦笑いだ。

「けれど人を殺める必要は無かったはずだ。なのにどうして・・・」

「だからですね、あの場はああるしかなかったんですよ。本当に」

「彼らにだってプライドがあるんでしょうし、いきなり乱入してき
たやつに全員やられたなんて恥以外の何でもありませんからね」

「・・・うんでも、あのリーダーは普遍的な賢さは持っていたよう
です。犠牲は一人で済みましたから」真顔でこの台詞を口から出す。
それによりファティマの心が激しく振動した。

「・・・あんたはなんだ？喧嘩のためなら人を殺してもいいっての
か！あああ！！」理性を失ったシーフがダリアに殴りかかる。

それをヒラリとかわして彼と正面で向かい合う。

暴れる彼を止めるためエイディルがすぐさま立ち上がり彼を後ろか

ら羽織り締めする。

「・・・意外ですね。殺しをためらうとは、シーフなのでしょう？ 仕事ではありませんか」

暴れる彼に向かって言葉を投げかけるが、「うるさい！ そんなことわかってる。・・・だがおれは人は殺したことがない」と暴れ牛のように言葉を投げ返す。

「モンスター方面担当つと言ったところででしょうか。んゝ、人の汚れの少ないシーフですか・・・珍しい」鼻でふっと笑う。

「ですが・・・あなたの目はもう『人殺しの目』になっていますよ」
暴れ疲れた牛に指を指し言った。

これが最後の引き金となった。

エイデルの締めをするりと抜け、ダリア目がけて一直線にダッシュした。

顔はもう鬼、叫び声のような雄たけびで飛び掛っていった。

懇親の右拳を振り下ろしたが当たらず、一瞬で地面が空に変わった。空はまだ曇っていた、先程よりも黒くなっているかもしれない。

起き上がるとダリアは何かを詠唱していた。

腰にある短剣を両手に握り締め走る体勢を整える。

その時ダリアは杖を掲げ、先程の盗賊とのやり取りと同じ言葉を叫んだ。

刹那、ごおごおとした雲の音が聞こえそして目の前が真っ白になった。

ファティマはあの時と同じ魔法による雷にうたれてしまった。

5話

暗い目の前の中、考えるのはギルドにきた依頼のこと。

『人殺しの目』になっていきますよ、そう言われて今思う。

全くその通りだ、おれはどうとう人を殺してしまうのだ。

いつもはこういう仕事を、おれには回さず自分でこなしてきたリダー。

子どものおれに気を使ってくれていたのだろうか、なんだか申し訳ないような、そんな気分だ。

この後、人を殺すと言う人間が今さっき目の前で起きた殺人を見て怒りを露わにするなんて少し滑稽だと思う。

でもやっぱり、あれには腹が立ってしまった。

おれも短剣は持っていたが、切れない裏の方を使って相手をしていた、自分の中でこれは喧嘩だと思って。

自分ではそう思っていて、他人から見ればおれたちは襲われ殺されそうになっていたのかもしれない。

実際そうだった。

あいつらを追っ払ったダリアにはおれたちが、襲われ殺されそうに見えていたのだろう。

相手も相手に、真剣だったかも知れない。

おれたちを殺そうとしていたのかもしれない。

沢山の思いが頭の中を駆け巡る、そうして自分の中で結論を見出した。

あれは仕方の無い犠牲だった、一人で済んでよかったとさえ思う。それでも無益な人殺しだけは今後一切しないでおこう。

そして、素直にダリアに礼を言おう、一応は恩人なのだから・・・。

ファティマは蒼い雷にうたれその場に倒れこんだ。

エイデイルは急いで、近づき心肺を確認した、・・・動いている。

ホッと一息、心配を外に吐き出すと後ろから話しかけられてた。

「生きてますでしょ？この魔法は本気でうってませんからね。大丈夫なはずですが・・・」

「ああ、死んでいない。気絶しているだけのようだ」

「本当ですか！？良かったです、死んでなくて」笑っていやがった。

「なぜこんなことをした。理由はお前の言っていた相談事と関係しているのか？」冷たく下に言葉を投げつける。

「もちろん。彼に聞かれてはまずいことかと思ひまして」

「あなたは・・・エイディルさんは、“追放天使”の血を引く者ですよね？」真顔でこちらを見てくる。

「・・・どうしてそう思うんだ？」

「どうしてってそりゃ、その銀髪と僧侶の格好、それになによりあなたには『治癒能力』がある」指をこちらに指し言う。

「その治癒能力、あるかどうかなんてわからんぞ」内心焦りながらも顔には出さずに喋る。

「え！？もしかして気づいてない？先程その子に近寄ったときに、手から青い光を放ってましたよ、あなた」

「・・・」全く気がつかなかった、無意識のうちに能力を出していたとは。

「・・・無意識だったようですね。それほどまでに大切な仲間だったんですね」

そう言うとは彼は、先程自分が碎いた男の元に歩み寄り、おれにこう言った。

「協力して欲しいこととは、この方を蘇らせることです」

「無茶だ。そんな事、神以外の者にはできない」目を見開いて言う。

「いえ、あなたが天使の血を引く者と見破ったからこそ、私は彼を殺した」

「そしてあなたはその力を抑えているようだ。それではこの方を生

き返らせることはできない」

それから懷の中に手を入れ少しあさり、一冊の本を取り出した。

茶色いトカゲの皮のようなカバーをあしらったものだった。

パラパラと適当にめくり、止めた箇所を音読し始める。

次々とダリアの口から出てくる言葉をおれはことごとく知っていた。

その本はおれが持っているものと同じだったのだ。

最後の一文を読み終わると、一言、言った。

「この本の中には、天使の力を覚醒させるものが隠されているって
言ったら、あなたはどうします？」

疑問を投げかける顔にはうつすら笑みが浮かんでいた。

6話

「それはない、そう答えるだろう。なぜならおれもその本を持っているからだ」

「でしようね」驚かず素っ気ない返事だ。

「そして、この本は天使の血を引く者しか所有してない」

本に手を置き話を続ける、「つまりは“天上界”から“地上界”への嫁入り道具、いや、夜逃げ道具か・・・」

「どちらにしろ持ってきたのは事実。そしてその理由は、天使の力を解放するための手段。自分または己が家族、もしくは我が子孫が人間ではなく天使だと自覚するための鍵・・・」

言葉に熱が入る、目と声が次第に大きくなっていく。

「・・・どうも、お前はおれの知らないところまで知りすぎている様だな。・・・誰から聞いた」低く重い声が彼のお喋りを強制的に止め、彼を冷静に戻した。

「・・・ある方から。私は力の“覚醒”と“抑制”の研究を独自にやっているものでね。その時この本をもらい、その話を聞いたんです」

ふらふらと、砕けた男の周りを歩きながら彼はこちらに向かって言った。

「そんな事は問題ではありません。力を覚醒するか否かが今の問題だ。んゝそうですね、もし協力してくれたら、この本をもらったときの話を詳しくして差し上げましょう。さあ・・・決めてください」

空は次第に晴れてきて、丁度日差しが雲を突き破ったときだった。

「・・・全てを、詳しく話せるのか？」

「ええ、もちろん。メモ、してますから」

「・・・力の覚醒は危険ではないのか？ある聖教団に入って間もな

い頃そう言われた」

「『君たちはもしかしたら、天使の血を引く者であるかもしれない。そうなれば力の覚醒をしなければならない。』」

「『だが、時は未だ満ちず。時、待たずして力の覚醒はありえないことだ。・・・死を招く』と」

その真剣な言葉も、彼のひと笑いで吹っ切れた。

「はははは。それは全くのデマです。私は実際に天使の力の覚醒を目の当たりにしている。しかもここ数年でね」

「話をしてくれた彼がね、実行したんですよ。そしたらなんときれいに天使へと姿を変えましてねえ。一瞬の出来事でした」

「ただ、その時は天使になった彼、一人でやってたんですよ。まあ、私が一人前のウィザードになってすぐだったからなんですけどね」

「あれから修行を積み重ねてきたので、魔力は今のあなたの十倍はあると思ってもらっても、過言ではありません。」

「・・・十倍か。・・・そうか」エイディルは考え込んだ。

“実際に見た”・・・、そんなことを言われると、自分の信じていた話が嘘に聞こえてしょうがなかった。

“死を招く”・・・この言葉だけは嘘ではない、そう思えて仕方が無かった。

本当に少しの間だけおいて、エイディルは意を決した。

「ならば、お前の話を信じよう」

目を閉じ、深く一つ呼吸をおいて言った。

「はじめよう・・・力の覚醒を」

ダリアは目を輝かせて、「そうでなくては・・・」と言った。

各自準備に取り掛かった、天使になるⅡ翼が生えること・人知を超えた力を得ること。

鎧をかぶっていた上半身は全てをさらけ出した状態、これで何の支

障も無く、翼が綺麗に生えるそうだ。

精神統一を繰り返しながら時を待った。

ダリアも地面に魔法陣を描き、外周囲の均等な位置6箇所に杭を刺す。

片手で器用にページをめくりながら目的の箇所を探していく、手を止め、目を瞑り、杖を魔法陣に向ける。

何かを口にする、すつと魔法陣が光った、準備が整ったようだ。

ふうと一息吐きエイデイルを呼びにいった。

そして、光る陣の真ん中にエイデイルが起立する。

「もうすこし楽にしていいますよ、力むといいことはないですから」

「ああ。わかった、・・・こんなんでもうだ」

「それでいいと思います。後は少し待っていてください」

そういうと、魔法陣から少し後ずさってダリアは杖を八の字に回し始める。

そして、青から緑、緑から黄、黄から赤に彼の魔法陣の色が変わっていく。

赤になった後、回すのをやめる、きつと最大まで自身の魔力を引き出したのだろう。

ゆっくりとエイデイルが入っている魔法陣に近づき、さっきの位置でぴたっと止まる。

それからすつとフェンシングのような構えをとる、もう一度目を閉じ深呼吸。

ぱつと目を見開き、全身で先程溜めた魔力を、限界まで増幅させ、高速に廻らせる。

一箇所で増幅させるよりも、全身でやった方が効率がいい、修行であみ出した技だ。

エイデイルは無心状態で、そこに立ち全てを受け入れる態勢に入った。

人から天使への、分厚い壁をぶち壊す儀式が始まった。

7話

「聞け！人の子よ。汝は天の子、翼の子。全能の神により創造されし者、人の上を自在に駆け回る者」

「今より汝は人を捨て天に召される。して即座に戻りて、同じ器へ入り、覚醒させよ。真の姿を・・・」

「砕け散るは下界の赤！生成するは天界の赤！双方の深き交わりを解き、後者を主とし器を満たせ！」

言いながら、杖を持っていないもう片方の手にあった本を、後ろへ投げ捨てる。

手先に神経を集中させ、力を集める。

そして杖は、彼の両手に触れられた。

その瞬間、魔法陣の光が一気に増し、中のエイディルを囲ったまま天高くを貫いた。

貫かれた空は雲が消え、いつも感じない美しさを感じさせた。

何かが降って来る、八つのオブジェ。

しなやかな体に布をまとう、翼を生やした銀の女神像。

空から音速で降りてきて、優しくふわっと地面に付く、こちらに背を向けて。

胸の前で合唱している目を瞑った彼女たち、体の中心に大穴を開けている。

魔術師はしっかりとした顔で軽く頷き、彼女たちを流し見て、杖を地面に刺した。

すると彼女たちが目を開ける、そして魔術師は目を閉じ下を向いて呟く。

「我、召喚者。大いなる刹那のみ我の言の葉を聞きて、我のみに従え。御女神たち・・・」

瞳の色が変化した、自我の緑から服従の青へと。

顔を上げ両手を重ね親指と人差し指とで三角形を作った。

「女神たち、御二手を広げ環状となり、光柱を囲め！」

瞬間移動し、エイデルの柱を等間隔で囲む。

すつと両手を伸ばして、各隣にいる女神に指先を向ける。

手の先から電気が走り彼女らの指先を繋ぐ、目を見開き体をピクツと動かした。

そうすると彼女たちは天へ移動した、どうやら彼女たちは瞬間移動しか使えないらしい。

ある程度の高さまで来るとぴたっと止まり、自分たちを繋げている電気を太く力強くした。

つまりは、力の増幅。あれだけの魔力があれば星を一つ破壊することも難ではない。

力を増大させていく彼女たち、そしてゆっくり柱の周りを回りながら手を近づけていく。

それにつられて柱のその部分が、小さくしぼんでいく。

完全に女神たちが手を合わせた時、天と地を結んでいた光はそこで途切れた。

銀色の輪の上空にはもう何も無い、ただ空が大きく敷かれているだけだ。

下には切り取られた光の棒、彼女たちは翼をたたみまた回転し始めた。

今度は先程とは比べ物にならない程の高速回転、銀の輪の中には青白い電気が引つ切り無しに走っている。

それからだんだんと速度を上げて下へ落ちてきた。

落ちる際、体を開いた穴から細長くした光柱を外側へ出し、そのまま頭の上を通らせて、銀の輪の中心へ集めていく。

地面に付くと即行で回転を止め、目の前の大きな黄色っぽい玉をそつと地面に下ろした。

銀の輪がここへ付いたとき辺りにものすごい突風が吹き、私は飛ばされそうになった。

目を腕で隠し風を遮ろうとした、だが抵抗空しく地面へ尻餅をつかされてしまう。

痛みに目を細める、一瞬で遠退いた痛みのおかげで、目を普通に開けることができた。

すると私の前には大きな黄色っぽい玉が置いてあり、その傍に守護者の如く周りを囲む女神たちがいた。

「・・・成功した。あとは彼の目覚めを待つだけだ・・・」
ふっと鼻から出た息は、安堵のものだった。

暗い中、ファティマは思っていた、そろそろここから出たいと。

その時だった、どこからかすごい突風が吹き荒れて自分が転がされた。

転がり、止まったところには薄っすらと、白の筋が黒の壁にはいつていた。

そこを指で剥がす、ぽろぽろと黒が取れていくのに快感を覚えた。

空気が入った丸いアレを潰すのと同じことだ。

夢中で剥がしてくとそこには明るい世界が広がっていた。

外へ出たくて体をよじらせ、無理に出ようとするが穴がまだ小さすぎる。

子どものように、欲に忠実な彼は穴を大きく拡大していった。

そして外に出る・・・、そこは草原だった。

皮の手袋をはいている、・・・一体ここはどこだったかな？

まじまじ手を眺めている時、後ろからきた強烈な光がおれの視界を狭めた。

「・・・うう、なんだ？」後ろを振り返る、まぶたは開いてるか開いてないかの幅。

良く目を凝らしてみると、そこにあったのは塊から出てきた光り輝く人だった。

8話

翼の生えた人間・・・、力なく浮遊し腕を組んでいる。

始めは痛いほどの光も、だんだんと弱まり続け、目にも優しくなってくる。

気がつくともちつきつけられるように、そちらへ歩いていった。

つい足元にある岩の一面に足を持っていかれる。

体を地面へ向かわさせられるが、とっさの受身で回避、とその時あることを思い出した。

焦りが体中から一気に噴出す。

ぱっと起き上がり自分が先ほどいたところに目を向ける、・・・誰もいない。

一点を見ることができず、視点があちらこちらに泳いでいる。

「・・・あいつら、どこに」首も使い、動かせる限界まで目を行かせるが見当たらない。

こっちじゃないとすれば・・・、後ろか！？すぐさま立ち、体を回転させた。

丁度目に映ったのは、翼の生えた人が地面へ降り立つ瞬間だった。

あの光はもう出ていない、目を凝らしてしかとその人を見た。

「・・・エイディル？」白銀の長髪、その顔つきはまるでそうだ。

その目の前には、あの通りすがりダリアが、真剣な面持ちで彼を見つめていた。

・・・まずい！あのままじゃ、エイディルがやつに殺されてしまう。そんな事を思ってしまうのは、自分がやつに攻撃を食らわされたから。

事情を知らないのは、ファティマただ一人。

どんな事態か把握している傍から見れば身勝手なもの。

でも何も知らない彼には一大事に思えたものだった。

素早く加速する、速度は増していく一方なのに足音は無くなっている。

これがシーフの本気、・・・そして殺人業。

できるだけ息を殺し、姿勢を低くし、気配を無くす。

「・・・良かった、無事な様で。意識は・・・、まああったら私と話しているでしょうし。それでは起こしましょうか」

安堵の表情で優しい声を放つ、そして一歩近づいた。

その時、風が私の体を通り過ぎる。

のどに当たる冷たい感触と脇腹に当たる尖った感触、「あなたですか。あなたな何か勘違いをしているようだ・・・」ファティマだった。

「勘違い、ふざけるな。現に、お前はおれを殺そうとしたじゃないか。そして、その天使みたいなやつはなんだ！」

「天使みたいなもの、ではありません。天使です。末裔ですがね。

エイディルさんですよ、彼」

「冗談を言うときを間違っているようだな・・・、これ以上ほざく様なら、お前の首と胴体から血栓がでることになる・・・！」

「いえ、冗談ではなく本物のエイディルさんです。嘘と言うなら見ていてください。今彼を起こしますから」

「わかった」そう言っって首と脇腹のものを除けてくれた、そして数歩歩き彼の名を呼ぶ。

2回ほど呼んだところでゆっくりとまぶたを上げ彼が目を見ました。
「・・・・・・わかりますか？」少し笑って言う、「ああ、もちろんだ。まだ少し頭が重いが」そう答えた。

後ろからファティマが近づいてきて、こう言った。

「おまえ・・・、エイディルか？」それに対して彼も即座に答えた。
「ああ。意識が戻ったんだな、良かったな」

シーフの彼がこちらを見てくる、わけが分からんといった様子だ。

「・・・わかりました、では説明しましょう。その間にエイディルさん、あなた、裸なので着替えちゃってください。以前“あの人”

が着ていたものですので、違和感は無いと思います」

しょうがないなと思いつながら丁寧の説明をした、話が終わるとほぼ同時にエイディルが戻ってきた。

そのまま、砕け散った男のもとに向かうため、馬車まで歩いた。

ダリアの指示でおれとエイディルは、バラバラになっていた欠片をかき集め、一箇所にまとめた。

すると天使の彼が、両手の手のひらを下にして胸の前で重ねた。

ぴんと腕を伸ばし深呼吸を一つ、それからその手を足元の欠片にすっと降ろす。

青い光が欠片の周りに集まってそれを包むと、一瞬のうちに元の姿に戻ってしまったのだ。

おれとエイディルは驚愕し、ダリアはうんうんと頷く。

甦った男は奇声を発しながら、そこらじゅうを走り回っている。

その時、ギルドに来たばかりのエイディルの言葉を思い出した。

『あれは神から授かったものだ。神にとっては小さいが人間にとっては大いなる力だ』

本当に大きな力、人をも甦らせることができるのだから。

ふとエイディルを見る、なにかを呟いていた、「この力、悪くないな」それを聞いたダリアが柔らかなく邪気なしに笑ったようなきがした。

9話

それからすぐに、跳ね回っている男に向かってダリアは言った。

「ぴょんぴょん跳んでいるその方、今からあなたを送り届けますので、こちらに来てください！」

大声だが優しい口調で叫ぶ、するとこちらに気がついたのかすたすたと駆け寄ってきた。

「はあ・・・はあ・・・、いやあすいません・・・、つい舞い上がっちゃって」息を切らし笑って言う。

「先ほどはすみませんでしたね、粉々にしてしまつて。とりあえず、皆さん心配してますんで行きましようか」

すつと出た驚くほどに恐ろしい言葉は、今の彼にとっては気にする対象ではないようだ。

「そうですね、行きましよう！」元氣良く返した。

そんな姿をみて出てくるのはため息しかなかった。

馬車に戻ると荷台で、怪我をしたおっさんが眠っていた。

おれの後ろにいたエイディルがその姿を見て、彼に近づき手をかざした。

またあの青白い光が出て、その切り傷を一瞬で塞いだ。

なんの気無しか寝顔が安らかになったような気がした。

その横を通つて、ダリアと甦った男が荷台に乗り込む、そのタイミングで眠っているおっさんを無理くり起こしてみた。

声をかけ、体を揺さぶり、仕舞いには頬をペチペチと叩く始末。

それでようやく目が覚めたのか、むっくりと起き上がり目をこする。辺りを見回し一言、「・・・なんか増えてんなあ」鼻声で表されたその言葉をおれだけが聞き取れたようだった。

「そうだ、二人増えたんだ。さっきのやつらはやつつけてきたから、もう出発できる。できるだけ早く頼むぞ」

今まで起きたことを本当に簡潔に喋りおっさんに伝える、おっさんは「わかった。それじゃ行くか」と言って重い体で荷台を下りていった。

荷台に乗ったおれたちは、各自で思いにふける、おっさんは外で日光を浴び準備体操をし、運転席へ座った。

後ろを振り向き、再度こちらに言う「お前ら行くぞ！うっかり首の間接外すなよ」がはたと笑いながら前へ向き直る。

おれたちには何がなんだかさっぱり分からなかった。

だがこの後すぐ、それをおれたちに理解させることが起こることになる。

馬車が発車する、少し経つと勢いを増し始め、そしてそれが起こった。

ガタガタガタ、石で作られた道の上を走っているの、中が大変に揺れる揺れる。

ほとんどが上下の振動で、首を持っていかれそうになる。

みんな、必死に何かに掴まり首に力を入れている。

おれは荷台の支柱、他の人たちは思い思いに手を伸ばしている、鉾山町“ハノブ”に着くまでずっと歯を食いしばっていた。

ハノブに着くと、荷台組みはすぐ外に出てグデッとうなされ、対しておっさんはぴんぴんとして、あちらこちらの商店を行き来している。

そんな時、どこからか大きな声がしてそちらの方向を荷台組み全員で振り向く。

すると、そこにいたのはあの盗賊団“ブルー・シューティングスター”の一人だった。

走って近寄り本物かどうか確かめた後、ぎゅっと甦った彼を抱きしめた。

彼は背中を優しくなでる、抱きついた方は彼の胸で泣きじゃくる、少し微笑ましく思えた。

そのあと彼はこちらが行ったことを説明した。
それでも納得できないようで、こちらを見るきつい目線は相変わらずだった。

とりあえず、その子に彼を任せ、もう一度荷台へ戻る、すぐさまおっさんが運転席についてこちらを向く。

「あれ？・・・もう一人はどうした、便所か？」おれたちに聞く、みんなで首を振り否定をアピールした。

「そうか・・・、ここで下りたのか。わかった、それじゃ行くぞ！」
ぱちんと手綱を鳴らして馬車が動き出す。

もしかしたらと思い、外を眺めていたが結局彼は現れなかった。

ハノブを南から入り西へ出る、これから数時間は暇な旅路になる、そう思ってまた眠りにつくことにした。

聞こえるのは馬車の車輪の音、風の音。

風の匂いが少し変わった気がした、今まで磯のようなものだったのが今は森のようなものになっている。

まぶたを閉じながら本に書いてあった森林浴とやらを、古都に着くまで、とことん味わい尽くすことにした。

にぎやかな音がほんのり聞こえてくる、今は東プラトン街道、その道の中間地点。

ファティマはゆっくり起き上がり、風に乗って流れてくるその音を耳に入れるとパツと目を開け運転席へ向かった。

馬二匹を華麗に裁きながら、馬車を運転しているおっさんの横に座り、耳を澄ませてみる。

やはり聞こえる、あのにぎやかな騒ぎの歌が・・・。

現時刻は夜、古都では残り2日に迫った誕都祭に向けて、住民たちが着々と準備を進めている頃。

だが、おれはそこに何のために行くのか・・・、今一度、頭の中で確認してみた。

・・・考えるだけでも恐ろしい。

背筋に悪寒を感じたのは、夜風のせいかな、それともその考え事
のせいか・・・。
どちらとも言えない・・・、自分の勘の鈍りを実感した夜だった。

10話

次の日の早朝、ファティマたちを乗せた馬車は古都“ブルンネンシユティグ”に到着した。

都の朝の匂いは、香ばしいものだった。

今、東門入口の前で立ち往生している、それでも漂ってくるこの匂い……、全員の空腹を仰ぐようだ。

誰かが耐え切れず、ぐう……と鳴らすと、つられて誰かがまた鳴らす。

面白いように連鎖していく腹の虫たち。

「入ってよし。男4名での5日間の滞在を許可する。……誕都祭ですので、満足してお帰りくださいませ」

優しい口調で門番がおれたちに言う、「おう、ありがとうな」おっさんが軽く手で挨拶して、中に馬車を進めた。

早速、馬車から外を眺めることにした。

大いに存在を主張しているのが国会議事堂、そして赤褐色の屋根の家々。

真ん中の噴水広場を通過して古都南部の井戸へ向かった。

目的の場所に到着すると、都民が忙しく走り回っている。

指定された場所に馬車を置き、5日間お世話になる宿主に挨拶した。それから各自、自由行動となり、おれは一人で噴水広場の方に足を進めた。

古都の北部と南部では貧富差が激しい様に思える。

北には貴族が住み着き、南には一般の人たちがわいわいと暮らしている。

井戸周りの団地を抜けると少し広い通りに出た、左には南門があり、右には噴水広場が少し遠くに見わたせる。

おっさんの手伝いと、居眠りのせいで、ファティマは出かけるのが

一番最後。

時間を惜しむかの様に、早歩きで広場へと急いだ。

古都の下と上とを結ぶ橋を渡ると、広場前は大勢の人だかりを作っていた。

気にはなったがどうにも見える場所まで移動できそうに無い。

手近にいた女性に聞いてみる、「すみません、この人だかりは一体なんなんですか？」

女性は困った顔をしてこう答えた、「さあ。私も今来ただけで、良く分からないんです。ごめんなさいね」

「いえいえ、こちらこそ」軽くお辞儀してそこを離れる、次に目に付いたのは、楽しそうに人だかりを眺める男性だった。

「あの、すみません。これはなんの人だかりなんですか？」そう聞くと、「ん？これかい？これは誕都祭の飾り付けをしているところだよ」こう返した。

「噴水に飾り付けするんですか？」

「そうさ。噴水の一番高いところに伝説を真似て作った石を飾るんだ、本物じゃないのが残念なんだがね・・・」

「へえ・・・、それはなんて石なんですか？」

「え！？あんたしらんのかい？“レッドストーン”だよ、空から降ってきたってあの石さ」

「ああ、あの石ですか。でもなんでまた“レッドストーン”なんて飾るんですか？」

「ある書物によるとその石は、なんでも願いが叶うと言われているんだ。それでじゃないかな？そこの王家復興を望む人が、勝手にああやって飾るんだ。政府も何も言わないからこれ5年はやってくるよ」

「そういえばお城が無いですね、王家とか言っているのに・・・」

「いや、あるにはあるんだが・・・。ここから北西に行けばお城があるよ、自分の目で確かめた方が、話で聞くより早いと思うぞ」

「ありがとうございます。気が向いたら言ってみることにします」
会釈して噴水広場を後にした。

記憶の中にあるレッドストーンは、エイディルが見せてくれた写真。卵形で変な模様が入ってる石だった、奇妙だと言う印象しか残っていない。

その後は古都をふらふらと散策し、国会議事堂の階段に腰をかけていた。

意味無くふらふらしていた訳ではない、任務のため、ファティマなりに計画を練っていたのだ。

空は青から赤へと変わってきていた、ずっと涼しい風が首筋に沿って通り過ぎる。

ある程度考えをまとめ終わると、自然にため息が出てきた。

暗いイメージを頭の中にめぐらせてしまう、ふんふんと首を振り邪念を取り払う。

その時、昼間言われたお城のことを思い出した。

「・・・これから行くところもないし、行ってみるか」たたと階段を下りる、歩幅は小さくゆっくりと町を眺めながら向かった。

民家の屋根は夕日のせいで余計に赤くなっている、赤と言うより朱に近い、ちよつと茶色がかった色だ。

言われたとおり北西へ向かう、家の裏手通りに出ると、昼間の彼が発していた違和感ある喋りを思い出す。

城は全てが焼け落ちて、ただの廃材置き場のような状態になっていた。

そこも観光の見所になっているのか、門があったであろう場所に看板が立ててある。

近寄って読んでみた、「・・・自業自得だ。力を独占し保持しようとするところなるんだ」後ろからエイディルがおれに喋ってきた。

「・・・らしいな。民によって引き起こされたとなっている。・・・
ごう慢な王だったのかわからんが、悲惨だな」

夕日に照らされた城跡、夕焼けで染め上げられているからか、再び燃えている様に赤だった。

11話

その夜はやけに騒がしかった。

町に人は絶えず、家の明かりも消えることが無い、もちろん貧富なしに。

おれの泊まっている民宿の主人たちも忙しそうだ、何かをせっせと創作している。

何か手伝えることはないかと聞いてみたものの、「・・・お客さんは休んでいてくれ。ちょっと騒がしいと思うがな」笑顔だったが、表情からは疲労と迷惑の色が見えていた。

「わかりました。おやすみなさい」素直にそう言って各自、部屋へ戻っていった。

ランプもつけずにベッドにダイブし、天井をいい時間眺めていた。目とつぶる、それでも全く眠くならない。

外も中も大騒ぎで寝ると言う気分にならないせいだろう、時折楽しそうな声が聞こえてくる、ふっと笑顔になる自分がいた。

ベッドから立ち去り荷物を開く、中からエイディルに貸してもらった本を取り出す、ランプを灯し読んでみることにした。

レッドストーン
“REDSTONEとは、その名の通り赤く色付いた石のことである”

“それを持つものには不老不死と、莫大な富とが与えられ、願いがなんでも叶うとまで言い伝えられている”

“しかし、その正体を知るものは誰一人として存在しておらず、容姿を知るものもないとさえ言われている”

“ゴドム共和国（現古都ブルンネンシュティグ）は、その石を探すため膨大な資金を費やし、国家機関であり秘密結社である『レッドアイ』を設立した”

“その機関の研究、それに順ずるものは目覚しいものであった。人々が欲求不満だったとしか言いようが無いほどである”

“結果、それまで謎だったREDSTONEの存在が確認された。”その時、ガシャンと音が鳴り響いた。

ビクッと体を震わせる、本にしおりを挟み荷物の中に戻すと急いで下に下りていった。

割れたものは皿、大量ではなく10枚ほど、怪我人も無くみんな笑って許していたので、すっと胸を撫で下ろした。

それから気づいたことがあった、キッチンには誰も居らずみんな何かの創作に夢中だった。

「あの、皆さん何も食べていないんですか？」

「あ、そういえばそうだな。気にしなくてもいいよ、もう少しだから」

「それじゃ、ギルド長の奥さんに教わったスープで良ければ作りますけど」そう言うのと最初は拒んでいたが、そちら側の誰かが腹を鳴らすと大声で笑い合い承諾した。

早速、キッチンに行って民宿の奥さんからどこに何があるのかを確認し、調理にかかった。

後ろからは楽しそうな歌が聞こえてくる、なんだかギルドが思い出されるようだった。

それから数十分かけスープを完成させた、大量の皿に盛り配ると作業している全員に手渡した。

これには自信があったのでどう返ってくるかは分かっていた、「うまいな！これ」ほらこの通り。

ありがとうございますと軽く頭を下げ一人一人に目線を合わせた。それから全員が完食した皿を回収し、一気に洗い上げ自分の部屋に戻った。

先ほどの覚醒はどうに無く、ベッドに横になるとすぐ眠気がおれを襲ってきた、抗うことなくそれを受け入れ眠りについた。

寒気を感じ目を開けると、外は真っ白な霧が所狭しと漂っていた。時計を確認すると時刻は早朝4時41分、また寝ると昨日みたいに

出かけるのが遅くなると思い外出した。

黒のマントというよりはポンチョのようなものをはおり、黒いテンガロンハットを被って行った。

外は霧のせいで数メートル先も見えない状態、太陽も例外でなくぼんやりとしか目視できない。

昨日町を回り歩いたおかげか軽く噴水まで到着した、サーという音が聞こえるだけで他は何もなし。

もう少し水面に近づくと、昨日都民が飾っていたあの石が目に入ってきた。

写真の物と似ている箇所がある、卵形の形、灼熱に燃える様な赤。そこで就寝前の本の内容を思い出した、「・・・そういえばここはあの石の探索に力を入れていたな。その影響か」それだけ言い残し、そこを発った。

足が向くのはあの城の跡、下向き道を確認しながら北西に向かって行った。

途中、犬2匹と遭遇し楽しく静かに遊戯しながら城跡に到着した、相変わらず酷い荒れようだ。

そこに一瞬だけ清楚を取り戻させた、一輪ではあったが野に咲いていた花を供えたのだ。

両手を合わせ数秒合唱し立ち去った、古都の西側から民宿に戻る途中、西門のあたりでコーンと妙に高い音が聞こえてきた。

音のする方へ近づいていくと、どうやら門の向こう側からそれは来ているようだ。

行ってみようと好奇心が沸いたが門は完全に閉じられており行くことができない、警備の人に話すと通行人専用通路から出してもらえた。

御礼をして高い音の方に歩いていく。

霧もだんだんと薄くなってきた、道もほんのり分かる程度に。

高音の発信源に付くとそこには斧を持った男がいて、太い木を真横にガツガツ削っていた。

何度か鉄の塊を木に潜り込ませると、木はみしみしと音を立てて男と反対側に倒れた。

12話

それから斧を持った男は切り株に斧を振り下ろし、木から新芽をもぎ取ってそこに差し込んだ。

合唱してから斧を担ぐとこちらを睨み、「そこで何をしている、こっちへ来たらどうなんだ？」少しぎよっとしたが言われた通りにした。

控えめな態度で彼の前に姿を見せた、また恐ろしい形相で睨まれるが動じず目線を合わせ続ける。

数十秒の後斧を持った彼がくすくすと笑い出した、それは次第に大きくなっていき最後の一発の一字は、近場にいた動物たちや虫たちを黙らせた。

笑いの波が治まってくると男はファティマに近づいてきて、数メートルのところから大きな声で話をくりだしてきた。

「お前、どこから来たんだ？ たまたまここに来たのなら運が良かったな、今日から誕都祭が開催される。楽しんでいけ」

そう言いながらおれの横を通り過ぎて行った、すかさず言葉を返した。

「たまたまじゃない、これのために来たんだ。ブリッジヘッドからな」おれも男の後を追いながら話す。

「そうか、ならめいいっぱい楽しむことだ。」

「悪いが一つだけ質問をしてもいいか？」

「そうだな・・・、今から俺を最後まで手伝えば、それを受けてやろう」

「手伝い！？ まさか、あの木を運べとか言うんじゃないだろうな・・・」

鼻でふっと息を吐き、にやっと笑う、「明察どおりだ。あれを運ぶ手伝いをしてもらう、嫌ならいい、ただし質問は受け付けん」

「誕都祭開会式までまだまだ時間があるんだ、これぐらい手伝って

もバチは当たらない。・・・暇なんだろう？」

「・・・暇だということは否定しないが、軽い質問なのに対価が重すぎる。」

「個人を知るために必要な働きと思えばいい。簡単に人は自分をさらけ出したりはしない、お前もだろ？」

「確かにそうだが。・・・なら、一つ条件を追加だ。あれを運び終えたら飲み物をくれ、ならやってやる」

「軽いなあ・・・、それぐらいなら出してやろう。それじゃ、これを持ってさっきのところに戻っててくれ」そう言って渡されたものは自分の身長ほどある鋸だった。

「おい！これってどう持って行くんだ？」そう言うと、「取っ手が両端に付いてるだろう、それを片手で持ってくんだ。なに折れることは無い」笑って返された。

仕方なく取っ手2つを右手に鷲掴みさっきの場所に戻ろうとする。すると後ろからまた声がしておれを呼ぶ、「おい！もう一個持ってくるだろ、これ持っててくれ」手渡されたそれは通常サイズの鋸だった。

傍から見ると両手に刃物を持った危ない人、こんなところ人に見られたくない、そう思うと体は自然に走り出していた。

大きな木が倒れているさっきの場所に戻ってくると、具合の悪そうなコボルトたちが切り株を取り囲んで座っている。

こちらに気づいたのか全員が立ち上がり、おれに槍を向けて走ってきた。

その時後ろから、「そいつらの槍には気をつけろ！毒が塗ってある！」その声と共に石が高速におれを通り過ぎていった。

やつらの目の前に鋭く突き刺さり恐怖を与えた、少し後ずさるがすぐにまた槍を横にして駆け寄ってきた。

「お前、戦闘経験はあるか。あるなら自分の身は確実に守れよ」そう言うとおっさんは持ってきた持ち手つき一輪車を押し、走り出す。

「あたりまえだ！」おれも走り出す、やつらもまた走り出してきた。おっさんは弾丸の様にコボルトたちに突撃していく、慌てて道を開け何を逃れる彼ら。

おれの方は両手に刃物だがこれは重過ぎる、特に等身大鋸。

到底戦闘用では無いので足枷にしか過ぎない、それを持ちながらやつらの槍をすつと抜け切り株に到着する。

丁寧に両手のものを置き、自前の刃物を取り出した。

「いいもん持ってたなあ、お前。だがやつらを切るのはご法度だ、あいつらわざと毒食って血液を汚染させてる」

「本当なのか！？よく死なないな、やつら・・・」

「もう抗体でもできてんだろ、だから切って返り血を浴びるとお前も毒に犯される」

「ああ、わかった。なら肉弾戦だ！」腰にぶつを戻し突撃していく。後ろから、「気をつけろよ！あと俺は戦闘が苦手だから全部頼んだぞ！」片手を挙げて了解したと合図した。

まずは、あの槍を何とかしないと。そう考えてやつらの目の前で急停止し、槍を引き剥がしにかかった。

停止するために用いた足は右足、止まったと思うとすぐに左足を高らかに蹴り上げた。

つま先で槍先に当て、まず一本目を飛ばしてやった。

前進するように左足を地面に下ろす、刹那右足で左の槍を回し蹴る、二本目。

右足をつけると体はやつらに背を向けた状態、その時左斜め後ろから妙な声と共に槍がやってきた。

肩まで上がっていた左腕を鞭のごとく使い、手刀を駆使して槍をへし折った、これで三本目。

それからすつと左足を引き、反時計回りに腰を回転させフックをお見舞いしてやった。

13話

おれの拳はやつの顔面にヒットしたらしく、後ろに何回か回転しながら飛んでいった。

先程の折った槍の先っちょはおれの後ろを回転しながら通っていきどこかに落ちた様だった。

後のやつらは殴り飛ばされたやつが目を回しているのを見てささと逃げ帰り、残ったやつらは失神してるやつを抱え逃げていった。

「・・・はあ」その場に座り込み、ため息をつく。

コボルト達から受けた傷はなし、もちろん返り血を浴びた形跡もない。

無意識に集中していたらしく、腰を下ろしてから疲労感が滲み出てきた。

肩でひとつ息をして、ゆっくり立ち上がると、「お疲れさん。お前中々の腕を持ってるじゃないか」後ろから歩いてきた男が、感心の声をあげる。

「まあ、多少は鍛えているからな。そこら辺のやつらには負ける気がしない」少し顔を上げいつも通りの顔で言う。

「結構な自信だな。でもあまり自惚れるなよ、足をすくわれかねんぞ」おれの横で立ち止まり、手を差し伸べてくる。

左手の平を相手に見せ膝に手を付き立ち上がる、樵の男は「それじゃ、始めるか」と言って後ろの切り株に戻っていった。

おれもゆったりとした歩幅で続く。

目的の場所に到着すると樵の彼は、鋸を手に取り枝を切り始めた。切った枝はその場に置いて次の枝に手を伸ばす、かなりの数が後に控えているが気にしてないようだ。

「手伝いはいつ必要なんだ？」そう尋ねると「見てわからんか？今だろうよ。そのノコ持って、枝切ってけ」少しばかり怒られた。

おれも鋸を手を持ち、彼とは反対側を受け持つ。

彼は意図も簡単に枝を切って見せるが、おれでは中々そうはいかない。

速度を比べるとおれが一本やっている間に二本はいく、単純に考えても二倍早い、初経験と経験者でこれほどまでに違うとは。

顎を手の平で脱ぐほど汗が出てきた頃、ようやく枝を全て取り終えた。

鋸を地面に刺し一息を吐く、そうして先ほど言われた通りに枝を集め、紐で縛りそこらにまとめた。

「よし。いいかそっち、ちゃんと持てよ。肩に乗せれば多少は重さを軽減できるからな、それまで気を抜くなよ！」

「もちろんだ。こんなところで怪我なんてしてられないからな」左手を振り合図を送る。

「いくぞ！ いち、にのさん！」まずは腰辺りまで持ち上げる。

それから慎重にしゃがみ込み樵は右肩、おれは左肩に丸太を載せてゆっくり立ち上がった。

直径30センチを少し超える程の丸太はかなり重かった。

「いくぞ。お前が俺を押す感じで歩いて来い」すぐにその通り行動する、何せ初心者なのだから。

そのまま彼の家の隣まで難無く運び、肩にかかるあの重さから開放された。

最後に枝と道具を運び終わり手伝いは終了となった。

「お疲れさん。約束通り飲み物入れたから、中入んな」

「ああ、ありがとう。思ったんだがあの長い鋸、結局使わなかったな」

「おお、すっかり忘れていたわ。ははは、まあ気にすることじゃない」

「・・・運んだのはおれなんだがな。まあいい、んじゃ中に入れさせてもらおうでしょう」

樵のログハウスの中は意外としっかりしたもので、木のいい匂いがある。

テーブルに案内され席につく、目の前には仄かに甘い匂いを漂わせている紅茶が置いてあった。

「それじゃ」と言ってティカップに手をかけ一口含む、「……うまいな」素直に口から感想が漏れた。

「だろ？ 選びに選び抜いた物だからな。入れるあいつが上手いだけなのかも知れんがな」

「あいつ？ あんた以外でここに住んでいるやつがいるのか。これを入れてくれたのならお礼を言っといてくれ」

「なら直接本人に言えばいい。あいつってのは俺の娘の“アリエル”だ、そのキッチンにいるぞ」

「そうか」そう言っただけで席を立ちキッチンを覗いてみる、そこには色白の綺麗な女性が立っていた。

「あの、紅茶ありがとうございます。おいしいです」軽く頭を下げると「いえいえ。お口に合って何よりです」優しい微笑が返ってきた。

席に戻りまた紅茶をのどに通す、一度目よりもさらにおいしくなった気がした。

「いやあ、手伝ってもらって悪かったな。んでお前の言っていた質問とやらはなんなんだ？」物腰柔らかく樵が話しかけてくる。

「質問と言っただけでもない。古都にはよく行くんだろ？ そこでおれと同じ服装の男を見なかったかと思って」

樵の男は頬杖をしながら、開いてる方の指をリズム良くテーブルに打ち付ける。

数秒間が開きたため息と共に出た答えは、「いや、見たことないな。そんな格好なら印象に残るんだが……」申し訳なさそうに首を振った。

14話

「そうか、ならいいんだ」そう言って紅茶を一気に口に流し込み、外に聞こえるほどに喉を鳴らす。

すっと席を立ち、「紅茶、ありがとうな。それじゃ古都に戻ることにする」と言ってログハウスの扉を開ける。

「もし暇になったらまた来い。歓迎してやる。おい、言い忘れてたが俺の名前は“アトボン”だ、町であったときは声を掛けてくれてもいい」

おれは左手を上げて「ああ、わかった。あんたも声掛けてくれていいからな。それじゃ、おれも名乗っておこう。折角の礼儀だ、きちんと返させてもらう。おれは港街ブリッジヘッドシーフギルド“ラシュバル”所属副ギルド長、ファティマだ」そう言い残しアトボン宅を後にした。

一歩外に出ると辺りの霧は薄くなり、より遠くまで視野に入れることができた。

古都の西門の方へ足向け、不意に目的の方から聞こえる鐘の音、それは現時刻を7時だと皆に知らせるものだった。

澄んだ高音が古都中、近隣の自然地帯にまで響き渡る。

その音が7回、辺りへ浸透する頃にはファティマも古都の中に入っていた。

誕都祭は9時からで、あと2時間に迫った開会式へ向け、町全体の興奮も右肩上がりのようだ。

彼が今いる古都の西端でもわいわいと忙しない、歩きながらおめたい奴らだと蔑みもするが、楽しそうだなとも思う。

気持ちの裏と表はいつでも五分五分だ、ただし個人の気分により割合が変わってしまうややこしいものでもある。

今の彼は若干“裏”が勝っているようだ、任務のせいだろう。

言わずもがなだが、裏そして表、どちらか一方が心を全て包むと人は人で無くなる。

ファティマは顔を斜め下にして、つま先だけを見て歩いていた。

それは丁度、ブルンネンシュティグ銀行前を通り過ぎたときだった。銀行の扉から役員が出てきた、大きな模造紙を抱え、左へ曲がる。

銀行前掲示板の大きさギリギリの紙を綺麗に張る。

それに飛びついた一人の市民が無意識に大声を上げ、辺りに叫び散らした。

「おいおいおい！ まじかよ・・・、今夜、国会議員のディリユースが殺されんのかよ・・・」

その男の言葉に通りを通っていた人間全員が掲示板前に集まってくる、一瞬で掲示板は人で見えなくなった。

刹那に凍りついた先ほどの空気は、もうすでに通常状態だ、ただしファティマを除いてだが。

通りの真ん中で突っ立ったまま、体が動かなくなった。

ピントもはつきりしない、手足には震えまでやってくる始末。

そこまで自意識喪失された理由、そんなものは簡単に彼が今夜実行するはずの暗殺任務、その対象者の名だからだ。

寸前まで考えないようにしていた酷い不の要素が、加速していくのが分かる。

・・・おれはいつの間にか暗い世界にいた。

震える手、拳を作るとなにか生暖かい液体の感触が指先にくる、にちゃっと音を立てた。

顔の近くまで二つの拳を持ってくる、表情一つ変えず力を揺るめ全開にする。

こんな暗い世界でも分かる程の赤、血だった。

いきなり呼吸が乱れ始める、気がつくとも目の前にはベッドそしてそこに倒れている人間。

仰向けで倒れている、背中には何か細長いものが突き刺さっている。

ゆっくり近づきその何かを手で握り彼の背中からすつと抜く、よく見ると自分の得物だった。

おれはとうとう人を殺してしまった……。

ふと息が吸えなくなり慌ててその場にしりもちをつく、横隔膜が尋常じゃないほど動き冷静になれない。

後ろにドンと背を打ち天井を見て必死に口を開閉させる、そして何も見えなくなった……。

バツと目を見開き息を大きく吸う、恐る恐る手のひらを見る……、何もなっていない。

それだけで幾分か落ち着きを取り戻す、その時後ろから誰かに触られた。

ものすごい勢いで振り返るとそこには5歳ぐらいの子どもがいた。

大きな目をパチクリさせて首を横に捻っている、数秒顔が固まったが次第に柔らかくなり、笑顔でその子の頭を撫でてやった。

嬉しそうに目を細め顔をこちらに向けてくる、おれはどうやら彼女の父親に運ばれたらしい。

ここは彼女の家、おれは道の真ん中で跪き精神ここにあらずだったらしい。

それで今は彼女の父親のベッドの上と言うわけだ。

仄かに思い出される夢の中の記憶は、今後の行動を考えると決して良いものではなかった

15話

ファティマはすぐベッドから飛び起き、その子とその子の親に礼をして家を出ようとした。

だがその時、彼女に服の端をつままれた「どうした？」そう尋ねると「・・・これあげる」飴玉をすつと、手のひらに乗せておれに近づける。

「ありがとな」もう一度頭を撫でてあめを頬張る、今度は笑顔で送ってくれた。

家を出ると鐘が鳴る、回数は1回、この鐘は一般的な定刻と定刻の間に鳴るもの。

分針は6を指していた、つまり8時30分、一時間ほど眠りこけていたらしい。

時計台の大時計を仰ぎ見てわかる、まだ祭りが始まっていない。

どうしても気になり銀行前へ戻る、人だかりは全く無い。

一步一步掲示板に近づくたび、どきどきと鼓動が早くなる。

その鼓動も掲示板に張られた模造紙の題名を見て、かなり落ち着きを取り戻した。

『殺人予告！ 国会議員ディリュースに死神からの便り！』大きく一番上の余白を飾っている。

記事によると、今日の午後11時に彼を殺しに行くというものだった。

差出人の名前も何も書いてなく、ただ封筒にこのような手紙が入っていたと書かれている。

ここまで大げさにはしないはずだ・・・、ファティマはリーダーのことを思い出していた。

彼は確かに目立ちたがり屋だが、公私混同せず任務のときはいたっ

て冷静に、性格が変わつてると言わんばかりのものになる。

だからこんなことをするとは考えられない、となるとおれの他にやつを狙っているやつがいる、そう結論付けられる。

別の団体、もしくは個人か、なんにしてもおれはその午後11時前までにやつを殺らなければいけない。

一瞬簡単に思えたが、こんな手紙がやつのもとに届いたと言うことをもう一度良く考える。

掲示板の前でうんうん唸る、周りの人はそんな変な行動に気を向けるほど余裕は無いらしい。

そして行き着く先は悪い方向だった、「・・・移動している可能性が高いか。どうする・・・」下唇を甘噛みする。

ターゲットは元々噴水辺りで他のお偉いさんたちと共に過ごした後、ある建物へ行くことになっていた。

だがこの予告状のせいでたぶん人前には極力出てこないだろう。

そうすると彼をずっと監視していかないといけない、それは精神を無駄に削ってしまう様でしようがない。

いくら考えようがそれ以外にいい考えが浮かんでこない。

一つ息をして意を決する、くるっと振り返り急いで、今寝床にしている場所へ戻った。

民宿につくとみんながガヤガヤと騒いで、好きな所に座っていた。

おれを見つけるとすぐに大声で、「やっときたか！さあ開祭式が始まるぞ」民宿のオヤジさんが手招きする。

軽く頭を下げ近づいていくと、部屋から出てきたエイディルと目が合った。

そして階段を下りてきた彼に耳打ちして自分の部屋に戻った。

数十秒してドアがノックされる、ギルドで使っている合図と同じものだった。

「入ってくれ」そう言うのと片手にワイングラスを2本持ったエイディルが入ってきた。

机に飲み物を置くと壁に寄りかかった、ファティマはもうすでに仕事服に着替えている。

彼が持ってきたワイングラスの一つを手に取り、中身を一気に流し込む。

それからベッドに座り、下を向きながら言った、「今日の朝方、銀行前の掲示板に張り出された記事を知ってるか？」

「いや、知らない。それが任務と何か関係あるのか？」

「ああ、大有りだ。おれたち以外にもやつを狙ってる族がいるらしい」

「そしてその族だが、個人か団体かさっぱりわからない」

「・・・数が未知数か、やっかいだな」

「しかも、時間まで設定してきやがった・・・。今日の午後11時らしい」

「とすると、祭りが始まるのが9時。・・・13時間ってとこだな」

「それまでに、ターゲットを始末するか族を潰すかどちらかになる」

「それが妥当な答えだろう。なら俺は前者を推薦する、数も知れない相手を潰すなど、時間の骨折り損だろう？」

「おれもそう思っている。そうなると話は簡単だ、だが面倒でもある。ずっとターゲットを見張る形になるだろう」

「やっかいだが、俺も今のところそれぐらいしか考え付かん。・・・そろそろ、祭りが幕を開ける。・・・でるか」

「ああ」ベッドから腰を上げ出口へ向かう、二人とも部屋から出ると拳を合わせ、

「失敗は無い。あるのは結果。選べ、己の生死の道」それからハイタッチをした。

二人して民宿をでると駆け足で噴水広場へ向かった、その時刻、丁度8時50分。

噴水広場に着くと辺りをキョロキョロと見回し目的者を探す。

だが、人の多さが尋常ではない、ある場所に設置された高台に観衆の視線が集まっている。

その人の波を掻き分け前へ無理やり進む、やっと肉の波を抜けると、右手にある国会議事堂からやつが出てきた。

気配を消しもう一度波に足をつける、すぐに後ろをやつが通り全員の視線の先に立った。

その途端人の波が荒くなる、人の声は荒波のしぶきように聞こえる、一礼してターゲットが話し出した。

「都民の皆さん、いよいよ誕都祭が始まります。この伝統あるブルンネンシュティグの一大行事です、心から楽しんでください！」

わーっと静寂から一瞬で馬鹿騒ぎへと姿を変える広場、それはやつが高台を下りても続いた。

その後、カウントダウンが始まった。

このカウントダウンは祭りの始まりでもあり、任務開始の合図でもある。

「5、4、3、2、1・・・」ゴーンと鐘が鳴る、町中が騒ぎ出した。

制限時間13時間の任務が始まった。

1話

高台を下りてから、やつは銀色の傭兵たちに四方を囲まれていた。その内の一名がやつと会話している、二人とも顔が怖い。

そうこうしている内に、噴水広場にあった人の群れは、散り散りに戻っていく。

たぶん全員がこの場所からいなくなるだろう、となるとここに留まり続けるのは不審だ。

すぐさま、エイディルに耳打ちし適当な建物の影に隠れた。

「全く予想外だな。全員があ場所からいなくなるとは」テンガロンハットを直しながらため息をつく。

先ほどまで広場にいたあの人数が、ものの数十秒でゼロになってしまったのだ。

「残ったのはターゲットと、その護衛四名か……。下手に出て行けば怪しまれるが、早めに何とかしなければやつらが動き始めるぞ」

「ああ。わかってる、少し見張りを代わっていてくれないか、……。準備をする」

「わかった。何か動きがあればすぐに伝える」そうしてエイディルと場所を変ったファティマ。

深く呼吸をし目を瞑る、やわらかく拳を作り少し肘を曲げて胸を張る。

静かに大きく息を吸い込み、吐くと同時に腕を胸の前で交差させ、拳を開く。

もう一度、今度は体の奥から力強く息を吐き出す。

それと同時に腕を素早く、手のひらを下にして振り下ろし、ゆっくりと目を開けた。

ファティマのその行為が終わるのと同時に、やつらは来た方向と反

対側に動き出した。

「おい、ターゲットが移動し始めたぞ」

「わかってる。・・・北西に移動しているのか、意外と足取りが遅いな」左人差し指をこめかみに当てて喋る。

「どうしてわかった？」少し驚いた様子でこちらを見てくるエイデル。

そんな彼にファティマは一言だけ「第六感^{シックスセンス}」とだけ言って、元の位置に戻った。

背中を壁に付け数秒、黙って斜め下を眺め自由になっている指を遊ばせると、いきなり影を抜けた。

「おい！」いつも通りの声量で飛び出した彼を呼ぶ、そして自分も暗がりを出た。

目に入ってきた情報は唯一つ、黒い男が一人、真っ直ぐに走っていることだけだった。

もうすでにターゲットの姿は無い、慌てて少し先の男を追いかけた。ファティマは先の暗がりから対角線上の建物に着くとすぐに、壁に背をつけた物思いに耽たようになった。

丁度その時エイデルが到着、先に着いていた男と同じ様に壁に寄りかかる。

そんな彼を見て「こっからはおれが先導して動く、遅れるなよ」とだけ言ってまた元に戻った。

「はぁ・・・はぁ・・・、わかった。頼んだぞ、副長」皮肉を言うような口調で言い終わる。

少しばかり面食らったような顔をしたファティマだが、すぐになつと笑って目を瞑った。

元僧侶の男がふつと息を吐いたのを合図に、ファティマは目を開け右の小さな通路に入っていた。

なるべく早く且つ足音を立てないように一気に走り抜けた、もちろんエイデルも同じ様に。

通路を抜ける直前ですつと立ち止まり息を殺す、また壁に寄りかかり目を瞑る。

少しの静寂の中、聞こえてきたのは硬いもの同士のおつかる音。ガシャガシャ、カツカツ、それが沢山通路の向こう側から流れてくる。

それが聞こえるか聞こえないかと言う微妙なところで外に出る、そのまま斜め右にあった通路へ潜り込んだ。

そこも先ほどと同じ様に走る、出口が近づいてきた途端、聞こえてくる人の騒がしい声。

ファティマは何のためらいも無く通路を抜ける、するとそこはもうお祭り一色の露天街になっていた。

西門から来た人たちだろうか、見慣れない服装の人や、どこぞの商人たち、子どもの姿もあった。

そんな道路を二人で歩いていると、見知った顔を向こうに見つけた、ダリアだった。

隣には清楚そうな女性が彼に笑顔を向けている、彼も一緒に笑っていた。

微笑ましい二人を見ていると後ろから声を掛けられた。

「ファティマ、・・・やつらが後ろから来てる。どうする？」小さい声、頭の後ろから聞こえた。

「とりあえず、ここには人が多い。観光客に成り済ませばなんてこと無いだが・・・、念を入れてあの建物に入るぞ」

右手の親指で右を指す、そこにあったのは入口に鎧戦士が立っている大きな建物だった。

2話

迷い無くそこに向かって行く、中に入ろうとしたその時横に立っていたやつに声を掛けられた。

「すまないが、冒険者の方かな？もし違うのであればここに入るのはご遠慮願いたい、皆さんの迷惑になってしまうのでね」

「そうでしたか、すみません。なんとなく中を見てみたいと思ったもので」とつさにファティマの後ろにいたエイディルが舌を利かす。「いやいや、謝ることではない。ただの観光客なら中で大騒ぎして物を壊す恐れがあってね、節度を弁えていそうな君たちなら入っても構わんよ」

「本当ですか、ありがとうございます」エイディルが一礼、つられてファティマも同じくする。

「言い忘れていたが、私はケイルン。ここを管理しているものだ、よろしく頼む」

「どうも、よろしく願います」またもや丁寧に言葉を返すエイディル。

「いやあ、すまないね引き止めてしまって。では、中へどうぞ」言葉に導かれるように中へ入っていくと、大きく開けた空間が二人を出迎えた。

大きな柱が何本か規則良く並んでいる、右にも大きな空間があつて石造が置いてあるようだ。

入口からすぐはガランとはしているものの威圧感のある大広間になっている、その真っ直ぐ奥は図書館のようだ。

足を運んで本棚の書物を手にとってみる、適当にパラパラとめくり目を通すが面白そうではないのですぐ戻す。

本棚と本棚の間は人が二人通れる位の間隔しかない、でも本棚から一歩外に出れば広い通路が左右に開ける。

その通路のベンチに腰を下ろして上を見上げているのはファティマだ。

エイディルは大量の分厚い本に目がくらみ心躍ってどこかへ消えてしまった。

「・・・それにしても高い天井だなあ。ふん・・・ん・・・あ・・・はあ」
手を上にあげ座ったまま伸びをする、長い緊張の後の一瞬の脱力が眠気を誘う。

首をグツと捻って筋肉の硬直をほぐすとはっと立って目の前にいたエイディルを捕まえた。

「いくぞ。そろそろやつらがこの辺りを通り過ぎる頃だ。出遅れると後で厄介になる、本なら後でも見に来れんだから。ほら！」

強引にその場を立ち去ろうとして彼の二の腕に手を掛ける、結構力を入れて引つ張ったつもりが逆にこちらが持つて行かれる。

とっさに手を離し地面へ尻を打ち付けることなくバランスをとった。後ろを振り返るとまた彼は本棚の谷へ入るところだった、急いで歩み寄るとすでに本の谷の中に人がいた。

腰にまで届きそうな長い赤髪を下にたらしめた女性、眼鏡をしていてすっとした鼻が、ふっくらとした唇が綺麗な横顔を作る。

片手に酷く汚らしい書物を持っていて、それを脇に抱えながらすつと長い人差し指で本棚の本の背表紙をゆっくりなぞっている。

エイディルはまだ動かず固まっている、ファティマもついでに固まっているというより呆氣に取られている。

なにか人を魅了するオーラが彼女から出ている、黒い男はそう思った。

そんな時ふとこちらに気づいたのか体勢はそのまま顔をこちらに向ける、オレンジ色の珍しい瞳がすぐに目に飛び込む。

全く困った様子も無く微笑み軽く頭を下げてまた同じ作業に戻る、さっと流れる髪がさらさらこすれて甘い匂いをこちらまで運んだ。でもそれはなんとなく・・・、そうなんとなくだが心地よい香りとは言いがたいものだった。

長々とここにおいては相手に悪いと思いエイドイルを無理やり引っ張って大広間へ戻った。

彼ら二人が自分の見える位置からいなくなると赤髪の女は先ほどの微笑とは違う不気味な笑みをこぼした。

ようやく本の空間からエイドイルを引き剥がすといきなり引っぱりが弱くなり又もやこけそうになった。

なんなく状態を安定させ彼を見る、さっきの様などこかおかしい感じは全く無くいつも通りに見えた。

「どうした？本ならまた明日にでも見に来れば良いだろう」さっきと同じ様にでも優しくも呆れたような口調でエイドイルに言う。

「ああ、それは当たり前だ。ターゲットを見失ってしまうからな・・・」

「あ・・・、ああ」先ほどと全く違う対応、さらに心此処に在らずの顔をして本棚の方を見つめている。

「・・・なにか変なところでもあったのか？」

「いや・・・、そうじゃない。・・・いや俺が変なのかも知れん、

記憶が無いのだ。ある時点からの記憶が全く無くなっている」

「は？んじやおれが言った急がないとターゲットを見失うって言うような会話は憶えているか？」

「いや全くだ。だが最後に見たものなら何とか思い出せる、確か・・・・・・赤髪の女。結構長い赤髪の女だ」

ファティマは鳩が豆鉄砲食らったような顔をして固まってしまった。

「ん、知っているのか？」

「・・・いや、顔を見ただけだ」

「そうか・・・ああ、そういえば瞳はオレンジ色だった。珍しい色だったからなはつきりと憶えている」

その一言が彼の部分的記憶喪失の最後の人物Ⅱ先の女性と決定された瞬間だった。

3話

「俺が“ REDSTONE”のことにについて探しているときだったはずだ。すれ違いざまにふと目が合ってそれから・・・」

あごを手でいじりながら下を向き眉間にしわを寄せる、深く考え事をしているようだ。

「ってことはあの女になんか術を掛けられてることか。でもお前は天使だよな、そういうのに耐性ってのはないのか？」

「ある。あるはずなんだが・・・なぜ発動してないのか、わからん」
考え込んでいるエイディルを視界に入れたままファティマも考えてみる。

天使の能力を打ち消す、又は天使の能力に近いほぼ近似した力を持つ者それがあの女・・・。

そんな時だった、後ろからあの綺麗な赤髪女がコツコツとヒールの音を響かせてこちらに歩いてきた。

エイディルに合図しその場所を彼女に明け渡す、彼女はそこを横切りながらこちらに会釈しつぶやいた。

「それでは、また・・・天使さん」

振り向かず出口へ向かっていく彼女の後姿を見ながら黒い男は顔をしかめ、銀の男は驚きを隠せずにいた。

誰も見た目からエイディルを天使だとは思わない、なぜなら彼は鎧を着て翼をその中に隠しているから。

見た目は前と変わらないビショップつまり僧侶だ、でも彼女は『天使』と言っていた。

「・・・ばれてるぞ、おい」

ファティマは自分の顔が引きつった笑い顔になったと思った、頬がピクピク痙攣している。

「なんでなんだ・・・良く分からんな」

「もしかして自分でなんか言ったんじゃないのか？あの人に」

「それは無いな。見ず知らずのしかもただのすれ違いに『自分が天使です』なんて言うわけがないだろう」

「それはそうだよな・・・」

考えていくほどに良く分からなくなっていく様な感覚に囚われそうになる。

とりあえずでその話を打ち切りこの建物から出ようと入口へ向かったところで二人はピタッと止まった。

入口には鎧を着た人四人と少し偉そうな格好をした人がケイルンと話し込んでいた。

それはまさしくターゲットで入口の門番と話は済んだのかこちらへ向かってきた。

二人して目線を左へ動かしものすごい不自然な動きで左の石造の広場へと体を向ける。

背中に四つほど冷たいような痛いような視線を感じながら真っ直ぐに歩いた。

石造の間は入口から眺めるだけでは感じるできない迫力が全体を覆っていた。

真ん中は4メートルほどの横幅があり向こうの壁まで続いている、その両脇に定間隔で10メートルほどの石造がそびえている。

それぞれの石造に近寄って見てみる、すると石造の足元に鉄のプレートが打ちつけておりそこにこの巨人の説明が書いてあった。

“ゴドム共和国の英雄『大剣士クリストファー・ルーズヴェルト』”とか“ゴドム戦闘の神『剛毅のライディーン』”など。

十二体ものお偉いさん方の像、全部が勝ち誇ったような踏ん反り返った様な顔をしている。

全ての像を拝見すると突き当たりに本物の彼らの武器や防具等が飾ってあった。

中には当時本当に着けていたかはどうか不明な寝間着まで置いてある始末、無駄に金がかかってそうだ。

それも見終わりに来た方へ戻ろうとすると丁度ターゲットが入口に戻っていくところだった。

歩みをゆっくりにして彼らの数十メートル後を付いていく。

けれども入口で警備係のケイルンに足止めを食らってしまった。

「ああ、どうだったかな二人とも？ 私的には図書スペースがお気に入りなんだが」

「私たちもあの書物の量には驚きましたしいい勉強になりました」

「そうか、それは良かった。まだまだ祭りは始まったばかりだ、いつでも歓迎するぞ」

そう言って鎧に隠れた顔を笑わせたのだろう声が楽しそうに上がっていた。

「もちろんです。私ももう一度来てもっと本を読みたいと思いましたから」

なんだかエイディルまで浮かれて声を上ずらせているようだ、おれ一人だけ蚊帳の外でターゲットを睨みつけていた。

彼らは来た道とは逆の、入口から右側へ進んで行っている。

ターゲットが足を進めているのにこちらは落ちのなさそうな話を進めてる。

某五人を見失うか否かのところでこちらの話がようやく終わる、最後に「では」という言葉で両者締めくくった。

急いで目の前を流れる人の川に飛び込み流れに逆らうように手で掻き分けながら後を追っていった。

あの建物に入る前とは人の数が異常に違う、たまに真正面ですれ違う女性へその都度気を使いながら歩いていった。

やっと人の勢いが納まったところであの五人組をはっきりと見つけた。

彼らはゴドム城跡の前で全員で合唱していた、周りにも同じ様にやっている観光客やらがいる。

そして先祖への祈りが終わるとディリュースは観光客などの黄色い歓声囲まれていた。

一人一人に丁寧な握手をしているところを見るとさほど悪いやつには見えない。

それを見ているとファティマの胸の奥あたりがちくちくとなりもやもやしてやるせなくなった。

4話

それから瞬く間に日が暮れ夜になった。

ターゲットは黄色く騒がれた城跡を立ち去った後、そのままの足で国会議事堂へ戻って行った。

ディリュースを追尾しながらもファティマの心はまだ先のことを引きずっていた。

性格が悪いとか都民に嫌がらせをしているのなら怨まれても何も言えないが、見た限りでは全くそうではない。

都民からは好かれていたつまり都民には優しい国会議員となるわけで、それなら税金など住んでいる人の苦になることをなんとか減らそうとしているのだろう。

本当にそうならおれはとんでもない『悪』になってしまう、・・・まあ殺人をする時点というより殺人依頼を受け取った時にもう犯罪者一歩手前だった。

これからそれを実行することになる。数いる殺人犯の一人になる、そういう事だ。

決意もはっきりと明らかにしないままファティマとエイデイルは国会議事堂前に到着した。

ターゲットはまだ入口で門番と話をしているしかも結構楽しそうだ。入口の門から直線距離で数メートルのところにある路地裏、そこで二人は聞き耳を立てている。

数分談笑した後ディリュースはどでかい四角の中へ吸い込まれるように入っていた。

「・・・中に入ったぞファティマ」その問に対する答えは無視だった、というより精神集中しているので外からの音は一切遮断されている。

それを知っているエイデイルは無視されてもいらついたりはずせ

ってそれが終わるのを待った、自分も精神統一しながら。

エイディルは数秒、ファティマは数十秒かかって気合を入れなおす、すぐに作戦会議が行われた。

「まずは国会議事堂の右手に回る、ここからあれを中心に右回りで路地を進んでつておれの合図するところで止まる」

ファティマはここからでは目視できない国会議事堂に親指を向け、地図には空いているもう一方の手の人差し指で到達地点を指している。

「そこから中に入れるはずだ、昼間確認しといたからな。中に入ってからのは後で話す、とりあえず第一到達地点まで行かないと」
そう言うのと国会議事堂内図を小さく折りたたんで懐にしまいすつと立ち上がるそれにつられてエイディルも立ち上がった。

第一到達点へは難無く簡単に行くことができるが中に入るためには議事堂を巡回している警備員の目を掻い潜らないといけない。

足音を極力たてずに小さな路地をはって行く、ほんの数十秒でそこへ到着した。

建物の影から目的の建物を見る、その周りにはやはり警備員がランプを持ち左右を警戒しながら歩いてた。

「やっぱり。数も予想してた通り建物の各方面に一人ずつ計四人、これなら入れそうだな・・・」

「この大きさの建物の周辺警備が四名とは少し手薄ではないか、罠かも知れん」

「まあ、確かにそう思えなくもないが外が無防備なら中は嚴重なはずだ。それでなければどうぞ殺してくださいと言ってる様なものだろう」

「それもそうだ。・・・いかなんな心配性になりつつある、もう一度精神統一させてくれ・・・」

言い終わると同時に深い呼吸音が後ろから聞こえてくる、・・・緊張しているのだろう。

エイデイルにしてみれば“こんなのが”初任務、内容は殺人の手伝いしかも相方は人間殺しを一度もしたことがないおれ。

彼の精神統一が終わるとファティマは目線を議事堂からエイデイルに向きなおした。

「それじゃ中に入るまでの作戦を言う。きちんと記憶しといてくれ」

エイデイルが軽く頷くとファティマは話を続けた。

「中への侵入場所はここからでも目視できるところにあるあの扉だ」
言って人差し指ですつと指し示す、そこには人一人が入れる程度のドアがあった。

ファティマは人差し指で指すのをやめるともう一度彼に向き直って
「・・・準備はいいか？」真顔で少し睨むように言う。

「当たり前だ。何時でもいける」少し笑ったような顔をして彼は頷いた。

警備員がこの近くから離れていくのを目で確認すると二人は建物の影からさつと飛び出し扉の近くの物陰へと移った。

5話

巡回しているやつは気づくことなく大欠伸をして歩いている、「あー、祭り行きたかったなあ」なんて愚痴までこぼす始末。

警備員は扉の前まで来るとくるっと回れ右をしてまたゆったりとした足取りで歩き出した。

さっさと草と靴とがすれる音が遠くの馬鹿騒ぎよりも大きく聞こえる、今はやつとそれほどの距離しかない。

じっと息を殺し気配を殺し彼が通り過ぎるのを待った。

だんだんと聞こえなくなる摩擦音、今が好機をばかりにその場を飛び出して扉へ一直線に向かう。

扉の前まで着くとノブを回して鍵がかかっているか確認する、やはり閉まっている様だ、すぐさま右後ろにつけていた鞆から沢山針金のぶら下がったリングを取り出した。

その何十本の針金の中から三本だけ選び出し鍵穴へ、一本目は奥まで入れ二本目をそれに平行に突き刺す。

三本目の針金は左手をノブにかけながら右手である程度まで入れ、右手をガチャガチャと動かすと、“カチャ”と言う音と共にノブが全開に回った。

針金を全て抜き取るとノブを回して中に入ろうとする、だがそんな姿をゆらゆらと歩み戻ってきた警備員に見つかってしまった。

「お、おい！お前たちなにしてるんだ！」

大声で叫びながらこちらへ走ってくる、何とかしてその大声を断ち切らなければすぐにでもばれてしまう。

すぐにフアティマはドアから離れやつに向かって走り出した、相手はサーベルを腰から引き抜くフアティマはいつもの得物だ。

一足早くシーフが切りかかろうとした瞬間、彼の足が地面から飛び

出した草製の輪に引っかかった。

すごい勢いで体が前に倒れていく彼、その目の前にはサーベルを構えた警備員、その鉄の刃をシーフ目がけて突き刺した。

刹那、体を突き刺したはずの刃は血で濡れてない、二人は時間が止まったように動かない、その根源はシーフの後ろの天使だった。

両腕をピンと伸ばし両手を開いている、片手がファティマでもう片方が警備員を静止させている様だ。

ファティマの体とサーベルとの距離数センチ、彼の左手はサーベルに向かい右手は短剣を握り警備員の首目がけ振られていた。

もし彼ら二人を止めてなければ警備員は気絶、シーフの方は生死の境を彷徨ってしまう程の怪我を負ったはずだ。

その命を握っている天使エイデルの右手が優しく握られすつと後ろに引かれた。

背中に糸が縫われていてそれを思いっきり引っ張った様な感覚が彼を襲う。

一瞬で遠ざかっていく視界、気がつくと体は自由に動かせるようになり隣にはエイデルがいた。

いきなりの出来事に頭の中は空回りするが「ホールドパーソン」と言う低い声で放たれた単語でファティマは正気を取り戻す。

全く聞きなれない単語の並びだが直訳で『人間束縛』なんていう今の警備員の彼を見れば一目瞭然の言葉だった。

「天使の力・・・」呟いた後ぞくつと背筋を冷氣が駆け抜けていった。

「なにしてる！早くやつを気絶させて来い。もうそろそろこのホールドも限界時間だ」

エイデルは少し大きな声でファティマに命令を下す、ファティマはわかったとだけ言い束縛対象へ走っていった。

あと数秒、保っててくれよ！心でそう呟く、警備員の下へたどり着いたとき丁度ホールドが解け、彼は何もないところ目がけてサーベ

ルを突き立てていた。

彼の視界にファティマが入ったのはその直後、横目で睨むようにこちらを見ていた。

と、次の瞬間顔が傾きピントがぶれて目の前が真っ暗になった、彼はチン（顎）を狙い撃ちされ見事に地面へぶっ倒れた。

それを流し見てファティマはドアの元へ駆けて行く、あとから気絶した彼へ十字を切ったエイディルがついてきた。

そして扉を開けようやく国会議事堂へ潜入することができた。

ドアを入ってすぐ目の前は壁、左右を向くと左のみ空間が開けている、すぐに懐の地図を両手で広げる。

「これから作戦を開始するに当たってまず変更点がある。それはお前がホールドを使えることだ」

「それがあれば今把握している警備員を全てとまでは行かないが、安全に且つ簡単に処理することができる」

「その力は自在に使いこなせるのか？エイディル」

天使は黙って一回頷いた、己のこの技に自信があるかのように。

6話

「それじゃ作戦の説明だ。まずこの暗がりをはける、すると右斜めにドアが設置されている、これをおれがキーピングする間そのフロアにいる全員を足止めしておいてくれ。数秒で終わらせる」地図に鉛筆で印をつけながらエイディルに分かりやすくを心がけて話す。

「おれがドアを開けた後おれはホールドされているやつらを気絶させにかかる、それも三十秒かからないはずだ。そうしたら鍵を開けた扉から出てすぐ左にある男トイレに飛び込む」
静かに言いながら鉛筆で通路に小さい丸を描き始めた。

「・・・この丸は警備員の大体の位置を表している。そして鍵を開けたドアをほったらかしにしておくで近場にいる別の警備員が来るはずだ、そこを狙う」

そう言って×印をつけた場所が男トイレの目の前だった。

「やつはここまで来ることがおれの第六感で予想済みだ、そして開けられたドアの中に入るだろう、そこを叩き気絶させる。それから時間は時間との戦いだ、素早く二階に上がり身を潜めた後、次の作戦を伝える」

鉛筆はトイレの隣にある階段に墨色の丸を数多記した、それから地図がもう一度懐に戻される。

「・・・行くぞ！」音色のない声で強く言う、エイディルもそれに応えて頷いた。

二人はファティマを筆頭に立ち上がり各々の行動をとり始めた、一人は目を瞑り深呼吸、もう一人は胸の前で合掌し翼を前方へ突き出した。

ファティマが目を開けると薄暗かった辺りが若干青色がかっている、

ふっと光の強い方を見るとそこには羽を突き出した天使がいた。

一瞬間やかな青色の光に目を奪われ立ち尽くすが、すぐ我に返り事態の深刻さをじわじわ脳へ染み渡らせた。

その事全てを染み込ませ終わった後ファティマの脳はようやく行動を取れるほどになり、そしてエイデイルの周りから出ていた光はいつの間にか消えていた。

誰もがそれを見たらぎよっとするような強面で、先ほどの体勢から元に戻ろうとしているエイデイルをきっと睨み続けた。

視線に気づいたのかこちらを向く彼、エイデイルの目にはファティマの顔が良く映っていない、映るわけない、暗闇なのだから。

数秒両者顔を向かい合わせ固まると、どちらともなくゆっくりと顔を背け、ファティマの後ろにエイデイルが並ぶ戦闘体勢に入った。

警備のやつらは先の光にも反応することなくふらふらと決まった場所を行ったり来たりしている、張り詰めた空気は無くほんの少しの飽きが入っているようだった。

その光景を左右反転させ目に入れる、短剣の刃が鏡の代わりとなり一步向こうの通路を映している。

こちらに来ていた警備員が背を向いた瞬間、音も無く駆け出しドアの真ん前へ、それからここへ入るときと同じ要領でキーピングを始める。

カチャカチャと音を立て針金を取り出すとすぐさま穴に突っ込み開錠しようとする、さすがにその音と容姿に気がついたのか警備のやつらがこちらに視線を向ける。

刹那にまだ暗がりで待機していたエイデイルが彼らの前に姿をさらす、瞬間に空気は一変、ただの静けさが冷たい静けさになった。

一際その場に似つかわしくない高音で“カチャ”とファティマの手元が鳴る、本当にものの数秒で鍵を開けると動けなくなった二人を相手しに行った。

始末した警備員二人を自分たちが入ってきた暗がりに押し込む、も

ちろん始末と言っても気絶させただけ。

それからすぐ手前の扉を開け予定通り男トイレにいい年して二人で駆け込む、不幸にも中でゆっくりと用を足していた警備員を始末した。

ファティマが始末したやつの後片付けをしている間エイディルは入口にて警戒に当たっていた、丁度片づけが終わりファティマが手を洗っているとまたまた予想通り正門側の警備員がやってきた。

不振そうに顔をしかめ先ほどまでおれたちがいた中へ入っていく、その後ろをファティマに取られ呆気なく始末された。

かわいそうにそいつもシーフの知恵によりトイレの中に収納されてしまった、先ほどのやつが可哀想だろという考えだそうだ、実際の所は見つかり難いだけだが。

すぐさま男トイレを脱し左へ走りまた左へ入ると目の前には上に続く階段がそびえていた、タタタタと軽やかに上って行き最高段数歩手前ですっと立ち止まるとファティマはエイディルと向かい合う。

7話

「二階での作戦はたった一つ、“限界まで全ての敵を止め続ける”それだけだ。後は何も望まない、そしておれがある部屋へ入ったらお前はすぐに脱出しろ！」

最初にここへ入った時と同じ様な喋り方でエイディルに指示を出す、その一方的な考えに少し納得しなかったエイディルが口を挟もうと彼を見るが、それはすぐに彼自身で否定された。

目がいつにも増して真剣でありまたそれに恐怖を感じたからだった、喋ろうと口をあけたまま動けなくなってしまったのもそのため。

声にならず口から漏れたのは無音の息、下を向くのと同時ですっと息を吸いもう一度顔を合わせ「・・・ああ、任せておけ」ちよつとばかり口元を引き上げて話す。

向かいにいたファティマも口の端をあげてその言葉に応えた、そして両者心の中で5を数えだした。

5・・・、4・・・、3・・・、2・・・、1・・・0・・・、
、シーフが両手に短剣を握りしめ二階の床を踏むのを合図にエイディルも階段を抜けた。

階段を抜けてもまだ両側には壁、それでもすぐに左への曲がり角になる、目の前がお手洗いで右は窓。

走りながらきつちりと短剣を持ち角を曲がると鎧を全身にまとった人間が三人、うち二人が奥に残りがおれの目の前に、全員ここからの距離はバラバラだ。

つばを飲み込み構えを取ると相手もこちらに気づいたのか手に持っていた槍の切っ先をこちらに向ける、一番近くいたやつが腰を低くしすり足で近づいてきた。

鎧のせいもしくは構えのせいかも知れないがなんとなくどっしりとした雰囲気やつかから漂ってくる、互いに睨み合うこと数十秒、急

に足が重くなったような感覚がじんわり脳へ伝わるそんな時左から声が聞こえた。

「急げ！下のやつらに感づかれた、すぐ増援を持って上ってくるぞ！」顔だけ横に向け目線や体は階段の方へ向きっぱなしだ。

彼の一言で先ほどまで重く感じられた足は不意に軽くなり雰囲気もいつも通りに戻っている、にやっと顔を一瞬変化させると音も無く走り出す。

距離がすぐ縮まりあと2メートルとなったとき警備鎧が槍を突き出す、前に出した左手を使い槍の軌道を変え自分の右脇に納めると左肘を槍に突き下ろす。

バキッという音と共に柄が折れると小さく脇を締めていた右手でストレート、相手の顔面に短剣が当たると金属同士の高音が響いた。

短剣はもちろん切れない方を使用している、右のパンチを食らった警備鎧は衝撃によりズンと後ろへ倒れた、よっぽどさっきのが効いたのだろう全く動く気配が無い。

そんなやつをひよいと飛び越え次のやつを沈めにかかった、その時後ろからガチャガチャとした金属音が聞こえてきたが不安は全く無い、なにせファティマの目の前にはどこからか跳んできた一枚の白羽が浮遊していたからだ。

相手がきっちり槍を構えているにも関わらず真正面から突っ込んでいくその時左から素早く何かが飛び出してきた、瞬間的に両足を使っただけで急停止、止まった場所どころと回ると背中の真ん中辺りにチクッとした痛みが走ったが気にしない。

先程の体の向きとは正反対に回転させ左肘で飛び出してきたものを突く、またバキッとした音で槍の柄が折れる右足を引きもう一度体を回転させ元に戻る。

すると目の前には銀色の鋭いものが真っ直ぐにこちらへ向かっていて、両腕で顔面を守るように組むと運よく銀色のものは軌道を変え顔の斜め上を通して行った。

すかさず右手を引く様に手にした得物で柄の部分切る、すつと畳み込まれた右手から鎧の頭目がけフックを打ち出した。

最初同様けたたましい音が響き鎧はこちらから見て左に倒れたがその後ろにはもう一人警備鎧が槍を構えて待っていた、ファティマの上半身を視野に入れるや否や高速に槍を突き出す。

両手を使ってなんとか槍先を頭の上に逸らすと右つま先をやつの脇腹目がけ鋭く蹴り入れる、彼のブーツには鉄板が埋め込まれており鋭利な刃物でも易々と切ることができない。

相手の鎧に当たった瞬間ドンツの様なゴンツの様な鈍く響きのよい音が放たれる、蹴った所はべっこり凹み中にいる人の体のラインまでみえるのではないかと言うほど。

その警備鎧も衝撃により右の壁へ叩きつけられ静の状態になった、さつと後ろを振り向くと先程影から槍を放ってきた鎧とその少し向こうに背中を向けたエイデルの姿があった。

8話

不意打ち鎧はこちらではなくエイディルの方へ行っていた、しかももう彼の真後ろにまで距離を縮めている、鎧は指と指を絡ませる様に手を合わせ思いつき振り上げた。

やばいと思ったときにはもうやつがその体勢に入っておりここからの距離も二、三步でたどり着ける所ではない、後ろからも通路の奥のやつらが気づいたのかこちらへ近寄ってきているようだ。

やつが即席ハンマーをエイディルの頭に打ち下ろす瞬間やつの体へ斜めに光り輝く十字架が貫通した、直後全身の力を抜かれたようにどさっとその場に崩れ落ちた。

そしていつの間にか十字架は無くなっておりやつにもそれが貫通した外傷が見受けられない、目を点にしているとエイディルが「こいつは『普通の人』だから大丈夫だ、死んでいない。気にするな、行け！」背を向けたまま叫ぶ。

彼の発言に引かかる部分が見つかったがそこはそれを押しのける安心感でどこかへ行ってしまう、その時ぞわっと背中に寒気が駆け抜けると同時におれは床を左へ転がった。

視界が一回転してる間に聞こえてきた凶太く響く衝撃音、視界が元に戻ると前転してすかさず後ろの何かと距離をとる。

すぐ立ち上がると後ろを振り向くとそこにいたのは両手で持つほどの長い柄をつけた飛び切り大きい鉄槌だった、エイディルが持っていた同じ名前のそれに比べると数倍はでかかった。

その大鉄槌を持った鎧を先頭にやつの両翼を鉄槍鎧が固めている、やつらの後ろには左奥へ続く横幅人三人程度の通路があるがこの状態では簡単には抜けそうも無い。

通路を塞ぐように鎧共は仁王立ちして俺を待っていやがる、大鉄槌が自慢の得物を構えると両脇のやつらも同時に自分の武器を構え戦

闘態勢に入った。

先程までのやつらとは別格で彼らからは痛いほどの張り詰めた空気が伝わってくる、ここに来るまで感じなかった“死”という不の感情が頭の片隅に現れた。

静かに短剣を腰のホルダーに入れると一気に鉄の壁に突っ込んで行った、鎧たちは少し驚いたがすぐ平常へ戻るときっちりネズミ一匹に狙いを定める、大鉄槌の間合いに入ったのだろいういきなりものすごい速さで静止した状態から鉄槌を真っ直ぐに振り下ろしてきた。

その落下点ギリギリで膝を曲げ急停止、顔とつま先数センチのところに鉄の塊がブンツと風を切り通り過ぎる、すさまじい音と共に床を破壊する鉄槌とほぼ同時で目の前に向かって跳ぶ。

足のばねは人に自慢できるほどのものを持っておりそれを最大限に生かして鉄槌鎧の両肩に両手で着地する、状態的には逆立ちの様に膝を曲げ足を小さく畳む。

そこへすぐさま両隣から鋭い切っ先が飛んでくるが腕のみで上へ跳ね上がり槍先を交わす、そして顔を少し上に向け天井に着いてる折りたたんだ足で勢い良く床に突撃した。

顔面から着地する少し前に両腕を柔らかく伸ばしてクッションを作る、手のひらが地面に付くと肘でめいっばい突撃の力を分散させる、そのまま顎を引き前転。

回転力を殺さずに立ち上がり後ろを振り返らず突き進む、すると後ろからガシャンと大きな衝突音が聞こえ来たと思ったら次に目の前3メートルほどにいた警備鎧が動きをピタッと止める。

コンマ何秒か微動だにしなかったが瞬きをした次の瞬間、何かに衝突したかの様に後ろへ吹っ飛んでいく、すると今度は飛んでいったやつの隣にいた鎧がふわっと宙へ浮き右にいたもう一人の鎧に突撃して行った。

豪快に金属音を響かせ二人ともぐったりとする、得体の知れない力によって開かれた道の突き当たりは丁字路になっていた。

突き当たりの通路に出ると右左に首を動かし警備鎧の数を確認する、明らかに左のほうが多いつまりターゲットはそちらにいますと断言するのだ。

迷うことなく左へ突っ込んで行く、もちろん右にも三、四人鎧がいたがそれはさっきから後ろにいた天使様に任せよう。

手始めに一番手前の鎧の頭へ右ハイキック、さっと体を回転させ左ハイを首へ食らわせ踏ん張りを利かせると足一本で全身を持ち上げ右足を高く振り上げる。

右足を打ち落とす瞬間に左足を引っ込める、上からやってきた鉄板内臓のブーツは鎧の頭にかかると若干の手加減でめり込ませるとふわっと地面へ舞い降りた。

それと同時にしかかと落としを受けた鎧が前のめりに倒れる、もう何度目か分からないガシャンと言う音、それは相手に恐怖を植えつけるものになった。

9話

じりじり追い込まれて行く残りの鎧たち、後ろではエイディルが鎧二人を処理している、丁度こちらが残った三匹を通路の突き当りへ追い込んだところで背後からガラスの割れる音が聞こえた。

小さくなっていく断末魔を聞きながらおれは拳を前に構える、すると先程まで何もせず後退りしていたやつらが武器を構えこちらを睨み前進してきたのだ。

よっぽどの素人なのか恐怖に負けているのか槍の切っ先がプルプルと振るえ一点に狙いが定まっていけない、これ見よがしに一步で懷へ飛び込むと鋭く肘で頭を狙った。

敵が一瞬で間合いを詰めてきたのに驚いてとっさの反応が出来なかったが、目の前の鎧が右側へどさっと倒れた時ようやく我に戻り一心不乱で槍を前へ突き出した。

シュツと風を切るが肉は切らず狙ったところには何も無くただただ空間だけだった、啞然として辺りを見わたすがどこにも姿は無く代わりにあちら奥へいらした天使様がこちらへ歩みを進めていらっしやった。

ドアの向こうではまた窓の割れる音と遠ざかる断末魔が響いているそれから羽音が聞こえて遠ざかっていった、どうやら作戦通りエイディルは脱出したようだ。

ファティマはなんなく目的の部屋の中へたどり着いたのだが視界は真っ暗で顔に近づけた手でさえ見えないほど、シックスセンス第六感を研ぎ澄ますと右奥の方に何か四角いものがあるのがわかる。

その上にはなにやら人のようなものが横たわっている様だ、腰のホルダーから短剣を取り握りしめるとそれから数十秒程度指一本も動かせなくなった。

ここまできて彼の心に恐れが湧き出てきたのだ、人を殺すことへの

恐怖・躊躇いがゆっくり芯へ染み入っていく、シーフにとって常にその気持ちが命取りとなる。

今までは『まだ子どもだろう』と思われてモンスターを狩る任務のみを任されてきた、それはギルド長の心遣いでもあり周りのメンバーからの意見でもあった、つまりは本来の“人殺し”任務のための前準備。

悪い言い方しかないが“殺しに慣れてもらうため”のものだったのだ、だがやはりモンスターと人間とでは容姿も声も流れている血の色まで違う、躊躇いが生じるのは当たり前のこと。

それでもメンバーの皆は慣れたのだと言う『殺して欲しいやつは大悪党で、何人もの村人を拉致している』とか、『脱獄した殺人鬼の死刑囚を早く殺してくれ』とか、色々と任務に理由がついていてそれを正当化し殺しにいたっているのだと。

今殺ろうとしているやつも任務上悪い奴になっているが、今日一日の行動を見ているこちらからすると欠片も悪い奴に見えなかったのだ。

そうやって色々と考えているうちにある言葉へ行き着いた、『俺たちは悪を根絶やしにする正義の味方じゃねえ、だからと言って悪い事ばかりに手を染めるゲスヤロウでもねえ。分かるだろう？俺たちは中立だ、だがなあ人を殺めることは悪になる、いかなる理由であってもだ。まだお前にゃわからんだろうが、この世界のシステムによって“悪”と定義づけされるんだよ。だがしかし世界から悪と決め付けられても、正義・悪の価値観は自分で決めろ、それがシーフってもん』これはある日のリーダーからもらったものだ。

おれがギルドに入っただけですぐに教えられたこのギルドでの心構え、リーダーが考えるシーフの定義、それを心の中で三回繰り返しゆっくり呼吸するといったの間にか体は動かせる様になっていた。

決意を定めた膝の状態から立ち上がるときとぎちりと短剣を握りし

める、皮のグローブがギュギュと音を鳴らし持ち手に引っ付いていく。

絨毯の上を極力音を立てないようにゆっくりと移動していく、ドアから入って奥正面に窓があるようで遮光カーテンの下から月光が床に落ちていた、その光のせいか目が慣れたのかなんとなくで周りが薄らぼんやりと見えてきた。

のそのそベッドに近寄っていくその間無駄に大きく聞こえる足音が耳障りでしやうがなかった、やっとの思いでベッドの傍へ着くと右手の短剣を口へくわえ、そこに横たわっている人間の首辺りに手を近づける。

上半身を足と90度近くまで起き上がらせると一気にベッドに飛び乗りターゲットの後ろを取る、頭を右手でがっちりと鷲掴み左手の短剣で首元を押さえた。

そして次の段階へ移ろうとしたその時、バリンと巨大な音が部屋の中にこだますると同時にカーテンを引き千切り何かが転がってきた、月の碧い光に照らされたそれは赤を全身にまとったシーフだった。

10話

赤いテンガロンハットに赤いグローブ、上下共に真っ赤なシートの仕事装束を着用、それでいて膝下まであるブーツは茶色だがあまり浮いてない。

ファティマの服装を真紅色に染め上げた感じだが所々彼と違い、腰のホルダーは無く色々と道具を入れておく後ろのポーチまで無い、窓から突っ込んできた赤をじろじろと見ている黒に対して赤が言葉を放つ。

「・・・誰だ、お前は？」呟くような声で口を動かしながらゆっくりこちらに体を向ける、丁度真正面に向かい合ったとき帽子の下に薄っすら光を反射する眼が見えた。

ファティマと同じ薄い青色のような銀灰色のような瞳でこちらを睨む、その時ほんの一瞬だったがなんだか懐かしく暖かい気分に関心の中が満たされた気がした。

「・・・もう一度問う。・・・お前は誰だ？」ぼーっとこちらを見ている黒い奴に向かって先程と同様に喋る、それで我に戻った黒い奴がこう返してきた。

「おれはこいつに用があるもんだ」そう言いながら目線を手中で首から上を固められてるにいる男にそそぐ、「そうか・・・」ただ淡々と冷静に言葉を発する。

すると今度はあちら側から言葉が飛んできた、「お前は何しにここに来た？」すかさず「お前と同じだ・・・」こう返すと黒い奴がにっと口元を引き上げまたこちらに言葉を発する。

「ああ、なるほど。お前があの殺害予告状を出した奴か。・・・残念ながらこいつを殺させるわけにはいかない」そう言うのと固めていた腕を解き眠っている男を大きく揺さぶる、するとすぐ寝心地が悪くなったのか目を覚まし眠気眼で目の前の情報を脳へ送る。

たどり着いた情報により眠気はさっと引いていき完全に目を覚まし

た、粉々になったガラスそして共に床に転がるカーテン、そこに立っている赤い人間、もう一体どうなっているのかわからなかった。

頭の中がぐちゃぐちゃとしてきちんと考えが浮かばない、さらには吹き出てくる冷汗に混乱が激しくなる、そんな時後ろからひっそりと「あいつが殺害予告を送ってきた者です。いいですか良く聞いてください、私が3つ数えたらすぐに入口へ向かってください、鍵は開いてますので。後ろを見ては追いつかれてしまいますので決して見ることなく一階へ走ってください」耳元で静かに喋る。

一瞬恐怖を覚えたが、声が若く温かみを感じられるのと全く感じられない殺意により敵ではないと判断できた。

「君、名前は？」小声で話しながら後ろを向こうとする、だが首の回転は全く動かないままに終わった、頭がきちんと固められていて首を振ることが出来ないようになっていたので声の主の顔を拝むことが出来なかったのだ。

仕方なく首の力を緩めると後ろからまた小さな音が聞こえた、「“ルードマン”。そう憶えてください」確かにその通りだなんて思いながら名前を頭に記憶する「わかった」こちらも小さい声で応答する。

「では、行きますよ・・・」その言葉を聞いて非常にゆっくりと体を動きやすく傾ける、たった数ミリほどの動作で目の前にいる赤い殺し屋は構えを取り始めた。

それとほぼ同時で後ろの誰かが数を数え始める、「1・・・2・・・3！」不意に体が横へ投げ出されると床に落ちる音とは別にドンツという音が部屋に響く。

慌てて後ろを向こうと思ったが先程の約束を思い出し翻ることなく入口へ走った、ドアを開け部屋を出る最初の数歩は良かったでもすぐ異変が男の体に現れた。

足取りが重くなり視界がぼやけて悪くなる、走っていられなくなり

床に膝をドツと着き後ろを振り向くと、そこはまだ部屋の入口から十歩程度のところだったのだ。

その時腹から何かがこみ上げてきて咳と一緒に体外に出た生暖かいそれは、この明るい廊下のせいなのか一際鮮明に赤く見えた、・・・そして世界から色が消えてなくなった。

11話

「ターゲットの抹消を確認・・・」国会議員ディリユーソスがこの部屋を出て行ってから数秒後、右手に拳を作り何かを殴った後のような格好のまま赤い奴が呟く。

全くもって意味が分からなかった、奴の拳は獲物を捕らえることなく空を切った、それはどこから見ても明らかなことだ。

「意味不明な顔をしてるな・・・」ゆるく突き出した拳を自分のところに戻しながら話す、そしてきちんと構えらるとう一言付け足した。

「・・・受けてみるのが一番だ」そう喋り終わった瞬間ヒュッと右手を突き出す、体の内と外を強烈に刺激する衝撃に片膝を突いていたおれの体は後ろへ突き飛ばされた。

反射的にぐっと腹筋へ力を入れ前方へ倒れこむ、へその若干上を直撃したみたいだ、ヒリヒリ、じわじわと打たれたところが熱を持ってくる。

「んぐ・・・っはあ、はあ・・・」痛みで片目が勝手に力強く閉じられる、もう片方の目で辺りを見回した、何か物が飛んできたわけではないらしい証拠が見当たらない。

息を吸い込もうとした瞬間唐突に咳が出てきたが出てきたものはそれだけでは無かった、何か液体のようなものが腹から湧き上がり咳に乗じて体外に飛び出した。

それはこんな月の光しか入ってこない薄暗い部屋でも分かるどす黒いものだった、いやここでは黒く見えるが明かりが灯ればそれは真っ赤なものに変わる。

キッと赤い奴を睨むと丁度突き出したものを手元へ戻すところだった、「・・・分かったか？」頭に乗った帽子を片手で直しながら灰色の瞳はこちらを睨み返してくる。

「けほっ・・・なるほどね、あんた武道家だったのか・・・。通り

でおれと格好が細かく違うわけだ」打たれたようなところを片手で抑えながらベッドからゆっくりと下りると、ふっと一息吐き構えを取る。

「烈風撃・・・全身の気を拳に集中させ体外へ打ち出す業。食らった相手は殴られたような衝撃とダメージを受ける、外傷は無いが内臓への負担は驚くほどに大きい業・・・」指先の温度が一瞬で下がり指が冷たくなる。

「その通り・・・。だが俺はある人のを真似ただけ・・・、本物ではない」表情を変えずすらすると口から言葉を発する奴、その間もずっとこちらを鋭く凝視していた。

「それでも、この程度なら常人は気絶し放って置けば体内の大量出血で死ぬのか・・・」痛みも落ち着いてきたのをいいことに赤い奴に言葉をかける。

「その通りだ・・・。ターゲットはすでに食らってから2分、もう・・・落ちる頃だ」そう言って帽子に置いていた手を元に戻し首を鳴らす、それから両手のグローブをきゅっと言わせ手に密着させるとゆっくり構えを取る。

灰色と灰色ががっちり一本の直線で繋がっているかのように微動せず対立し、一歩右へ動くとも相手も同じ歩幅で付いてきて常におれの真正面へとやってくる。

窓の横まで移動してくると痺れを切らしたのか赤がずっと深く構え拳を打ち出す、一瞬だが打ち出されたものがほんのり青っぽく見えるのが分かった。

だが見えたとしてもそれは高速に直線状に向かってくる、反射神経をこれでもかと思ひ体に当たるギリギリのところでそれを避けると素早く前を向く、だが今までであった風景は無く見えたのは真っ黒な視界だけだった。

ゆらっと世界がぐらつき慌てて防御を取ろうと両手を前へ持ってい

くがそれよりも早く相手の蹴りが下から跳んできた、鋭く脇腹にめり込むとおれを元いた場所まで吹き飛ばした。

12話

ザツと床をずり滑りベッドの下までたどり着いた、酷い痛みと熱が片脇腹から滲んでるが動けないわけじゃない、ベッドに体重を預けながら立ち上がると赤い武道家がこちらへ一言言い放った。

「おれの任務は完了した。・・・外野も来たらしい。お前の相手は終わりだ・・・」ぴりぴりとした視線がおれから外れドアから窓の方へ向くと、そのまま歩みを進めただの四角い穴になった元窓から身を投げ出した。

ふっと息をつくと廊下の方が騒がしいのに気づく、どうやらエイデルの足止めはとつくの間に終わっており、下から来た警備兵たちがターゲットの元へ駆けつけたのだろう。

呼吸を整え息を殺し廊下へ聞き耳を立てる、聞こえてくるのは酷く落胆したトーンの声ばかり、その時警備の一人の声がはっきりとこちらの耳に届いた、「・・・だめです。亡くなってます」とっさにふうと息を吐きベッドに腰掛けた。

ぎいっと音を立ててベッドマッドが沈む、膝の上に置いた手に力がこもりしわを集めた、「畜生・・・」呟いた二文字は自分の今の気持ちと、そしてなによりあのときの自己満足な達成感へ投げつけたものだった。

ターゲットをベッドから投げ出し入口に向かわせたあの時、奴の能力を知らずとにかく逃がそうとした、今思うとそれはどんなに浅はかだっただろうかと悔やまれる。

でも本気で守りたかったら守りぬけたはずがおれは彼をただ横へ投げただけだった、そこでふと感じる矛盾を噛み締め“おれは彼を『^{ターゲット}ただの目的者』としか認識してなかったのか”そう言葉を頭の中に巡らせた。

その結果中途半端に助けて、中途半端にうだっている、悲しみにも暮れずにただ単に奴に殺されてしまつて残念だと思つていない・
・、おれは単なる馬鹿だった。

不意にガラスを失つた窓から強い風が入ってくる、部屋の中にある色々なものにぶつかりそしてターゲットとその家族が写つた写真立が床へ向かい、ガシャンと大きな音を立てて現実と共^{リアル}に砕け散つた。その音は部屋の外まで届きターゲットとの別れを惜しんでいた数名の警察兵の耳に入った、「・・・中で何かが割れる音が」一人が喋ると、「ああ。確かに聞こえた」二人目は声を潜めて周りに言う。

「ということは、まだ殺人犯が中に!？」目を大きくした三人目が辺りをキョロキョロ見回すと、「・・・確かめるぞ」全員の目を見ながら四人目がゆっくり立ち上がる、そして音を立てないように部屋の入口へ向かいドアの取っ手に手を掛けた。

一呼吸置き三つ数えてすばやく中へ突入したがそこはもぬけの殻で誰一人として存在しなかった、自分の得物を脇に構えながら慎重に部屋の内部へ進んでいくでもやっぱり何も無かった。

先程の音は外にまで聞こえるほど、中のファティマに聞こえないはずが無い、音が鳴つた途端ビクツと体を強ばらせ音源にくつと顔を向けた、そしてゆっくり息を吐き出すとベッドから即刻立ち上がり奴と同じ様に窓から身を投げた。

警備が手薄になった国会議事堂をすつと走り抜けながら先程考えていた事を片隅に軽く押し込める、いつでも思い出せるようにしてとりあえずは自分の泊まつている宿へ戻つていった。

「ねえ、ダリア大丈夫? あなたの顔色悪いわよ」古都ブルンネンシュティグの真ん中、大きな噴水のある広場のベンチで彼女が僕に話しかける、「ああ。大丈夫だよ、なんともない。ちょっと研究に集中しすぎたのかもしれない」僕は作り笑いにならない程度の笑みを彼女へ向けた。

「そう。無理だけはしちゃだめよ」困ったようにこちらへ笑いかけながらそう言う、「わかってるよ。あ、そうだ、そろそろお腹空かない？」こちらも困ったように笑った後、腰から掛けていた懐中時計を取り出して言った。

「・・・実は少しだけ空いてたの。あなたがあまりにも嬉しそうに露天商を回るんですもの、こちらでも楽しくなって空腹を忘れるほどだったわ」いたずらそうにこちらへ笑いかけてくる、「そういってもらえて嬉しいよ。僕だけが楽しんでいるのではないかとずっと思ってたんだ」こちらもその笑顔に返事する。

あなたがいつも思ってるのって研究のことだけだと思ってたわなんてくすりと笑いながら彼女は僕とほぼ同じタイミングでベンチから腰を上げ、食事どころを探すべく二人でそこらの細い通路に入った。その時、薄暗いはずのこの道が妙に明るいと感じ彼女はふと空を見上げた、「・・・はあ、綺麗なお月様ね」それに僕は釣られて空を仰いでしまった、自分が隠している事を彼女に打ち明けずに。

13話

『ドクン、ドクン』心臓が力強く鼓動を刻み耳の中からその音がこだましてくる、外にまで漏れているんじゃないかというぐらいな大ききで、月を見つめる彼の瞳孔は大きく広がり月をも取り込んでしまいそうな穴になっていた。

心拍数が徐々に徐々にながってきて気分が晴れやかになってきた、
「・・・ほんとうにいい月だね。なんだか気分が良いよ」体の内からの気持ちのいいリズムの中、彼は空に浮かぶ大きなまあるい物を見てうっすらと笑みを浮かべていた。

「そう？ 私は別に気分がよくなったりはしないけど、でもあなたならそうなのもおかしいわね」くすつと笑いながら口元に手を持っていく、「あなた月好きだったものね？」さっきよりも少し大きな声で無邪気に笑う彼女。

しかしそんな彼女の言葉も今のダリアの耳には届くことなくすつと通り抜けていってしまった、数秒の沈黙が生まれる、その沈黙の中彼女の耳に聞こえてきたのはすぐかすれた音、音と言うよりかは声に近いもので何か笑っているような興奮しているようなそんな感じのもの。

それは目の前のダリアから聞こえてくる、さっきの言葉に応答してくれなかったことも踏まえて突然冗談をついてみた、「ねえ！なんでも返事しないのよ、月ばかり見てないで早く行きましょ？ お腹、すいてるんでしょ？」わざと怒った様な言葉をついて彼に近づくがそれでもダリアは動こうとしない。

腰に両手を当てて少し前屈みになり上目遣いに、「ねえ！聞いているの？」少し首を傾けて口を尖らせ困ったような顔をする、その瞬間彼の口元から笑みが消え元に戻りゆっくり眼球から動かし顔を彼女の方へ向けた。

やっとこちらを向いてくれた彼の顔は彼女が見知っているものではなかった、瞳は月の様な黄金色で真ん中に黒い線のようなものはいっているし口はいつもより少し大きめで歯の先が全て鋭く尖っている、耳も尖っており周りにはふさふさと毛まで生えていた。

そしてなによりいつも優しく笑顔の絶えなかった彼が屍のように精気の全く感じられない顔をしている、亜死人の瞳が彼女の瞳と直線に並ぶ、ビクッと全身に電気が走ると同時にじわっと冷や汗がにじみ出た、一瞬で彼女の心が恐怖に浸かるそんな姿を見て彼はじっとりと笑った。

するといきなりものすごい速さで彼女の肩を鷲掴み彼女を逃げられないようにした、手には相当力が入っているらしく指が彼女の体にながちりと食い込んでいる、そのせいで彼女の顔が苦痛で歪んでいるがダリアは全く気にかげず一直線に目の前の女性を目に焼き付けていた。

「やめて……、い……痛い」無理やりに喉の奥から声を振り絞るがそれはまるで蟻同士の会話のように小さくはつきりしないものだった、ぐうっと不気味な顔が近づいてきて言う、「今日の君は本当に魅力的だね……、君の手や頭、足やお腹。どれもこれもおいしそうだ……」目先数センチ前で歯をギリつかせ笑みを浮かべる、ぞわっと背中に寒気が走り呼吸が乱れ勝手に涙が零れ落ちてくる、それでも自分を落ち着かせようと必死に深呼吸を繰り返す彼女、「さあ、食事の時間だ。君もお腹が空いているんだっけ？なら、その空腹を僕が満たしてあげるよ……」そんな彼女を楽しむかのように両目を大きく見開き全体を見わたすと、ゆっくり自分の顔を離していった。

彼の恐ろしい黄金の瞳が視界から消え去るとあれほどまでに乱れていた呼吸も通常に戻り涙もすっかり止まっていた、相変わらず腕だけはすごい力で押さえつけられているが足は何とか動かせる状態、

タイミングなんて見測ってる余裕は無い、ダリアの無防備なその股座目がけ全力で足を蹴り上げた。

当たった瞬間彼の体は垂直にほんの少しだけ宙を舞いどさっと地面にうずくまった、ようやく彼の手からも開放された彼女は彼から少し間を取ってうずくまる者に、「ねえ、ダリア！正気に戻って！私のこと思い出して！」会話のように目の前の人にだけ聞こえる声ではっきりとした言葉を投げかける、そんな彼は真っ暗闇の中にいた。

いつからいたのか分からないが前にも一度だけこんな事があった、その時も彼女とデートしていて月も綺麗な満月だったのを憶えている、それで月を見ていたらいつの間にかここにいて気がついていたら目の前には傷つき涙を流している彼女がいた、周りを見わたすと何かが壊れたような跡が僕を中心に広がっていた。

14話

「・・・なにがあつたんだ？」わけも分からず言葉を漏らす、哑然としている僕に彼女は抱きつきただ“よかった”とだけ言い続け泣いている、そんな彼女に何があつたのか問いただしてみるのがなんでもないの一点張りで詳しくは教えようとしてくれなかった。

帰宅後すぐに家中の古い書物を漁り出し自分の症状について調べてみた、その結果僕は代々“魔法都市スマグ”で有名な『ウルフマン』の遺伝子を受け継ぐ家系の子孫だった、先の症状もそのせいでウルフマンの力を自分の力でコントロールしない限りそれは一生続くと書かれていた。

「でも、どうしろって・・・」やり方だけはどこにも書いてなく必死に修行もこなしたが今この様だ、弱気になり暗闇の中で意識がフワフワと浮いていた時どこからか声が聞こえてきた、聞き覚えのある暖かく優しい声で僕は自分の体を呼び覚ます、目の前に映った光景はまだ暗闇だった。

しかし周りがなんだか薄明るい、そして自分が今うずくまっていることに気がついた、ゆっくりと顔を上げるとそこには真剣な表情でこちらに訴え掛ける彼女の姿があつた、「僕はいい・・・」思つたことを口に出すそれを彼女は聞き逃さなかった、タタツと近づき涙を浮かべ僕を思いっきり抱きしめたのだった。

「よかった・・・、よかった・・・」ただただ呪文のように僕の耳元でその言葉を繰り返す彼女、優しくも力強く彼女の細腕に抱きしめられた僕はまだ意識呆然のまま立ち膝を続け、数秒経った後ゆっくりと安堵で体を震わせる彼女を両手で包み込んだ。

彼女の耳元に頬を寄せすっと目を閉じた瞬間何かが自分の中心から湧き上がるのを感じ取り目を開けた、そう間違はなく僕の脳は体に電気信号を送ったはずだった、だが結果として目の前はおろか後ろ

上下左右だって黒一色の真っ暗闇、彼女を腕の中に納めていた僕はなぜか一人ぽつんと突っ立っていた。

周りは全く見えないのに自分の体だけは目の届く範囲隅々と見わたすことができた、その時ふっと前方から何か殺気の様な気配が漂うことなく一直線に僕へ突き刺さり僕はきつい目線を向けざるを得なかった、じわっと液体が布に染み渡るよう徐々に何かが姿を現す、まだはつきりと見えていないが自分とほぼ同じくらいの背の茶色い人らしきものだった。

それがはつきりと見えてくる頃僕の頭の中にある言葉とあるイメージが浮かび上がる、『ウルフマン』そして“目の前で首だけになった家族と破片鏡に映りこんだ自分の姿”、いつの間にかうつむいていた顔をあげると先程の茶色はくつきりと体全ての輪郭を僕の前に現していた、腕は太く丸太のようで手と足の指先には鋭い爪が長々と生えており逆三角形のガッチリとした体つき、そのくせ足は意外と細くかかとの位置が妙に高い。

ふさふさと柔らかく気持ちよさそうな茶色の毛を全身に茂らせており、ちらちらと体の横からこれまた気持ちよさそうなふさふさの尻尾を見え隠れさせる、頭顔は狼そのままで黄金色の瞳がこちらを睨み口元から白い牙をむき出している、まさに目の前にいるそれは古い書物に記述されていた通りの姿をした『ウルフマン』だった。

「・・・またオレをこの暗闇に戻したのは貴様か」ウウと喉を鳴らして鋭牙を見せつける、目鼻の周りの皮膚が両目の間に寄せられピクピクと口角筋が動いている、犬が威嚇するときに見せるあの顔をウルフマンは僕に向けるが、それに臆することなく僕は喋った、「ああ、その通りだ。僕がお前をここに戻した」実際は自分でも良く分かっていたなかったが強気で対応に当たる。

チツと舌打ちしながらも目線はこちらをずっと捉えたままだ、「まさかあの程度の魔力修験でオレ相手に抵抗するとは・・・、やはり

血か」そう言いながら威嚇の表情を緩めていくウルフマンを僕はずっと睨み続けた、「貴様の父親も長い年月を掛けてオレをこの闇に閉じ込めた。貴様にもその才能はあるようだが、まだまだ甘い・・・」にいと口元で笑うとすつと闇に溶け込み姿を眩ませた。

刹那あり一面の闇の中どこからともなくウルフマンがダリアに話しかけてくる、「オレはまだ何もしていない・・・、目覚めようともな。貴様が見た満月でオレは意識を起こされたに過ぎん、オレが起きたそれだけでさえもオレに支配されかけるぐらいだ・・・。オレが本気で貴様の体に乗っ取ろうとすればどうなるか・・・わかるだろう？」少し上ずった声が闇に響く、「それでも貴様は抗い続けるのか？」やつからの問に幾分も置かず僕は「ああ」と応えた。

フンと鼻を鳴らしてやつは少し間を空けてから喋りだした、「ならば遊びをしよう。簡単なことだ、これから貴様には数分ばかり時間をやる。その間に足掻けるだけ足掻くがいい・・・簡単に無に返してやろう」最後にまたフンと鼻を鳴らしてやつは話しかけなくなった、いつの間にやら軽くなった心を感じ、僕は何の音もしなくなった黒の世界から即刻現実へと戻っていった。

15話

たぶん現実へと戻ってきたのだろう、先と同じ闇の中だが彼女の甘い香りがする、そのままこの暖かな暗闇に使っていたい気持ちを抑え込みすつと目を開け彼女と向かい合う、いきなりのことに僕の胸で泣いていた彼女はフツと顔を上げ涙目でこちらを見つめた。

きよんとした彼女の肩に手を置いて幼い我が子へ何かを教える母のように僕は話した、「ミィセ、良く聞いて欲しい。僕はウルフマンなんだ。きちんと言えばその遺伝子を持つただけなんだけど・・・。以前デートしたときに僕が変になったことあるだろう、あれもこの遺伝子のせいなんだ。そして信じてくれないかもしれないがさっき自分の中のウルフマンと会話したんだ、終わり際やつは今から僕の体に乗っ取ると言って僕の前から姿を消した」ものすごく顔を強ばらせ彼女に言い続ける。

「でも、僕は乗っ取られる気なんて更々無い。やつに打ち勝つてもう二度と僕の体を勝手にさせないようにするよ」まだガチガチに強張っている顔で無理やりに笑顔を作り彼女へ向ける、「ダリア・・・」目に涙を浮かべているものの彼女の顔は少し笑ったように見えた、そしていつの間にか僕の顔はその強張りのせいで真顔に戻されていたのだった。

もう一度、今度はきちんと僕の話の話を聞いている彼女へこう言った、「いいかい、万が一のことを考えると君はここにいてはいけない、僕がやつに負けた場合君を傷つけてしまうかもしれないから・・・、だから今すぐここから離れるんだ。そして古都の南にある黄色い壁の民宿へ行つて僕の仲間を呼んできてほしい、名前はファティマとエイディル、彼らなら僕を何とかしてくれるから・・・」ミィセはこくつと頷き「わかったわ」と一言だけ言って僕にキスをし、それから再度僕に抱擁して駆け足で僕のもとを去って行った。

町のほぼ中心に近いこの薄暗い細道で数秒間手と体に残った彼女の温もりを噛み締めた後僕はすぐに人気の無さそうな所目がけて走り出した、通路を出ると予想だにもなかったほどの人があれだけ広がった道をびっしりに埋め尽くしていた、それもそのはず時間は夜の7時過ぎ、もうすぐこの祭りのメインイベントでもある4万5千発の花火が夜空を鮮やかに華やかに彩る、つまり今日の前に映っている人々はそれを見に噴水広場へ移動している途中なのだ。

僕の行きたい方向は彼らの波と正反対の方角、ここで無理にでも押し入ったら流されるのは目に見えている、「くっ、仕方ない。あまり魔力は使いたくないが・・・」そう言うのとベルトにつけていた短い杖を取り出し、それを八の字に振り数秒間の詠唱を唱え終わると杖を高々と掲げた、すると彼を中心としてハリケーンのように風が引き寄せられ体のシルエツト通りにまとわりついた時、全ての風が彼の中へ吸い込まれ瞬く間に見ることが不可能な透明な翼を生やした。

すぐに杖を元に戻すと彼は何のためらいもなく目の前を轟々と流れている人の川に飛び込んでいった、だが驚くべきことに彼は全くその流れに足をとられることなく対岸へ走りつくとそのままのスピードで通路を走り抜ける、でもそのスピードが尋常ではなく本当に風のように通路を縫って駆けて行く、ようやく人の全くいない場所に出た瞬間、全身に今まで感じたことの無い血液の熱いほとぼりが駆け巡り彼は自身の両手で体をぐっと掴み膝をついた。

すると体の中からやつの声がこだまして来る、「もうお終いか？やはりだめだったようだな、貴様のようなちんけな魔力でオレをたかがこの程度しか抑え切れなかったとは・・・ふん、興も冷めた。遊びもこれまで、覚悟しろ」そう言い放った途端人間の彼は意識を失い、それから数秒あってとうとう獣の彼が完全に目を覚ましてしまった。

獣の彼は立ち膝からゆっくり立ち上がると全身の力を抜いてダラツと上半身を曲げた、するとボコボコと肩甲骨の辺りから体全てにかけて異常なまでに筋肉が発達、ぶらつとした両手には長さ4センチほどの長く鋭い爪が生えており足にも同じ様な爪が生えてきた、ずっとグルグルと唸っている口や顔はもう人間のものではなく狼そのものになってしまっていた。

最後は体中からふさふさとした茶色の毛が生え出て彼を包み込んだ、それからいきなり体をぐっと起こして上体を逸らし天高くそびえる月に向かって力一杯吠えた、長い間遠吠えを続けた後体を元の状態に戻して呟いた、「・・・悪くない、オレが生きていた頃となんら変わらない動きだ。さすが“レーニムトン”の血だけはある・・・。だが馬鹿よなやつも、あんなところで風属性系最上級魔法『ヘイスト』を使うとは。自分を犠牲にして他人を守ったとでも言いたいのか・・・、はっ！馬鹿らしい」多少笑いを堪えた声を口から漏らす。

16話（前書き）

3／2 am 02.. 06～13行目『その一発を皮切りに』から
改変しました。

16話

最後は体中からふさふさとした茶色の毛が生え出て彼を包み込んだ、それからいきなり体をぐっと起こして上体を逸らし天高くそびえる月に向かって力一杯吠えた、長い間遠吠えを続けた後体を元の状態に戻して呟いた、「・・・悪くない、オレが生きていた頃となんら変わらない動きだ。さすが“レーニムトン”の血だけはある・・・。だが馬鹿よなやつも、あんなところで風属性系最上級魔法『ヘイスト』を使うとは。自分を犠牲にして他人を守ったとしても言いたいのか・・・、はっ！馬鹿らしい」多少笑いを堪えた声を口から漏らす。数回ピクピクと体を震わせると笑いの波が治まったのか震えが止まった体を揺らしながら歩みを始めた、腕が重いのか肩が重いのかウルフマンは上半身をずっと曲げっぱなしのまま歩みを続ける、空にはまだ満月の月だけが輝いており華やかさは無い、だがその時ピュウと音を立てて何かが夜空へ飛んでいく噴水広場はシュツと静まり返り人の足音さえも聞こえなくなった、それからすぐにバーンと言う音と共に薄暗かった濃紺の空には色鮮やかな火の粉の花が大きく咲き誇った。

その一発を皮切りに次々と夜空へ綺麗な花が赤や青や黄色に緑と華やかに咲き、古都にいる全ての人々をそれぞれの色に照らし出す、ほとんどの人はそれを瞳に焼き付けるように見上げている、民宿に向かっているミイセも例外ではない、前を見つめ走りながらもチラチラと上の光源を視野に入れ彼のことを頭にめぐらせる、急がないとと焦りはするがこんなに全力で走ったことの少ない彼女の足は思うように体についてきてはくれない、そして心臓もきゅうきゅうと絞まり息が苦しくなって余計に足をもつれさせる。

ようやく古都南への入口でもある南水路橋、通称“みなみずばし南水橋”を渡り切ったところでパンパンに張った足を使い、一步一步地面を擦るよ

うにして速度緩めながら止まった、スカートの裾をつかんでいた手を放して膝にもっていき全身で小刻みに息をした、額にはじつとりと汗をかいておりこんな祭りの最中には似つかわしくない、ポケットからハンカチを取り出してトントンと額の汗を拭き左の方に少しだけ見えている黄色の建物目がけてまた走り出した、あれこそが彼の言っていた民宿であることを願って。

少し前に民宿へ戻ってきたファティマはエイデルにあの部屋の中のことを事細かに説明した、赤い武道家のことやターゲットのことを、そうして全てを聞き終わった天使は「・・・そうか。ご苦労だったな。まあこんなこと言う和不駄だろうが、残りの日数はせめて祭りを楽しんで帰るぞ」そうおれがずっと落ち込まないよう彼なりの気を利かせてそんな言葉を掛けてくれた、そんな気遣いがなんだかくすぐつたくてふっと前を見ながら彼と笑いあった、そんな時一階から「ファティマさん、お客さんですよ。急な用件だそうです」とお婆さんの呼ぶ声がした。

先ほどまで笑顔だった両者はすっと睨むような鋭い眼差しでアイコンタクトをした、「・・・まさか姿を」エイデルが静かに呟くが「いや、それはない。おれはここに帰ってくるときでもシックスセンスを働かせていた、見つかることも無ければ気配を知られることも無い」ファティマは当たり前のように強くそう言った、「まあだとしてもここはおれが出るべきだ。相手はお前に用があるらしい、一旦おれが出て安全ならここに上げ、危険だと感じだ場合これを光らせる。そしたら窓からでもどこからでもいい、逃げろ」不意にいつも隠している翼を広げ胸の前へ、ぷちっと一本の羽を引き抜きファティマへ手渡した、「わかった。けどわかつてると思うが決して人前で力は使うなよ、ただの“人間”として振舞え」そうファティマが返すとドアを開けながらあいている手を振った。

コツコツと足音を立てて天使が下へ下りていくその間に一応脱出する用意だけは整えてドアの前で静かに待機していた、十数秒間しん

と静まり返った二階に突然タタタタと軽い足音が響き、そしてこのドアの目の前で止まったかと思うと何の躊躇いもなくドアを開け放った、とっさに身を引いてドアから離れ目の前を見ると一人の顔立ちの綺麗な女性が衣服を乱し息を切らせて立っていたのだった、ハアハアと酷く息を切らして何かを話そうとするが、全く声にならず大量の吐息が漏れるだけ、そんな彼女の姿を見かねたファティマは、「何回か深呼吸してみると良いですよ」と、同意を求めるように言った。

彼女も言われた通りにスーハーと深く大きく空気を吸っては吐きと言う一連の動きを何度かした、そうして全身の脈打ちが少し治まってきたところで「あー・・・、あー・・・」発声練習を始める彼女、そうして相手に伝わる声になったところでこう言った、「ダリアが・・・ダリアが大変なんです。彼を助けてください！お願いします！」焦りと恐怖が入り乱れる様な声色は、きちんと何があったのか話してもらおうなんて考えているファティマにも、あとから彼女を追ってきたエイディルにもただ事ではないことを瞬時に理解させるほどだった。

「わかりました。ダリアとは知り合ってまだ日が浅いですが、ここまで一緒に来た友、仲間であることに変わりありません。何があったのか知りませんがおれたちで力になれることならなんでもしましょう。まずは彼の元へ連れて行ってください」素晴らしいながら黒のテングロンハットを少し深めに被り腰の短剣ホルダーの絞まり具合を手探りで確かめた、「なら、ぐずぐずしてはいられませんね。彼の場所大体でいいので教えてもらえますか？すぐにそこへお運びしましょう」こういうことなのかさっぱり分からなくて、頭を下げていた彼女は不思議そうにエイディルを見た、すると彼は「場所を言ったら少しだけ目を閉じててもらえますか？」と優しくにんえんした。

その受け答えにも不思議に思ったが今はそんな事を言っている場合ではない、雑念を振り捨てエイディルに先ほどまで自分たちがいた

場所を告げる、「わかりました。では目を瞑ってください」僧侶の彼が微笑んで頷くと彼女も頷き目を閉じた、暗い中でふっと暖かいような感覚が全身を包むと次の瞬間にはもう夜の冷たい空気が体をつついていた、先ほどまでは本当に小さくしか聞こえていなかった祭りの騒ぎも、今では四方八方からうるさいほどに活気溢れた歓声が耳に流れ込んでくる、その時「目を開けてもいいですよ」と先程聞いた男の人の声が耳元近くから発せられた、ずっとミィセが目を開けてみるともうそこはダリアの身に異変が起こった小路だった。

16話（後書き）

次の更新は後々お伝えします。

17話

「え!？」焦りの色だった彼女の心情も、僧侶であり天使であるエイディルの手により一瞬で驚嘆に塗りつぶされ一時の落ち着きを取り戻させたのだった。がやはり一時のこと、すぐにダリアがいないことを彼女の脳が把握する、「ダリアがいない・・・、まさかもう!?・・・でも、周りは」ぶつぶつとなにやら口を動かしながら辺りを見わたす彼女、その様子を後ろから眺めていたシーフと僧侶の二人はアイコンタクトを交わし協力してダリアを探し始めた。シーフのファティマはシックスセンスで低範囲を、天使のエイディルは“ディテクティングエビル”と呼ばれる、天上界で一般的に『周辺にいる動物や生物、物にいたるまでの邪悪な気を探知する』・『あるものの魂を探知し、その居場所や行動の特定を行える』・『書物に示された技を使って広範囲を調べてみると、北西の方角にも』のすぐく大きな邪悪の塊がゆっくり歩いているのを発見した。

エイディルがこれはダリアではないだろうと思って無視しようとしたその時、真っ黒い魂の影から一瞬流れ出た青白い魂の波に天使は我を疑った、それは一度だけ馬車の中で見たダリアの魂と酷似していたからだ。すぐさままぶたを上げファティマとダリアの彼女に告げた、「ダリアが見つかりましたが、どうやらいつも彼とはどこか違うようです。急ぎましょう、もしかしたら彼は死んでしまいかもしれない」ファティマは黙って天使の肩に手を乗せるが彼女は目を見開いたまま微動だにせずその場に立ち尽くしている、「なにをしているんですか、早く私の肩に手を置いて!」エイディルの呼びかけにも応じずただ動かない、少し間があっても動かない彼女の手首を強引に掴み天使はダリアの元へと飛んだ。

耳障りなドンドンという低い音が空から絶え間なく降って来きては体の中で勝手に振動している、音と共に様々な色が折角の満月の輝きとオレの喜びを削り取り、久方ぶりの現世だというのに気分が暗

くなってしまう、せつかく真っ暗な空に公然と浮かぶ唯一無二の満月を見ながらオオウと一声叫びたかったのだが・・・、それさえも叶わないとは・・・全く今の世は騒がしいのを好む輩が多すぎるな、そう声に出さず呟いたのは狼の顔を持ち人間の体を持つウルフマンだった。

のしのしと上半身と手を宙ぶらりんで揺らしながら彼はどこへ行くでもなくただただ歩いていて、そんな時左手に昔見た旧ゴドム共和国城跡がうつすらながらも異様な存在感でたたずんでいるのが目に入ってきた、懐かしむことも悪くないと彼はゆったりしたそのままの足取りでそこへ歩いていると、ふとその城跡地下から誰かが出てくるのが見える、「誰だあいつは？」口から声を微量に漏らしながら一歩一歩そこに近づいていくウルフマン、そのおぞましい邪悪を感じ取ったのか地下から出てきた奴はふつと彼に振り向きすぐ顔の向きを元に戻してそこから歩き出した。

彼は歩みを速めることなくそこへ向かって行く、奴は城跡から完全に全身を出すとすうっと茶色の彼の方を向き武道の構えを取った、

「オレのこの気を感じ取り逃げることなく勝負を挑んでくるか・・・、なるほどオレに勝てる自信と腕を持っているらしい、中々面白い奴も現世にはいたようだ」とほくそ笑みながら口の中で呟きつつも徐々にそいつに接近していくウルフマンに対し奴が声をあげた、「・・・ウルフマン。この世にはもういないと思っていたが見当違いだったらしい。お前は俺の指名手配書ビンゴブックに載っていない、だがお前を殺す。・・・俺が強くなるために、ある人に近づくために」より一層拳に力を込める奴。

そんな事言われたらしようがないとお返しばかりに茶色の彼も声を出した、「貴様にオレが倒せるとでも思っているのか、ふん、ふざけた野郎だ。貴様のような脳が無い武道家を何人もこの手にかけてきた・・・、自分の腕を過信する奴ほどによく吠えすぐ死ぬ。貴様はその事はないんだろうな？きちんと遊んでくれよ。今オレは気

分が悪いんだ……。本当ならこんな言葉なんぞ発することなく、貴様の咽笛を噛み千切り今宵の肴にでもしようと思ったところだが、如何せん俺の体はまだきちんと動いてはくれない。だが貴様を殺すだけなら造作も無いことだ」武道家の数メートル前まで来てぴたと止まり戦闘準備に入るウルフマン。

緊迫した空気が彼らの周りを流れていく、耳に入ってくるのは風の音とざわざわとした木々の音、ドンドン低い音はまだ聞こえているけれど気にならなくてワイワイとした人々の声は耳にも入らなかった、数十秒ずっと動くことなく立ち尽くす二人の目の前を一枚の葉っぱが駆け抜けていった刹那、両者はその場からいなくなり意味の無い単なる殺し合いが幕を開けた。

先手はウルフマン、あの図体からは想像も出来ないほど素早い動きで相手に隙を与える暇も無く猛攻を繰り出す、左手を下から振り上げすぐに右手を横になぎ払うとまた左手が今度は横から襲ってくる、一発でも当たった瞬間次の一発が腹をえぐりまた次が腕を切り裂く、避けようと思う間も長く鋭い爪が自分の体をかきむしり続けるだろう、だがそれを顔色一つ変えずにかわしていく武道家、全ての攻撃を紙一重よりも早く避けていったその時唐突ウルフマンが攻撃方法を変えた。

その瞬間を見逃すまいと今度は後手だった武道家が攻撃を開始した、彼の突き出した腕をガッチリ掴み足を払う、空中に浮いたウルフマンの顔面目がけ前進しながら裏拳を繰り出すが空いていたもう一方の手に防がれてしまった、すぐさま固めていた腕を解きその手を彼の腹に打ち込むもまたもや受け止められる、そのまま反動で彼は後ろへ下がり武道家はもう一度その場で構え直した、また両者に流れる緊張その二人の十数メートル離れた場所がパッと光ったかと思うとそこにシーフと天使、そしてまだ成人してから年端も行かない町娘が現れたのだった。

18話

彼女は目の前に展開されている光景を目の当たりにし、動きが止み思考が止み彼女を象っている物全てが停止したように思えた時、一つだけ頭の中から浮かんでくるものがあつた、一瞬にして瞳の内側に映し出された映像は以前起きた“あの時のこと”だった。

ミイセが成人を向かえてまだ間もない頃、彼女は古都のほぼ中央に位置する花屋『マリリアン』の看板娘として働き始めていたが、そこは彼女の実家でもあり父であるダニエルと母であるマリアの二人が商いをしている店だった。

当初ミイセは古都の東側にある郵便局に勤める予定だったが、母のマリアが娘の独り立ちを少々渋っていたのだ、「あなたはまだ社会のことを何も知らない新米なのだから、もしあなたになにかあったらと思うと心配で夜も眠れないの・・・」とここに残るようにと言葉に出さずに懇願する母を見て父は「なら、マリリアンで働かせてみればいいじゃないか。それならまあ従業員は家族だけだが、母さんが言う社会のこととやらも多少は知ることが出来るんじゃないか？」私と母の肩をぽんぽんと優しく叩きながら微笑んだ。

その言葉に私も母もにっこりと笑って賛成し、こうして私が花屋の看板娘として働く様になったそんなある日、一人の見知らぬ長髪の男性が店前のある花を見てうんうんと頷きながらノートにメモを書いていた、着ているコートは所々に染みがあり服もいたるところで糸がほつれてダメになっている、変な人が来たなあともミイセは思いながら店前に出す花の鉢をかかえて彼の近くまで近づいていった。すぐ隣につくとなんとも言えない臭いとその男から発せられているあれ？この匂いどこかで嗅いだ様など彼女が上を見ながら考え込んでいると、「うん、これなら小さな妖精の笑顔（フェアリースマイル）の代替になるかもしれない。匂いも形もどことなく似てるし・

・」そう長髪の男がメモを真剣に見つめながら呟いた、その言葉に「あ、そうか！フェアリーズ・スマイルの匂いだ」とミイセは子どものような笑顔で嬉しそうに声を出した。

謎が解けたことでスツキリした彼女はようやく自分の仕事に取り掛かりだした、だがそれと同時に男は先ほど背中から聞こえてきた『フェアリーズ・スマイル』と言う単語がどうしても気になりだしたのだ、聞いてみたい、もっと知りたいという沸々とした研究者魂に火がついた、「あの、すみません。その『フェアリーズ・スマイル』と言うのは何なのですか？小さな妖精の笑顔（フェアリースマイル）とは何が違うのですか？」バツと後ろを振り返った長髪の男が彼女の肩を掴んでじっとに迫ってきた、「え、え！？」とどんどん迫ってくる予期せぬ整った顔に彼女は頬を赤らめて言葉を失った。

そんな彼女を見た男はやっと自分が今なにをしているのかに気づき、すぐさま肩から手を払い逃げるように彼女から数歩離れた、なんだか気まずい雰囲気が二人の間に漂いだす、店の前を歩いている人たちも店内にいる人たちも全く気づくことなく行動している、彼女の母マリアもその一人だった、場が変な空気になってから少しの時間が経つと男の方は落ち着きを取り戻し何とかして空気を変えようと話しかけようとした瞬間、「あら、初めてのお客さん？フラワースヨップ、マリリアンへようこそ。ごゆっくり見て行ってくださいね」店内からひょっと顔を出したマリアが顔を背け合っている二人にそう言った。

二人を無邪気な笑顔で見つめるとミイセにだけウインクをしながらスタスタと店の中へ戻っていった、これだけでミイセは気を静めることが出来た、幼い頃彼女は度々自分には出来ないもしくはわからないと知ると泣き出す癖があった、そんな時マリアが娘の近くに寄って行き、「あら、また泣いてるの？」と言いながら頭を撫で泣き止ませると、「どうして泣いてたの？できないことでもあった？」そう理由を尋ねながら娘ができなかったことを一緒にやり始め、少し

でも娘がやり方を理解したと見ると顔を覗き込んでパチリとウインクをしました家事に戻っていく、つまり昔からマリアがミイセに向かってしていた合図“頑張って”の意がこもった行為だったのだ。

「また助けてくれてありがとう、私、頑張るね」そう彼女は心の中で呟いて彼を見ると、「さっきはごめんなさい、ちよつとビツクリしてしまって。せっかくお花のことで質問してくださいのに取り乱してしまいました」少しうつむき加減の上目遣いで彼を見る、「いえいえ、こちらの方こそあんなこととしてしまって申し訳ない。つい好奇心が暴れだしてしまって」こちらも若干うつむき加減で彼女に話す、騒がしく感じるほどの周りの足音、辺りにあったおかしな雰囲気はいつの間にか消え去っていて元通りになっていた。

するとミイセがクスクスと笑い出した、「え・・・？あの、僕、変なこと言いましたか？」と彼が尋ねると彼女は、「・・・う。だってあなたの言った好奇心が暴れだしたってそんな言葉、今使ってる人なんてそうそういませんよ」笑いが落ち着くところ話した、「え？だって、友達から貸してもらった本にそう書いてましたよ」ものすごく驚いた顔で彼女を見る彼、その行動のせいなのかはたまた彼の顔が面白かったのかまたクスクスと笑い出した彼女を不思議そうに思いながらもなぜだか心底おかしくなり彼は釣られ笑いをしたのだった。

19話

数秒後笑いの波が治まった頃、「あ、そういえば忘れてました。先ほどの質問の答えをお教えしてませんでしたね。小さな妖精の笑顔（フェアリースマイル）とフェアリーズ・スマイルの違いは生えているところと育つ環境なんです」思い出したように私は彼からの要望に応えた。

突然私が話し出したことにも動ぜず、彼はうんうん頷きながらくしやくしやくのメモ用紙に私の言葉を書き写していく。

「匂いや形がどことなく似ているのは偶然で、実はまったくの別種なんですよ。もっと細かく言ってしまうと小さな妖精の笑顔（フェアリースマイル）の匂いはほのかに酸味を帯びていて、フェアリーズ・スマイルは甘ったるくてほんのちよつと渋みのある匂いなんです」と専門知識をつらつら並べていく私、それも嫌な顔一つせずにメモしていく彼。

それから私はその二つの花について思いつくだけ話していった、彼はその間もたまに質問を間に入れながらメモを書き続けた。

そろそろ知識が底をつく頃にふと上を向くと、さっきまで晴れていた空は厚い雲に覆われすっかり太陽が隠されるほどだった。

すると後ろから「お客様、その子を借りても大丈夫かしら？ 雨が降りそうだから店の外にある花を中に入れようと思ったのだけれど、手が足りなくて」両手で抱えるほどの大きな鉢を持った母が笑顔で彼に向けて喋っていた。

「あ、はい。すみません、ずっとこの方を呼び止めてしまっていて。僕の方はもう十分助かりましたので、ありがとうございました」彼はメモをしまいながら私たち親子に視線を向け、母には謝罪を私にはお礼を返してきた。

「それでは失礼します。今度来るときはきちんとお花を買わせてもらいますね」そう言いながら忙しなく身支度をしてすっと一礼し、

彼は少し降り出してきた雨の中を走って行った。

そんな彼を見送りながらこちらに一礼しすぐさま花たちの運搬を開始した。

その日の夜、私は母と父から質問攻めにあっていた。

あなたに質問してきた人は誰なのかとか、どんな話をしたの？とか、私の好みだったの？とか・・・。

最後の質問の時、彼に対して何とも思っていなかったけれど、いきなりのそんな言葉にかあつと顔が赤くなり誤解されてしまったし、そのあとずっと眠るまで彼のことを考えてしまった。

次の日、さらに次の日も私は休みなく店の手伝いを進んで行った、別に彼のこと気がなくなってとかではないが、なんとなくあんな真剣に私の話を聞いてくれた彼にもう一度会いたいと心の隅で思ってたのだろう。

それから2週間ほどたった頃、その日もいい天気で外の花に水をかけていたそんな時だった。

「どうも、お久しぶりです」と不意に後ろから声かけられて、ジョウロを傾けているにもかかわらずそのまま振り向くと、そこにいたのはいつかに来たフェアリーズ・スマイルの匂いを付けた彼だった。

「ああ！どうもお久・・・あ！」驚きの声を上げたのはジョウロからの水がしとしと彼の靴とそのあたりを濡らしているのに気付いたから、急いでジョウロを除けると今度は後ろにいた父のエプロンにかかってしまった。

「わっぷ！つめてえ・・・」そう言いながら父は笑っていた、きつと怒ってないと言う意思を伝えたかったのだろう、「ふたりともごめんなさい。ちよつとうっかりしてて」私は二人の濡れたところを自分のハンカチでふき、ジョウロを地面に置いた。

そして改めて彼に挨拶した、それから「今日は何の花のことを知りたいんですか？」と得意げに話すと、「いえ、今日はそのことではないんです。この前のお礼にと来ました」彼はにっこり笑いながら

言ったあとに少し改まって「お茶でもいかがですか？」少し頬を赤くしてそう言った。

あまりに突然のことだったのですぐに返事ができずに数秒固まってしまった、妙な空気になって数秒後、ようやく私は彼から受けた言葉がお誘いだったことに気づいて顔を真っ赤にしながらかう答えた、「え・・・あの・・・、私でよければ」彼は嬉しそうに笑い、私は恥ずかしくも真っ赤に頬を染め目を泳がせた。

20話

それから、私はお茶をする日程や場所、時間と少しの世間話をして彼と別れた。

店の片づけを済ませた後の夕食は、以前よりさらにひどい質問攻めとなった。

母からは、「よかったじゃない、お茶に誘ってもらって。・・・それでどこ行くつもりなの？」とか、「もし、高級そうなお店に行くのだったら、ドレス、ないんじゃない？お母さんのやつ、昔の服だけどそんなにセンス悪くないわよ？貸してあげましょうか？」とか、私よりも遥かに浮かれた言葉が発せられた。

父は、「んん、やはり顔立ちは悪くない、性格もこの前見た限りではよい青年と見たな。・・・そういえば、前は聞きそびれたが、彼の出身はどこなんだ、ミイセ？」やら、「俺の見た感じでは、彼は研究者か何かだな。うちに来るってことは、植物の研究でもしてるのだろうか・・・。そこらへんは知ってるのかミイセ？」なんて言う、彼のことに關してばかりだった。

そんな二人からの言葉に適当な答えを言っていく、ようやく夕食をきちんと食器まで片付け終えたのは、いつもシャワーを浴びる時間よりさらに遅い時間だった。

私も母ほどではないが心中穏やかではなかった、妙に早い鼓動が子供の時のクリスマスを思い出させる。

楽しみがはちきれんばかりに心を満たしていくあの感覚、それが今自分の身に起こっている、加えて今回は不安と言う要素も含まれている。

男の人との“お茶”、つまりはデートはこの年まで一回もなかった、何事も初めてはこんなにもドキドキするものだろう。

せっかくシャワーに入ってリラックスしようと思ったが、それは叶わずじまい、白の素気ないネグリジェを着てバスルームを出ると、

両親にお休みの挨拶をして大人しく部屋に戻った。

戻ってすぐ私は日記に今日のこと記すと、ランプの灯を消し、ベッドへ入った、そこから10分程経っただろうか、目を閉じたままだった私は未だに眠ることができないでいた。

それでも私は目を瞑っていれば直に眠るだろうと思いつつもまださらに20分ほど時を過ごした、だがそれは無駄に終わってしまったく眠りに落ちていない自分がそこにいた。

仕方なくベッドの上に座り込み窓の外を眺める、「……眠れない。どうしよう?……はあ、私もお母さんのこと言えないなあ」そう呟いた私は顔に仄かな笑みを浮かべた。

その日の夜空はほぼ丸になった月が、星たちの断末光を遮るかのように煌々と黄色に輝いていた、もう少しで満月、きつとのその日は綺麗な夜空になるんだろうな……なんて柄にもなく思ったりしながらゆっくり体を倒していった。

二日後、私は次の日に備えて色々と買い物をしていた。

母からの勧めではあったけど、自分でも欲しいものがあったので嫌だとは思わなかったから。

買うものは服と靴、それから母のリクエストで花の模様が入った生地と父に頼まれたウィスキー、それと私の目的の物だった香水瓶と純水この6つ。

それぞれお店が違うので古都の中を忙しく歩き回った、出かける時間が遅かったこともあってかあたりはもう外灯のオレンジに染まっていた。

ようやく最後の香水店に入った頃には明日真ん丸に満ちる月が結構な高さまであがっていた、店には私しかいなく常連ということもあり、たった2つの品を買い店を出るまで1時間近くかかってしまった。

店員さんと別れの挨拶を交わして、気分よく家に帰る途中たまたま遠くの方から何かが崩れた音が耳に入ってきた。

いつもはそんなに気にならないが、その時の私は気まぐれで好奇心が沸き、何の躊躇いもなく音源に近づいていった、そしてうきうきした気分の私が現場について目にしたのは非常に大きな人らしきものだった。

それがこちらを睨んだ瞬間、さっきまであったうきうきした気持ちはどこかに飛んでいき、代わりに恐怖がものすごい勢いで心の奥底から湧き出した、そんな私の顔を見たそれは不気味に白く光らせた歯を見せ笑ったのだった。

20話（後書き）

みなさん、お待たせしました（待っていた人がいるかわかりませんがWWW）

かなり間が空いてしまい、次を待っていた方々には申し訳なかったです。

久しぶりに書いたので、誤字脱字があるかもしれません、あれば感想欄に書いていただけると助かります。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349p/>

紅い石~The Red Stone Story's~

2011年9月24日00時33分発行